

日本への回帰

平成4年 阿蘇合宿レポート

第28集



大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

日本への回帰
(第二十八集)

—第三十七回学生青年合宿教室(阿蘇)の記録より—

は し が き

ソ連・東ヨーロッパにおける共産党政権の歴史的な崩壊は、生身の人間を無機物のやうに扱ふ社会主義計画経済理論の破綻を示したものであったが、それはまた四十有余年に及んだ東西冷戦の終焉を告げるものでもあった。いま世界は、偏頗な政治イデオロギーの退潮とともに、いつの時代も底流として存在してゐる地域主義的な傾向が否応なしに目につくやうになつてきた。

旧ソ連地区での民族対立や旧ユーゴスラビアの血腥い分裂劇を見るまでもなく、民族的感情のもつれからくる火種が、中東で、アフリカで、アジアで……くすぶつてゐる。必然的に小の自存をかけた反撥を呼び起す大の小を呑み込まうとする動きもあれば、やり場のない宿怨に発する紛争もある。自らの個別的価値のしかるべき居場所を求める根源的蠢動は、今後とも各地で陰に陽に続くことだらう。

西ヨーロッパではECの市場統合が一段と進み「ヒト・モノ・カネの自由化」の段階から、さらに加盟十二ヶ国は「欧州中央銀行」を設立して統一通貨を発行することで合意してゐる。北アメリカでも、アメリカ合衆国・カナダ・メキシコの三ヶ国から成る北アメリカ自由貿易協定（NAFTA）が域内の経済力・技術力・労働力・天然資源をリンクさせようと具体的な歩みを始めてゐる。

焦臭い民族紛争と西ヨーロッパ・北アメリカでのいはゆるボーダーレス化とは一見、矛盾した動きのやうだが、それぞれが自らの存立を賭けての選択であつてみれば、両者の間には通底するものがあるはずである。いはば後者が既得権を保持するために利害を同じくするパートナーを求めたものであるのに対して、前者は物理力に拠らなければ自らの生存さへ危ふくなりかねない深刻な状況に端を発したものである。自らの手で自らの進路を切り拓かうとしてゐる点では軌を一にしてゐる。

従つて「境界・国境なき」経済のボーダーレス化から、観念的な幻想を抱くのは禁物であらう。ヒト・モノ・カネの自づからなる交流は経済の原理に則つて、さらに盛んになるだら

うが、ECもNAFTAも、場合によってはいつでも排他的な保護主義的ブロックになり得るのである。域内のボーダーレス化は域外に対しては、よりハードなボーダーになりかねないのである。

「ヨーロッパ共同体」も「北アメリカ自由貿易圏」も、ある意味ではわが国の経済発展と歩を同じくして来たともいへる。わが日本の経済活動を意識し、その経済力に対抗するために構想されてきたといふ一面は否定できないからである。例へば平成三年の国内総生産(GDP)でみると、統合ECで六兆二〇〇億ドルであり、NAFTA三国では六兆四〇〇億ドルとなつてゐるのに対して、わが国だけで三兆三〇〇億ドルで輸出入でも唯一、黒字となつてゐる。「外から見た日本」は国内で意識されてゐる以上に大きな存在となつてゐる。

かうした数字は、日本人の底力を示すものではあるが、「アメリカ軍の核の傘」のもとで被占領時代の遺制ともいふべき片務的な日米安保体制下に安住して、ひたすらに経済活動に専念できた結果であることを看過することはできない。「力のバランス」による平和といふ冷戦下の僥倖をわが国は一〇〇パーセント享受してきた。果たしてソ連崩壊の現在、これまでの

やうな国防を棚上げにした他力依存が今後とも許されるものだらうか。

しかしながら、わが国の現況は普通の独立国といふにはあまりにもお粗末といはざるを得ない。世界広しといへども、国防の任務を「苦役」扱ひしてゐるところはわが国の他にはないはずである。いかに徴兵制が「平和憲法」と両立し得ないからといって、いふに事欠いて憲法十八条（「奴隸的拘束及び苦役からの自由」）からみて「許容されるものではない」としたのが自民党政府の閣議決定であつた（昭和五十五年八月）。その後、この見解が修正されたとは聞かない。僥倖の経済大国に相應しい政治状況といふべきである。「日本の常識は世界の非常識」を地で行つてゐるわけだが、相次ぐ政界のスキャンダルも自らの手足を縛ることを良しとした中途半端な国連平和維持活動協力法も、国防を等閑視することを当然のこととしてきた「戦後の常識」のしからしむるところである。政治家が国家の将来にかかはる国防を慮外のこととするならば、あとは自己の保身しか残らなくなるだらう。国家の後先を考へない「叩頭外交」と「金権腐敗」は同根なのだ。北方領土の返還など遙かに先きのことであらう。

わが国が他の国々と同様な「普通の国」になるのは何時のことだらうか。それに向けての

ささやかな集ひの記録がこの冊子である。行間にこめた我々の微意をお汲みとりいただければまことに幸ひである。

最後に当り、村松剛先生、平川祐弘先生には御講義の要旨掲載を許していただいたばかりでなく、お心こもる御加筆を賜ったことを深く感謝申し上げます。

平成五年一月二十五日

大学教官有志協議会
国民文化研究会

目次

はしがき

講義

第二日（八月九日）

国際情勢と日本……………筑波大学名誉教授・評論家 村松 剛……………3

人生と学問——価値相對主義的的人生觀からの脱却——

……………東京理科大学非常勤講師 八木 秀 次……………37

松下村塾での学問交流——吉田松陰とその子弟——

……………東急建設㈱東京支店工務部次長 奥 富 修 一……………61

第三日（八月九日）

『ピルマの豎琴』再考——竹山道雄が後世に伝へるメッセージ——

……………東京大学名誉教授・福岡女学院大学教授 平 川 祐 弘……………81

第四日（八月十日）

『深い泉の国』の私ども

……………神奈川県立湘南高校教諭・亜細亜大学非常勤講師 山 内 健 生……………123

講話

つながらるは いのちのすがた	元日特金属工業(株)常務取締役	加納祐五	153
若き友らへ語りかける言葉	——心のふるさと——		

……(財)国民文化研究会常務理事兼事務局長

短歌入門

短歌創作導入講義	福岡県立須恵高校教諭	那須三元	193
創作短歌全体批評	日商岩井(株)大阪エネルギー部部长	澤部壽孫	211

青年の言葉

自分を知るといふこと	タマポリ株式会社勤務	吉川理夫	229
歴史と人生	福岡県立太宰府高校教諭	黒岩真一	237

一年の歩み	大正大学文学部四年	岡山英一	247
-------	-----------	------	-----

合宿教室のあらまし	中央大学文学部三年	草野直樹	257
-----------	-----------	------	-----

合宿詠草			279
------	--	--	-----

あとがき



講

義

国際情勢と日本

評論家・筑波大学名誉教授

村
松

剛



噴煙を上げる火口

「一神教」マルクス主義の終焉

世界最強国家ソ連の野望

共産主義者ゴルバチョフの拡張政策

「Who lost Russia?」——誰がロシヤを失ったか

ポスト冷戦の行方

天皇陛下御訪中問題

南沙群島問題

「世界新秩序」の中の日中関係

質疑応答

「一神教」マルクス主義の終焉

数世紀間に一度ぐらゐしか立ち会へない歴史の大きな変革に、私どもは現在直面してゐると申し上げてよいと思ひます。言ふまでもなく、ソ連帝国の崩壊です。

ソ連といふ存在が、いかに二十世紀を暗くしてゐたか。イギリスのポール・ジョンソンといふ歴史家は、二十世紀に戦争と粛清で死んだ人間の数は一億五千万人に達し、これは過去になかつた数字であると言つてをります。政治は、自分に対して敵対行動を取る人間は殺すといふことを、大昔からしてまゐりました。しかし自分たちと考へ方が違ふから殺すといふのは、これは政治の領域ではありません。宗教の領域です。

一神教は、日本人には馴染みにくい教へです。一神教は愛の宗教と言ひますが、裏には憎悪が張り付いてゐる。ただ一人の神を崇める宗教ですから、ほかの神様を認めると二神教になつてしまふのです。日本人のやうにすべての神様を認めてゐますと、八百万の神々になりまして、肝腎の自分の神様はどこへ行つちやつたんだらう、といふことになります。ですから私はよく譬へとして申し上げるのですが、七福神ですね、あれぐらゐる穏やかなのんびりした日本の光景はないのでして、一隻の船に七人の神様が仲良く乗つてゐます。これを一神教

の世界へ持つて行つたら、七人のうちの一人が残りの六人を海の中へたたき込んで一人で宝船を占領するだらう。現実に中東やユーゴスラヴィアなどで起こつてゐる事態は、まさにそれです。

その一神教的なきはめて独善的なものの考へ方を、そっくりそのまま採用したのがマルクス主義です。したがつてここでは政治が宗教となり、異端審問が始まつたのです。マルクスがただ単に経済学者として終始してゐたならば、彼は資本主義初期のイギリスの経済を分析した学者として、一個の独創的な経済学者として歴史に名前をとどめたただけだったでせう。しかし困つたことに、彼は預言者になつてしまつた。丁度キリスト教がさう言つてゐるやうに、かつてエデンの花園があつたと言ひはじめたのです。原始共産主義の時代を、彼は空想しました。それが失はれて、階級社会ができた。ユダヤ・キリスト教ではいつの日にか、今は苦しくても「黙示録的時代」と呼ばれる混乱の時代があつて、最後の審判があつて、本當に忠実なユダヤ教徒、もしくはキリスト教徒のみが天国に入れると教へます。その代はりにはマルクスの教へでは、かつて原始共産主義社会があつた。今は苦しくても今いちばん苦しんでゐるプロレタリアートが、いつの日にか革命を起こし、無階級天国に入れる。かういふ一神教の歴史観をそっくりそのまま適用した世俗的宗教の預言者に、マルクスはなつてしまつたのです。



もつともその先駆は、フランス革命にあります。フランス革命でどれだけの人間が殺されたかは、よくわからないのです。ヴァンデー地方では老若男女全部を合はせて三十万人か、もしくはそれ以上が虐殺されてをりますが、裁判がありませんでしたから死者の記録がないのです。パリのコンコルドの広場、ここは当時「革命広場」と呼ばれてをりましたが、そこでギョティエヌで殺された人間の数は二万人ぐらると推定されてゐます。しかし裁判なしに、したがって記録に止まらずに殺された人間の数はわからない。さういふことが、「自由・平等・博愛」の名のもとに行はれた。ジロンド党に、有名なローラン夫人といふ人がゐました。彼女も最後に殺されるのですが、殺されるまへに言ったことばは、歴史に残りました。「自由よ、そなたの名の下に、いかに多くの罪がなされてゐることか」。

フランス革命を起こしたのは、フリー・メイソンです。アメリカの独立戦争を起こしたのも、フリー・メイソンでした。フリー・メイソンは、日本では殆ど知られてをりません。そのうへヒットラーがフリー・メイソンとユダヤ人とを同一視して宣伝したために、フリー・メイソンはユダヤ人の団体であるといふ錯覚が日本には今でもあります。これは全く違ふのでして、フリー・メイソンへの入会ははじめはユダヤ人には許されませんでした。強ひて申せば、むしろプロテスタント系の団体です。

そのフリー・メイソンが引き金となつて、十八世紀の末に拡がってきた啓蒙運動がフランス革命を起こします。その過程で革命思想自体もまた宗教化したしまして、自分たちの考へ方を貫くことが人間の理想的な幸せを導くのであり、それに反対する者は全部殺すといふ風になつて行きます。反対する人間だけを殺すのではなく、自分たちに積極的に協力しない人間は殺せ。これが、フランス革命当時のジャコバンの考へ方でした。二十世紀の先駆的な思想形態です。

二十世紀に入りまして、この独善的な世俗宗教的思想が大幅に政治の中に受け容れられて行きます。その指導者がレーニンでありスターリンであり、またある意味でそれを模倣したヒットラーであり毛沢東でありポルポトでした。言ひかへれば人間の手で理想の社会をつくり得るといふ傲慢な考へ方が、十八世紀の末に登場して、それがマルクスといふ預言者を媒

介に二十世紀には流行したのです。そのことが二十世紀を、限りなく暗い時代にしてしまいました。幸運にもその擬似宗教国家崩壊に立ち会へたといふことは、私は限りなく幸せであると思つてをります。ソ連といふ嘘で固めた帝国の実情も、このごろはぼつぼつ現れるやうになりました。

世界最強国家ソ連の野望

第二次大戦後、大英帝国が崩壊しました。チャーチルは、「自分は大英帝国を崩壊させるために首相になつたのではない」といふ有名な言葉を残してをります。しかしこの崩壊は第二次世界大戦後に突然始まつたのではなく、実は第一次大戦中にその芽は出てゐたのです。『西欧の没落』をシュペングラールが書いたのが、一九一七年でした。ヴァレリーが『精神の危機』といふ論文で、ヨオロツパは崩壊の危機に瀕してゐると預言したのも同じ一九一七年です。一九一七年は、アメリカが突然巨大な国家として登場してきたのと同じ年にあたります。アメリカといふと、私どもは昔から大きい国のやうな錯覚を抱きがちですが、ペリーが日本に来た時のアメリカの人口は黒人を入れて二千二百万人でした。日本の人口はその当時二千万人ですから、人口だけを考へると日本のはうが大国だったので、工業力の差は別です。

そのアメリカが債務国から債権国に変はるのが一九一七年でして、この時からヨロッパの国際的な地位は低下を始めたのですね。そして第二次大戦で止めを刺されるのですから、その間に約三十年間の歳月があったことになります。

ソ連の場合は、これとは違ひます。ソ連軍は世界最強であると、ブレジネフは豪語してゐましたし、そんなものだらうとこちらも思つてをりました。そのソ連が最も海外に広く進出した時期は、一九七〇年代の後半なのです。ポルトガル領のアンゴラ、モザンビークが独立するとたちまちキューバ軍六万を投入しまして、アンゴラを制圧したのが一九七六年です。続いてモザンビーク、ソマリ、エチオピアと相次いで軍隊を出してゐます。指揮官のほかは、全部キューバ軍でした。この時ソ連にとって非常に都合のよかつたのは、アメリカの大統領領がカーターだつたことです。彼は国際政治を、何も知らない人でした。アメリカ人はウォーターゲート事件で懲りてしまひまして、もう行政能力は問はない、清潔でありさへすればいいといふことで、ジョージア州でピーナツツをいぢつてゐればよかつた男を大統領にしたのですね。これはソ連にとっては好都合なこととして、キューバ軍を縦横に使つてゐました。当時中共の人民日報が、「世界で一番大きい国はどこか」、答へは「キューバ」と書いてをりました。なぜなら「首府はハヴァナにあり、政府はモスクワにあつて、お墓はエチオピアにある。だから、世界で一番大きい」。人民日報もたまにはいいことを言ふなと思つて、感心し

たものです。

続いて一九七九年(昭和五十四年)に、ソ連はアフガニスタンに侵攻します。そして一九八二年には、インド洋上のモリシヤスにまで介入します。モリシヤスに出ようとしたのは、南アフリカが狙ひでした。南アフリカのいはゆるアパルトヘイトを—あそこはオランダ語ですから発音はアパルトハイトが正しいのですが—単純な人種差別のやうに日本人はみんな思つてゐますが、あれはさういふものではありません。人種差別がないと言つたら、むろん嘘になります。差別感情はあるにしても、根本はさういふ問題ではないのです。

例へば今アメリカで、黒人問題、ヒスパニック系の問題がいろいろ騒がれてゐることはご承知の通りです。そこで面倒臭いから、中南米系のスペイン語を喋つてゐる人たちにフロリダ州をあげませう、そこに住みなさい。黒人はどこその州に住みなさい。その代はり白人の州に来る時はパスポートを取つてくるんですよ、と決めたとします。これがアパルトハイト、住み分けです。

黒人には幾つもの部族があつて、今でも毎月二、三百人が黒人同士の殺し合ひで死んでゐます。だから黒人のある部族はここに住んで、言葉が違ふんですからこちらの部族はここに住みなさい、白人はここに住みますよと、南アフリカでは決めたのでした。だからそれは、決して人種差別といふやうな単純なものではなかつたのですが、人種差別といふ面だけを強

調して南アフリカの孤立化を図った急先鋒がソ連でした。

なぜならあそこは、金、ダイヤモンド、ウラニウム、クローム、マンガン等、稀金属の宝庫です。ケープ・タウンといふ海上交通の要所も、握ってゐる。マンデラの率ゐるアフリカ民族会議は、九割までが共産党員です。アフリカ民族会議が持つてをります軍隊の指揮官は、ジョー・スラヴォといふリトアニアのKGBの大佐です。さういふ組織をつかつてソ連は内外から南アフリカを締め上げようとなりました。今でも飛行機で南アフリカに行かうとしますと、インド洋上のモリシアスで一度降りて給油するのです。ですからモリシアスをソ連圏の中に入れてしまへば、南アフリカは空の交通でも孤立する。その狙ひがあつたことは、明らかです。ソ連が健在だつたあひだは、南アフリカはマンデラのアフリカ民族会議の存在を、みとめることはできませんでした。

共産主義者ゴルバチョフの拡張政策

ところがそれから三年後の一九八五年(昭和六十年)、ちやうど御巢鷹山に日航機が落ちた年に、五十三歳のゴルバチョフが書記長として登場します。「ペレストロイカ」「グラスノスチ」といふことを、彼は言ひ出しました。ペレストロイカは、英語のリストラクト、再建です。

いまさら共産主義の再建なんて出来るものかと、私などは思つてをりました。ゴルバチョフは日本でも西欧でも間違つて考へられてゐる場合が多いのですが、彼は根っからの共産主義者です。と同時に、膨張主義者でもあります。ゴルバチョフ時代のソ連の軍備拡大は大変な勢ひでした。

六万七千噸級の原子力航空母艦を三隻作り始めたのが、ゴルバチョフの時代です。一隻目のクゾツネフは、すでに完成してムルマンスクにをります。三隻目は、スクラップしてしまひました。二隻目のワリヤークは六万七千五百噸で、これが今問題になつてゐるのです。六割ぐらゐる出来上がつてゐますが、残りの四割が経済的理由で工事が進行しません。そこで売りに出したら、中共がこれを買はうとしました。シナ海に六万七千五百噸の原子力空母が浮かんだ場合、いったいアジアはどうなるのか、大変な脅威の種になります。

ゴルバチョフは根っからの共産主義者として、共産主義体制の改革を行なはなければソ連はもたないと判断したのです。非常に率直なものを言ふひとであることだけは、確かでした。昨年でしたか、サッチャーが首相を辞めてから日本に来て各地で講演をして行きました。そのうちの一つを私も聞いたのですが、サッチャーがかういふことを言つてゐました。ゴルバチョフがロンドンに行った時に彼が言った言葉は、「農村で収穫された麦のうち四割が途中で消えてしまふ」といふことだつたさうです。つまり官僚の管理体制が、杜撰ズさんなのです。なく

なったり盗まれたりして、四割が消える。それが我々にとって深刻な悩みなんだといふことを、彼は真つ先に言った。それでサッチャーは正直な男だと思ひ、信用する氣になつたといふ意味の説明でした。

「Who lost Russia?」——誰がロシアを失つたか

今年のサミットが、二百四十億ドルの対ロシア援助、旧ソ連援助を決議しました。

援助といふとどうせ日本が主にさせられるのですから、この場合もお鉢がこちらに回ってくることは明瞭です。これを言ひ出したのは、はじめはドイツでした。西ドイツは、東ドイツを合併しました。合併をコール首相が実にタイミングよく、見事にやったと私は感心してゐます。ただし西ドイツが予想した以上に東ドイツの状況は惨憺たるもので、まるで底無し沼にお金を放り込んでゐるやうな状況になつてしまひました。ヒットラー以来かつてなかつたことですが、例のアウトバーン（高速道路）で料金を取るといふことを、言はざるをえないほどにドイツは苦しんでゐます。

そこでロシア及び東欧に対する援助は世界中でやってほしいと、ドイツは強調してきたのです。アメリカは初めは、相手にしませんでした。底の抜けた樽みたいな所にドルを流し込

んだって役に立たないぢやないかといふのが、全般の風潮でした。ところが今年の三月だったと思ひますがニクソンが、「Who lost Russia?」（誰がロシアを失ったか）といふ論文を書きました。なぜ過去形になつてゐるかと申しますと、これは「Who lost China?」を真似してゐるのです。アメリカは何のために太平洋で日本と戦争をはじめたかといふと、日本といふライヴァルを叩き潰すためでした。日本を潰して、シナ大陸といふ大マーケットを奪ひたかつたのです。

昭和二十年八月十九日付「ニューヨーク・タイムズ」のバックナンバーを、私は持つてをります。ジェームス・レストンといふ有名な記者が、ここに署名入りの論説を書いてゐるのです。表題は、「太平洋の覇権我が手に」です。「われわれはペリー以来の願望を達成した。日本といふ競争相手を叩き潰して、太平洋をアメリカの湖にすることに成功した。これでシナ大陸は、われわれのマーケットである。ただしアメリカ外交が直面してゐるディレンマは、どうもシナ大陸が中国共産党のものになりさうなことにある。さうなるとマーケットどころではないので、これがアメリカの直面してゐる大変な矛盾だらう。」さういふことが、昭和二十年の八月の段階で書かれてゐるのです。

東京湾に乗り込んで来たアメリカの戦艦ミズーリは、ペリーが掲げてきた星条旗をわざわざ持つてきて東京湾に翻ひるがへしたのです。ペリー以来の念願をこれで達成したといふ気持が、彼

らには強かった。ペリーは日本を開国させてここに太平洋航路の基地をつくり、シナ大陸をはじめとするアジア貿易の據点にしようといふ目的のために来日したのでした。ところがジエームス・レストンが危惧した事態が、昭和二十四年に現実化します。昭和二十四年に、中共がシナ大陸を支配するのです。日本は、中共と戦争をしたわけではございません。国民党政府と戦争をしたのでして、戦争が終ってから四年たつて中共政権が出来上がったのです。そこでアメリカで起こった論争が、「Who lost China?」でした。これじゃ何のために日本と戦争をしたかわからない、シナ大陸を完全に中共に取られてしまったその責任者はだれか。さういふことから「Who lost China?」の大論争が、起こったのです。これのもぢりでニクソンが言ひ出したのが、「Who lost Russia?」なんです。放っておいたらモスクワには、共産主義だか右翼だか知らないけれど、アメリカに対して敵意に満ちた大独裁政権が出来上がる。それではせっかく冷戦に勝つた意味がなく、あそこに穏健な自由主義的な体制が出来てこそ、初めて勝利が生きる。だからエリツイン政権を、助けなければいけない。世界中で助ける。さういふ主張です。

ニクソンは東部の新聞にきらはれて来た人ですし、ウォーターゲート事件では新聞に寄つてたかつて潰されたでせう。ところがニクソンの今度の「Who lost Russia?」だけは、各新聞・雑誌が一斉に支持したのです。「タイム」誌などは、特集号を組みました。そこでブッシ

ユ政府も大統領選挙の前ですから、新聞を敵に回すわけには行かないといふんで、ロシアへの経済支援のほうに踏み切ったのです。

日本としては北方領土が返って来ないのに、サミットが決定したら援助しなければならぬ。日本はソ連に宣戦布告したのではなく、ドイツの場合とは立場が違ひます。ソ連が勝手に踏み込んで来て、ご承知のやうなことをやってのけた。さういふ国に対して、北方領土も返さないのになぜ援助する必要があるのか。日本政府は、その意味で辛い立場に立たされたのです。

キッシンジャーが二箇月前に来まして、私は何人かの人達と一緒に朝の食事をする機会がありました。その時にキッシンジャーが、かういふことをまづ冒頭に言ったのですね。「共産主義の独裁政権が崩壊してロシアに民主主義的な政府が出来るといふのは、とんでもない幻想である。」さういふことを言ふ人は、ロシア四百年の歴史を知らないといふのは、とんでもない。独裁政権をロシアに作ったのは共産主義ではなく、ロシアは昔からずっと独裁政権だった。それ以外のものを、ロシア人は知らない。膨張主義を作ったのも、共産主義ではない。ピョートル大帝以来ずっとロシアは、膨張主義をつづけて来た。膨張主義はロシアの体質であり、ロシアは四百年の歴史を通じて独裁政権しか知らない国である。独裁政権が引つ繰り返ったから次には民主主義政権が出来るといふのは、これはとんでもない話で、知らないものをど

うやうや作るのか。「共産主義が崩壊したら、その次に出てくるのはまた別の独裁政権だらう。」さう彼は力説いたしましたので、私はたづねました。「それじゃあなたは、ニクソンの『Who lost Russia?』に反対か。」やうしたら、「絶対反対だ」といふ返事でした。「自分は二十年間、ニクソンの外交政策を支持してきた。ただの一度も批判したことはない」。キッシンジャーは大統領特別補佐官に任命し、次には國務長官にしたのはニクソンですからね。「今度ばかりはニクソンの言ふことに反対する」と言つてをりました。

ニクソンの主張とキッシンジャーの説とのどちらが正しいかといふ断定を、ここで下す気持は私にはありません。両方ともそれぞれ、豊富な資料の裏付による発言です。とくにキッシンジャーの場合は、ブッシュの下にゐるスコウクラフトといふ軍事担当の特別補佐官、彼はキッシンジャーの弟子です。ホワイトハウスの中にもキッシンジャーは繋がりをもっていますので、彼自身は在野でも相当に豊富な政治的資料を手にしてゐるでせうし、ニクソンにしてもたぶん同じでせう。そのやうな人たちの意見のどちらが正しいかを言ふ気はありませんけれど、キッシンジャーのいふことには相当に理があると考へてをります。

ロシヤのこれから先を読むことは非常に難しいんで、経済的に混乱状態にあることはご承知のとほりです。それではみんな瘦せ細つてゐるかといふとさうでもなく、オリンピックではご承知のとほりの活躍をしてをります。貧富の差が広がつてゐることは事実としても、経

済がどん底にあるといふ統計と実態との間に明瞭な開きがあるやうです。しかも軍は、いまだに巻き返しを狙ってをります。軍はオホーツク海を開放したくはなく、したがって国後・択捉を日本に返したくないでせう。エリツインには保守派を抑へる力が、今はたぶんないと思ひます。その意味では、国後・択捉の問題は簡単には解決しないと考へておかなければなりません。

ポスト冷戦の行方

冷戦が終つたあとの状況はどうなるのかについては、世界中が見とほしの困難さに苦しんでゐます。

これに関して昨年の夏、中共の首脳部が集まって会議を開きまして、これから先の予想を行ひました。その内容が台湾経由で日本にも伝はつてきてをります。内容はかういふことです。米ソ二超大国の間のいはゆる冷戦、イデオロギーを理由とする米ソ間の対立は終つた。ロシヤが依然として巨大な軍事力を擁する国家であることを忘れてはならないが、それよりも問題は冷戦構造の崩壊に伴つて方々に力の空白が生じ、したがって中規模、小規模の戦争がいたるところで起こることだらう。

アメリカは「ワールド・ニューオーダー」（世界新秩序）の建設を考へて、何とか中、小規模の戦乱を起こさせまいとするだらう。しかしアメリカには、その世界新秩序を完全に維持するだけの能力が缺けてゐる。これが中共の綜合判断でして、この判断は大變常識的だし、解りやすい。たぶんさうなるだらうと思ひます。現実にユーゴ・スラヴィアの戦争は簡単に終りさうになく、アフガニスタンは真二つに割れてゐます。

旧ソ連がゴルバチョフの時代に、アフガニスタンから撤兵すると称して実はウズベク人の軍を残したのです。ゴルバチョフは大嘘を吐いたのでして、ソ連領のウズベク人がアフガンの軍服を着て残った。ソ連軍が本当に引揚げてしまったあとも、ウズベク、タジクなどあの辺りの系統の軍事力が非常に強く、カブールを支配してゐるのは今そちらの勢力です。タジクはイラン系ですから、これはイランが支援してゐます。アフガニスタンの人口の六割を占めるパターン族——こちらはゲルマン系ですが——彼らが締め出されたのです。パターン族系の部隊はカブールの南に陣を布いて、いまだに睨み合つてゐます。

下手をするとアフガニスタンは、二つに空中分解してしまふ虞おそれがあります。空中分解したら、パターン族は独立する可能性が高い。これに周りの国々の複雑な利害の計算が絡みまして、アフガニスタン問題は、新聞だけを見てゐると解決したやうにお感じになるかも知れませんが、根本的には解決してゐないのです。これも一つの大きな発火点に、なりかねない

状態です。世界はいまは、「世界新無秩序」の状態にあります。

天皇陛下御訪中問題

中共はいまは、何よりも和平演変を回避しなければならぬ、と考へてゐます。「和平演変」とは平和裡に変化を演じること、簡単に言へば無血クー・デタです。東ヨオロッパ諸国では、ルーマニアを除けば殆ど流血なしのクー・デタによって共産主義政権が崩壊しました。旧ソ連も、さうです。その波が中共に來たら大変で、何としてでも和平演変は防がなければならぬ。——これが今の中共にとって、至上命題になつてゐます。もしも北京政権が崩壊したら、シナ大陸は四分五裂するに違ひありません。

天安門事件以来、西側の大国の中で北京を訪問した元首は一人もゐません。それなのに日本は、天皇御訪中を実現させようとしてゐます。和平演變を防ぐためには、ソ連なき今日、自分たち自身が自由世界に対抗して行かなければならないといふのが中共の確立してゐる戦略です。もっともその一方で中共は、経済の近代化を図つてゐまして、そのためには欧米の技術をもらなければならぬ。矛盾した政策ですが、そもそも矛盾してゐるのが中国共産党の基本原理です。全体主義、独裁主義は守りながら、なほかつ経済の自由化を図らうとす

る。それが外交政策にも、矛盾した形で出てくるのです。

八月三日の新聞に北京発時事電として、天皇陛下の日程が出てをりました。「十月二十二日に羽田御出発。西安と上海に行かれて二十七日に帰国」その下に加藤官房長官の説明が出てゐて、「日本政府は何ら関知してゐない。正式に検討したこともない」。もしもこの発言が本当だとしたら、日本の天皇の旅程を向かうが勝手に決めてゐることになります。そんな馬鹿な話はない。政府はむろん、承知のうへでせう。国民の合意なしに、計画だけが先行してしまつてゐる。これは、異常な事態です。

南沙群島問題

もう一つ中共について申し上げますと、南沙群島のことがいま問題になつてゐます。東沙、西沙、中沙、南沙群島のうち、日本が戦争に負けるまでは東沙は新南群島と呼ばれて、日本の支配下に置かれてゐた所です。サン・フランシスコの講和条約で日本はここを放棄しましたから、領土請求権はもうありません。南沙群島の海底には二百億トンの石油があると推定されてをります。

例へば東沙群島が台湾もしくは中共の領土であると言っても、地理的にはそんな無理な話

とは思へません。西沙群島はヴェトナムと中共との双方が発言権を持つても然るべき位置にあります。南沙群島だけは極端に離れてゐるのに、ここも「領海だ」と中共は言つてゐるのです。ボルネオのそばですから、フィリピン、ブルネイ、マレーシアもこの領有権を主張し、調停のための会議が開かれました。その時「中華人民共和国主席令」として発令されたのが、「中華人民共和国領海及び接続水域に関する法律」です。第二条を、御覧下さい。

『第二条 中華人民共和国の領海は、中華人民共和国の陸地領土及び内水に隣接する一帯の海域からなる。

中華人民共和国の陸地領土は、中華人民共和国の大陸及びその沿海島嶼、台湾及び魚釣島（尖閣列島）を含むその付属各島、澎湖列島、東沙群島、西沙群島、中沙群島、南沙群島及びその他の一切の中華人民共和国に属する島嶼を含む。』

これらの島々全部を、中共は自国の領土だと主張してゐるのです。

ついこの間までアメリカの海軍がフィリピンのスピック湾に駐在し、ソ連の海軍はヴェトナムのカムラン湾にをりました。この時は中共も、米ソががちりこの地域を支配してゐましたので出てこなかつたのです。ところが米ソの冷戦が終結し、旧ソ連がをかしくなつてきたと判断した時から、中共は海軍力の拡大に努めます。昨年（一九九一年）からは、原子力潜水艦を含む六隻の潜水艦と、ヘリコプター母艦二隻の着工を始めました。またソ連からは、

南にだけ配備するといふ条件付きで大量の軍用機を購入し、現在海南島に四つの軍事基地を造成中です。海南島の基地は台湾に対抗するためであると同時に、南沙群島を睨んでのことです。鄧小平は「我々は、尖閣列島を支配下に置くことができるだけの海軍力を持つ必要がある」と、はっきり言っています。

ここまで中共が出て来ることは、フィリピンにとってもマレーシアにとってもヴェトナムにとっても大変な問題であり、東南アジアの安定のための重大な脅威となります。そのやうな時期に中共を支援するやうな行動をとることは、日本としてはどう考へても慎まなければなりません。

「世界新秩序」の中の日中関係

ソ連が今後どうなっていくかわかりませんが、これは一つの未知数としておかなければならない。現在のロシアは依然として軍事大国ですから、日本としては警戒を怠る訳には行かないでせう。しかし明瞭なことは、中共がイラン、リビアなどと手を組んでいばば対米第二戦線を作っているといふ事実です。さうすることによって自由世界に対抗しようとする策し、一方では南シナ海に出ようとしてる。その時に日本がいったいどっちに付くのか。自由世界

に付くのか、全体主義国家群に付くのか。そのことを、是非考へて戴きたいのです。

日本が民主主義国であり自由世界の一員であることは誰が考へても明瞭でして、この路線を踏外してはならないのです。感情的にアメリカが気に入らないとか、さういふことはあるでせう。しかし感情で外交を行つては、ならないのです。私だつてアメリカは、あまり好きぢやありませんよ。アメリカにもいいところはあつて、漫画と西部劇とアイスクリームとは天下一品だと思つてゐますけれど、それを除いていつたいいかなる文化があるのか考へてみますと、あんまり好きになれない。すぐに「正義の味方」といふやうな事を言ひ出す点も、子どもっぽくて好きになれません。さういふことと外交とは別でして、外交や経済を考へたら、日本はアメリカと歩調を合はせて行く以外に道がないでせう。そのやうな時に、全体主義的国家、しかも世界の元首が誰も行つてゐない国に、何のために日本の天皇が行かれて全体主義路線を支援しなければならぬのか。

そのことを考へると、日独枢軸同盟が思ひ出されるのです。日本がドイツのヒットラーと組んだことによつて、どんな悲劇を招いたかは、申し上げるまでもありません。あれによつて最終的にアメリカは、対日戦争の決意を固めたのです。初めは山本五十六や米内光政が頑張つて、日独同盟を閣議は通さなかつたのです。ところが昭和十五年の第三次近衛内閣の時に、それを通してしまつた。近衛首相が昭和天皇にそのことを奏上に行きました際、天皇が

おっしゃられた有名な言葉があります。「この条約を結んだら戦争になるな」。アメリカとの戦争になれば、当然海軍が主力です。しかも毎年海軍大学校で行なはれてゐる図上演習では日本海軍は負けてゐました。それを御存じだった昭和天皇は、「日本が負けた時に、近衛、お前は私と運命を共にしてくれるか」と近衛に言つてをられるのです。近衛さんはそれを聞いて、卒倒したさうです。武見太郎といふお医者さんが呼ばれて宮中に駆けつけたら、近衛さんは脳貧血を起こしてひっくり返つてゐたさうです。私はいま、その時のことを思ひ出すんですよ。

反対した人たちはゐたのだし、天皇陛下が反対だった。ところが出先に引きずられ陸軍の強硬派に引きずられて、いつの間にか締結してしまつた。これが、日本の運命の分かれ道になつたのです。

一つの秩序が、最初に申し上げましたやうにいまは壊れました。次がどうなるのかはまだ混沌とした状態ですけど、その混沌の中ではつきりしてゐるのは、中共を中心とする過激派諸国の連合体が出来つつあることです。これが自由世界の正面の敵と、ならうとしてゐるのです。その時に日本がなしくづしに中共と結びつくといふことが、いかに将来に禍根を残すか。

日本はみづから元号を作り天皇は対外的には皇帝を名乗つて聖徳太子以来千数百年の歴史

を生きてまゐりました。そのことは、北京の専門家や学者や政治家の少数は知つてゐるでせう。大衆は知りはしません。『資治通鑑』といふシナの歴史書があります。これは帝王学用の歴史書ですから、かなり正確な歴史書と考へてよろしいやうです。その中でも一貫して、日本の天皇は国王扱ひです。つまり、朝貢国としての扱ひになってゐます。そもそも中華思想では宇内の支配者はシナの皇帝だけで、あとは下級の存在ですから、これは当然と申せます。

中共治下十二億の人間は、日本の天皇なんてどういふものか知りはしません。天皇陛下が行かれると、彼らは何と考へるか。東夷の君主が朝貢に来た、と思ふだけです。下手にお詫びの言葉なんかおっしゃったら、東夷の君主が謝りにきたと思ふ。これは北京の現在の政権にとってはきはめて政治的に利用価値の高いことです。だからこそ彼らは、「天皇陛下来てくれ、来てくれ」と言つてゐる。

では彼らは、国家元首を日本に寄越したことがあるのか。ただの一度もありません。毛沢東はモスクワにちよつと行っただけで海外に出たことがない。劉少奇も国家主席としては、インドネシア以外に出たことはないはずです。楊尚昆はイランやシンガポールには行つてゐますが、漢字文化圏には行つてゐないのです。わづかにこの間、金日成の誕生日に北朝鮮に行きました。このことの持つてゐる重大さを指摘した日本の新聞が、一つもないといふのも不思議です。シナ三千年の歴史を通じて、かつての朝貢国に中華の元首が行つたといふのは

これが初めてです。北朝鮮もまた、和平演變どころぢやなくてまさに演變が怖いのです。あそこで変化が起こったら、和平といふ訳にはいきません。流血演變でせう。その場合に金日成一家の運命は、ルーマニアのチャウシェスクと同じでせうね。

中共のはうは、北朝鮮の体制があまりにも硬直してゐることに不満を抱きながらも、演變を恐れてゐるといふ点では同じ船に乗ってゐるのです。だからわざわざ楊尚昆は平壤へ行つたのでして、たとへば唐の皇帝が高句麗の都にわざわざ国王の誕生を祝ひに出掛けて行くといふやうな、想像も出来ないことを実行したのです。これはもう、例外中の例外です。

日本に關しては、昭和天皇崩御の時に中共から来たのは外務大臣です。アメリカからはブッシュが来ましたし、世界中から元首級の人が来た。中共だけが、外務大臣です。今の陛下の御大典の時に来たのは、副首相です。これは礼のある国のやり方とは、到底思へません。それなのに天皇陛下にはおいで下さいと言ふ。これは朝貢外交になるといふことを、私は繰り返し言つてきたのです。台湾の日本代表も、「おっしゃるとほりで、とくに十月は革命記念日のある時だから時期としても全くまづい、向かうは朝貢外交に来たと思はない」と言つてをられました。

一昨日、自民党本部で千二百人ほどの人を集めて、私も二十分ほど喋りました。その時も朝貢外交になるよといふことを申しましたら、そこに北京から来た留学生が四、五人ゐたん

です。四、五人が口をそろへて、「そのとほりです。朝貢外交としか向かうの人間は受け取らないですよ」と言つてをりました。

それをいったい外務省の若い役人たちは、分つてやつてゐるのか、政治家たちは、分つてゐるのか。日本の歴史にかかはる、重大な事柄だと思ひます。

日本人が本当に新しい時代に対応して生きて行くためには、冷戦構造以前の状態の振り出しに戻つて、日本の進路を考へていかなければなりません。そのためには冷戦構造によつて養はれた、いつもアメリカにぶら下がつてゐればよい、保護領的状态に安住してゐようといふ心情を、払拭しなければならぬでせう。ところが妙なアジア主義が顔を出して、中共と結ばうといふとんでもない歩みを始めようとしてゐる。心配に耐へないのでして、話の中心がそこに片寄りすぎたかも知れません。聖徳太子いらいつづいて来た日本の独自性を守りたいと、思ふからです。

予定の時間を過ぎましたので終はらせていただきます。

質 疑 応 答

《問》現在、インドが海軍力を増強してゐる意図はどこにあるのでせうか。

《答》インドは、一昨年の段階まででは古い航空母艦二隻をイギリスから買って持ってる程度でした。ところがそれ以外に二万六千トン級の空母四隻の建造を企て、その内一隻はフランスに発注したのです。大陸間弾道ミサイルも、すでに作ってます。さらに熱核兵器、つまり水爆を作りつつあると言はれてをります。

これに対して最も神経をとがらせてゐるのがパキスタンでして、パキスタンは一昨年四月にインドに対抗するために予備役動員を行なひました。予備役動員は事実上戦争の一步手前といふことで、日本の新聞は不思議なほどこれを報道しなかつたのですが、インド・パキスタンは当時一触即発の状態にありました。パキスタンの国防大臣は、「インドは、アシヨカ王の大帝国を再現しようと思つてゐるとしか考へやうがない」といふ言ひ方をしてをります。インドが仮想敵としてゐる国が、二つあります。一つは中共でもう一つはパキスタンです。中共との係争点は、ヒマラヤの山上の国境線です。パキスタンとの争ひのたねは、カシミヤの帰属です。カシミヤは回教徒が大多数を占めてゐる地域で、したがってたとへそのハーシ（もしくはカーン、殿様）がヒンズーであっても、これはパキスタン領になる。事実ヒンズーが大多数を占めてゐる回教徒の場合、その州はインド領になつてゐるのです。ですからカシミヤは、パキスタン領になつて然るべきだったので、ネルーの一族がカシミヤ出身だったのでここをインド領にしてしまつたのです。もう一つの理由は、防衛上の問題

でせう。とにかく強引にカシミヤを、インド領に入れた。インド・パキスタン係争の大元は、ここにあります。

ヒマラヤの山頂やカシミヤで争ふのに、どうして原子力潜水艦や原子力空母が必要なのか、これが謎なんです。一つは中共に対する対抗意識、その意識はやはり大きいと思ひます。インドは一九七五年に核実験をしましたが、所有してゐる核弾頭はそれほど多くはない。中共の核弾頭は約千二百発といふ推定もありまして、中共に対する対抗意識が根にあるのだからと思ひます。

ただしインドの軍事力の増強は、実はインドの内紛で多少テンポが落ちてゐるのです。航空母艦の二万六千噸級も一隻目は発注しましたが、それからあと建造が続けられてゐるかどうかは分かりません。それでも全般的に言つて、軍事力が拡大されてゐることは事実であります。

中共の海軍力の増強は、インドと日本に対抗するためだと北京は言つてゐます。つまり日本に関しては、尖閣列島の領有権問題に見られるやうに、日本を恫喝してアジアの盟主になりたいといふ気持ちがあります。もう一つはいまのインド。インドの海軍力の増強の目標の第一は自分であると、北京が判断してゐることは間違ひないと思ひます。

私としても、インドの軍事力の増強の意味が解かりかねてゐるのですが、パキスタンの国

防大臣の言葉とそれから中共の反応、この二つから考へますと、やはりインド大帝国の建設と中共に対する対抗と、この二つが主眼ではないかと推定してをります。

《問》アメリカは中共に対してどのやうな姿勢で対応しようとしてゐるのか。また、日本はどのやうな態度を取るべきなのか。

《答》中共は、アメリカから正面の敵とされることを恐れてゐます。恐れてゐるからこそ、核を分散させてゐるのです。ワールド・ニューオーダーに対抗するためには、反米勢力を方々に作らなければなりません。さうやって拡散してしまへば中共だけを締め上げることが困難になります。

中共の南沙群島への進出、これは早くからマレーシアなどが非常に警戒してをりまして、日本の海上自衛隊に非公式的な場を通してですが、その支援を



求めてゐるぐらゐです。アメリカはフィリピンのスピック湾から海軍は引き上げましたが、シンガポールにすでに一部が移つてをります。ソ連も、ヴェトナムのカムラン湾からの全面引き上げをやめました。米ソが完全に引いてしまふと、南シナ海は空白化して中共が進出して来る。これを抑へ込まなければならぬ。マレーシアやフィリピンを守るためにも米ソの存在が必要だといふ認識が、少くともアメリカにはあります。クリントンは中共にたいする最惠国待遇の停止をとなへてゐますから、次期の大統領にクリントンがえらばれば、反中共政策はいま以上に鮮明化されるでせう。

日本の取るべき態度ですが、かつて二年前にイラクがクウェートに侵攻しました。国連の安全保障理事会は、八月二日に六六〇号の決議案を採択して、イラク及びクウェートの資産を凍結します。五日にその次の安保理事会を開いて経済制裁を世界中が行ふことを決定しました。ECは安保理事会の決議に先立って、経済制裁を決めてゐたのです。ちやうどそのころ、日本時間の四日、アメリカ時間の三日に、上院議員百人が全員で署名して日本政府に要求書を突き付けたのです。「ECに倣つてイラクに対して経済制裁を行つてほしい」。

既に安保理事会に、決議案が出てゐたのですよ。当然それは、世界中が知つてゐました。なぜ日本にだけ、わざわざさういふことをしたのか。上院議員全員百人が署名入りの文書を作つて相手の政府に突き付けるといふことは、ソ連に対してはやつたことがあります。しか

しソ連は實質上の敵国でしたからはなしはべつで、日本はアメリカの同盟国です。同盟国の日本に、なぜさういふ措置をとつたのか。

その直前のヒューストンのサミットで、日本の海部首相は世界の潮流に抗して、中共に対する経済支援を発表したのです。それでアメリカの議会が激怒して、日本は信用できない。天安門事件のあの人權弾圧をやつた国に経済援助をするやうな、さういふ国は信用できないからこの際上院議員全員の署名による要求を出しておく必要がある。これが、判断の根底にあつたのでせう。今度は天皇陛下の御訪中の問題ですから、それどころの問題ではありません。

そこで日本の取るべき態度ですが、先程私は冷戦構造の前の時点に遡つて日本の生きる道を考へるべきだと申しました。それは独立国として、国際社会のなかで要請されることは、汗を流し努力してしなければならぬ、といふ意味です。日本の自衛、安全保障も、改めて考へなければならぬ。もつとも日本が国力に相應しい軍事力を持つといふことになると、論理的にはアメリカの半分になります。アメリカは今十四隻の航空母艦を持つてゐる。日本は七隻といふことになります。アメリカの核弾頭が今二万発でしたか、さうすると一万発持つてゐることになってしまひます。これは逆に、世界の混乱の要因となるでせう。だから日本の持つべき軍事力は私はやはり中程度、その程度までに抑へて、その代はりにアメリカと一緒に東南アジアの国々と組んでアジアの安定のために努力すべきです。そのことが日本が中共

から脅かされたり、あるいは将来朝鮮半島から脅かされたりした場合に味方を作っておくみちでもあります。

日本自体の軍事力は、中程度で結構です。アメリカと協力しながら、アジアの安定のために尽くす、これが日本としてとり得る良識的な唯一の方向だらうと私は考へてをります。

人生と学問

——価値相対主義的的人生観からの脱却——

東京理科大学講師

八木秀次



火口の淵にて

皆さんのアンケートから

現代の学生生活

価値相対主義の中で

僕らの生きてゐる時代

冷淡になつた学問

人生と直結した学問を求めて

(一) 佐久間艇長の遺言

(二) 夏目漱石の人間観

(三) 『きけ わだつみのこえ』編集者の荒涼な人間観

(四) 厳肅なる生

己れの感動を信ぜよ

皆さんのアンケートから

この合宿教室に臨まれるに当って申込書の裏面のアンケートにお答へになったと思ひますが、そこで皆さんがお答へになつたものを今一度振り返りまして、今皆さんが抱へてをられる問題をこの場の共通のものとして考へていきたいと思ひます。アンケートに臨まれる皆さんのご姿勢ですが、何回も書いたり消したりされたのでせうか、鉛筆の跡や消しゴムのかすが残つてゐる人もをられました。ああ、皆さんがこんな気持ちで合宿に臨まれるのだなあ、この思ひにどう答へればいいのか、そんな思ひで読ませて頂いた次第です。アンケートの内容を凡そ三つにテーマ別に分類してご紹介したいと思ひます。

①今の生活は何かもの足りない

「大学に入るため、受験勉強一色に染まつた十代が終わり、入学してからは、何のために大学に来たのか、何を目的として生きてゆけばよいのか、わからなくなつてゐる。」(二年生、男子)

「満足していない。充実感が感じられないからである。高三の受験のときのほうが、苦しかったけれど日々の生活には張り合いがあった。遊びやコンパはしょっちゅうだが、何かも

の足りない生活を送っている。何のために大学に入ったのか、四年というこの大切な時間をいかに過ごせばいいのか、この四月から七月の間自問していたが、とうとう答は見つからなかった。この合宿でその答えを見つけられたらいいと思う。」（一年生、女子）

ここでは代表的な意見を取り上げましたが、このやうに現在の学生生活の中で目的を喪失し、何か満たされない気持で生活していらつしやる方が大変多い。何を目的として生きて行つたらよいか、漠然たる不安あるいは不満といふものがここにはある。

② 友人関係について

「友と真摯に語り合う場が極めて少ないことを残念に思います。表面的には楽しそうに見えても、深く自己を見つめ、将来のことを考えるということが、あまりにもないがしろにされてるように思えてなりません。」（四年生、男子）

「友人はほとんどバイトに追われる毎日を過ごしており、会話の内容も女性や車の話などで表面的にごまかしているつきあいしかできていないようでは何か寂しくむなし。」（二年生、男子）

先に何か満たされない気持ちがあると多くの方が述べてをられました。その気持ちに触れ合ふやうな友人関係が持ててゐない、さういふ不満や不安です。

③ 大学の現状について



「学問をしに来ているという雰囲気为学校全体に
なく、ただ単位欲しさに学校に来て授業を受けてい
るという感じ。」(二年生、女子)

「授業のつまらなさは日々強まっていく感じがし
ます。」(一年生、女子)

これもまた何のために学んでゐるのか、目的を喪
失した不安な姿です。これがここに集まった人達の
声です。何れもこのままではいけない、何か他にも
っと充実した人生があるに違ひない、それが欲しい、
さういふ思ひからの発言です。これは特殊なもので
はなく、現代の大多数の若者の声といつてもよいで
せう。

現代の学生生活

日本司法書士会連合会が大学二年生を対象に行つ

た意識調査で、大学に進学した理由として「進学するのが当たり前になっているから」と、「就職に有利であるから」が大半を占め、本来の目的である「勉強するため」といふのはわづか二割であり、今後やってみたいことについて、八六パーセントの人が「優をたくさん取る」、八四パーセントの人が「一流企業への就職」と答へてゐるさうです。現代の大学生の興味・関心が小ぢんまりと目先のことにしかなくなつてゐるといふことでせうか。これを見まして、何か寂しい残念な気持がしました。大学って一体何だらうとも思ひました。しかしこの現状がいいとは誰もが思つてゐない。このことは皆さんのアンケートがそのまま物語つてゐます。

何かやってやらう、さう思つて行動、アクションを起こした学生が新聞（産経新聞、平成四年五月九日、夕刊）に紹介されてゐました。世界各国を漫遊してゐる上智大学の四年生の話なのですが、この人が何故さう出かけて行くのかといふと、旅行が特に好きな訳ではない。つまらない大学の暇な時間を何とか有意義に過ごさなければといふ妙な「義務感」から出発するといふのです。いざ入学してみると時間だけはあり余る程ある。しかし何をしていいか分からない。予想以上につまらない。つまらないのだけれども、「社会人になる前に、何かしなければ」といふ焦りにも似た気持で旅行を始めたといふのです。記事は「行動的な青年現はる」とでもいひたいやうな極めて好意的な取り上げ方をしてゐます。皆さんの中にもこの青

年に魅力を感じる方も多いのではないかと思ひますが、僕にはさうは思へなかつた。学生生活を何とか価値あるものにしようといふ気持からこの青年は旅に出かけるのですが、折角大それた学といふ学びの場にゐながら、この人は結局大学で学ぶ喜びを知らないまま卒業するのです。こんな大学生は多いのぢやないですか。ほとんどの人がさうなのかも知れません。しかしこの人にとって大学って一体何なのでせう。社会に出るまでの「保険」なのでせうか。

価値相対主義の中で

以上のやうに現代の大学生の多くが何かもの足りないと思ひながらも何をしていいのかわらない、どこか空虚な不安を持ち、最高学府に学びながら学ぶ喜びを知らない。シカゴ大学の故アラン・ブルームといふ一般教養の哲学の教授が一九八七年に出版し、翌年日本でも翻訳されて大変評判になった『アメリカン・マインドの終焉』(みすず書房)は現代の学生生活の現状を考へる上で大変参考になります。この本は教授がアメリカの大学生の現状を憂へて涙を流しながら書いたと言はれてゐるものですが、これを読みますとアメリカの大学生も日本の大学生と少しも変はらない、問題は少しも変はらないと思はしめられます。

教授は現在の我々が人生にどこか空虚な不安を持つのは「価値相対主義」といふ価値観の

中にあるからだと指摘します。価値相対主義といつてもご存じない方もいらっしゃるでせうが、簡単にいひますと(本来の意味は違ふのですが、今日通俗的に使はれてゐる意味に依りますと)、世の中には色々な価値がある。何を大事と思ふかといふことですが、その中には価値あるものもあれば価値なきものもある訳です。ところがこの価値相対主義の考へ方に依れば、全てに平等に価値がある。つまりこの世の中には価値あるものもなければ価値なきものもない。清らかなものも気高きものもない。偉大なものも崇高なものもない。逆に野卑なものも下劣なものも存在しない、といふことになります。大変醒めたものの見方なのですが、この見方のために現在の学生のほとんどが真理は相対的だと信じてゐるか、と問へばそのやうに答へるといふのです。更に「今日では、何かを信じもしないうちから、すでに信念を疑うことを習得している」と。これは、物事を見て、「凄いなあ」とか「立派だなあ」と心が動くといふことがないか、あるいはさう思ったとしても自らその感動は違ふのだと思つてしまつてそれを否定するといふことでせう。価値あるものを認めない訳ですから「本を読むのも読まないのも、それぞれの自由だ」などと言ひ募つて書物から逃避をしてゐるのも今日の学生の姿です。本の中には「凄いなあ」とか「立派だなあ」と心動かされるものとか、あるいはとても自分の考への中にはないやうな、想像を絶する凄い事実だとか、そのやうなものに溢れてゐる。しかし読まないためにそれを知らない。知らないために次第にそれに対する憧れや畏

怖の心も働かなくなつてゐる。因みに本物を見極める目を養ふためには、崇高な文体で書かれた文芸作品の助けがなくてはならないとブルーム教授は述べます。

「本に縁のない学生たちも、音楽となるときまぎれて聴く」。映画やテレビを見る。僕らは人間が人間である以上、よく生きようとする意志を持ちます。これを「自己啓発の種を求める」とブルーム教授は表現するのですが、この自己啓発の種ですね、よく生きようと思つて色々なものに接しますが、今や僕らは身の周りのごく手近なものにそれを求めてゐるといふのです。ところが身の周りのものとはいへば、僕らの人生を充実させ、更に向上させるやうなものが極めて少なくなつてゐる。あるものはいへば、我々の本能や欲望に直接に訴へるものばかり。これまた価値相対主義の考へから来るのですが、あらゆるものに平等に価値があるといつてゐるうちに崇高なものを引き摺り落として安心し、逆に下劣なものが「表現の自由」の名の下に横行するやうにもなつた。若者文化と称される、例へばロック・ミュージックはその祖ともいへるローリング・ストーンズ以来、麻薬とセックスを題材とし、そのリズムは我々の性の衝動に直接に訴へかけるものだといはれてゐるし、テレビには如何に生きるべきかといふ問題などとは凡そ無縁の僕らが生きてゐる実感とは程遠いトレンド・ドラマが氾濫してゐる。このやうなものばかりに取り囲まれて生活し、それに慣れてしまふと、真理や善に対して、また人生の目標になるやうな立派な人に対する憧れや畏怖の心を失

ひ、現在の自分に満足してしまふ。これはいはば虚無と思ひ上がり思想とでもいつてよいものです。今日の学生がおとなしく好感が持てるといふのも結局のところは他人には関心を持たず、狭い自分のみに興味があるといふことから来てゐる。今日の学生は表面的には容易に打ち解け合ふ雰囲気があるが、恋に代表されるお互ひの気持にまで踏み込んで行くやうな深い関係を持たなくなつた。学生は自我といふ狭い世界に閉ぢ込もり、自己を越える広い世界を知らない。そのため「自分の将来について考えることも展望することもできな」くなつてゐる。ブルーム教授はこのやうに指摘してゐます。これは重要な指摘だと思ひます。

僕らの生きてゐる時代

僕らの生きてゐる時代といふのは、人類が歴史上容易に達成できなかった目標が達成できた稀な時代だと言ふことができやうかと思ひます。ここでは自由と豊かさについて考へますが、先づ自由について。英語ですと free from と後に from が付くやうに、何々からの自由、何かが束縛してゐてその束縛から逃れてゐる状態を「自由」といひます。個人の解放といひませうか、自己を束縛してゐるあらゆるものから解放される。さうすればそこに素晴らしい人生や世の中が待つてゐるのだといふ考へ方がこの自由といふ考への中にはある。高校の『現

代社会』の教科書(自由書房)に次の様な記述があります。「わたしたち一人びとりの人生は、たとえ親や兄弟であつても、とつて代わることのできない一回かぎりの、かけがいのない人生である。しかも、その期間は、どこまでも有限である。そうだとすれば、一回かぎりの人生を自分のために生きても、けつして非難される筋合ひはないはずである。」とにかく家庭や社会といった色々な拘束から逃れること、解放されることは大変いいことだ。すると、自己が成長し、あるいは自己表現や自己実現ができるのだとか、そのやうなことが書かれてゐる。このやうに僕らはこの教科書の記述にあるやうな教育を受けて来ていはばおだてられました。自由になりなさいと散々教へられて来た訳です。そして今現に拘束がなくなり自由になりました。ところがそれでどうなったのかといふと、一体自分は何をしていいのか分らなくなつた。例へばこれは皆さんが就職をするときに行き当たる問題ではないですか。どんな職業に就いたらいいのかと。かつては親の職業を継ぐのが一般的でしたから、それを嫌だと思ふなど、色々な葛藤の中で自己を見詰めて来ました。ところが何も規制がなくなつて、どんな職業に就いてもいいよと言はれたときに、「はて自分は何に向いてゐるのかな」と戸惑つてしまふ。これ、ひよつとして皆さんの最も切実な問ひではないですか。何をしていいのか分らないといふのが。色々なものがあつて、何をやってもいいよと言はれて、で、何をしてもいいか分らない、大変空虚な不安がある。

豊かさについても同じことが言へます。僕らはまた物質的に豊かになれば幸せになると考へました。近代の日本の歩み、あるいは戦後の日本の歩み、それは豊かさの追求とでもいふことができそうですが、今日、その豊かさが達成された後にそれほど幸せでもないといふことが分つて来た。貧しい時代には、豊かになることが目標であり、また希望であり理想でした。ところが果してそれは何のための豊かさだったのか。現在その目標を失つてゐる。近代の目標は、自由の獲得あるいは豊かさの追求であるといふことができるでせうが、その目標が達成された後に、はてこの後何をやっていいのかといふことになつて来た。金があればなあとか、豊かになればなあといふ気持ちが嘗てありました。つまり豊かさといふのは、実は何かをするための条件づくりだったのですが、ところが近代の歩みを考へれば、その「何か」を考へては来なかつた。豊かになりました。自由になりました。平和になりました。それは全て何かをするための条件づくりだったのですが、その「何か」を問ふて来なかつたといふことなのです。

冷淡になつた学問

今僕らは目標を失つたこんな空虚で不安な時代に生き、事実今の生活を何かもの足りない

と思ひながらも何をしていいかも分らない。こんな中であつて、僕らは大学といふ学びの場に学んでゐるのですが、ところでこんな僕らの極めて空虚な不安に、大学といふところは応へてくれるのでせうか。

「今の学者といふのはサイエンスだよ、ただどあの頃（江戸時代）の学問といふのはサイエンスなんかとは全然違ふんでね。あれ、道ですよ。人の道を研究したんだよ。だから、人間如何に生きるべきか、と、さういふ問ひに答へられないやうな者は学者ではなかつたんだ。今の学者なんてそんなことに答へなくていいんですよ。何か調べてればいいんですよ。」（笑）

『私は学者だからね、かうがああでかうである』と。『調べるんだ』と。『君たちの幸不幸には俺は何も関係ないんだ』と。『私はどういふ風にして世のなかに生きたらいいんでせう、先生？』といったつて、先生は答へてくれやしないんだよ。それが今の学問です。学問でものはその位今冷淡になつてしまつたんだ。一番、人間の肝腎なことには触れないです。で、僕らの一番肝腎なことつて何ですか。僕らの幸不幸ぢやありませんか。僕らは死ぬまでたつた何十年かの間この世に生きて幸福ぢやなかつたらどうしますか。で、僕が生きてる意味がわからなかつたらどうしますか。そんなことを教へてくれないやうな学問は学問ではないね。だから昔の学問は、学者は、それをどうかして人に教へようとしたんです。」（小林秀雄「宣長の『源氏』観」、『小林秀雄講演別巻 随想二題—本居宣長をめぐつて』、新潮社、所収）

僕にはこれ大變興味深かつたといひますか、聞いてゐて涙が出ました。僕らが生きてゐることの価値や意味に何にも答へてくれはしない学問、これが僕らが学んでゐる学問、大学の学問の基本的な枠組みです。僕らの幸不幸といふいはば人生の根本問題には何も答へてくれやしないのが今の学問なのです。

これから大学の学問を批判しようといふのではありません。大学の現状はかうであつても、僕らには果して自分はどう生きるべきなのかといふ僕らの、小林秀雄氏の言ふところの「一番肝腎なこと」といふものがあり、それは大学の学問が今どうだからといふことと本来は関係がないのだと言ひたいのです。ただ、今の大学の学問が小林秀雄氏が指摘したやうなものであるとするならば、それを正しい道に戻さうとする努力だけはしなければならぬ。この合宿教室は、実は学問を、僕らの人生に直結させる営みの一つである、と僕は学生時代から参加した経験から言ひます。僕らの「一番肝腎なこと」に應へ得るやうな学問の回復、これが合宿教室の狙ひです。

人生と直結した学問を求めて

(一) 佐久間艇長の遺言

佐久間艇長といつても知らない方も多いと思ひますので、ごく簡単に紹介させて頂きますと、海軍大尉で明治十二年生まれ、明治四三年の四月十五日、第六潜水艇長として山口県の新湊沖で半潜航訓練を実施中に、乗つてゐる艇が沈没し乗組員十三名とともに殉職。時に三十歳。翌十六日の午後に沈没位置が確認され、十七日その引き上げ作業が開始される。このときに作業員は勿論、凡そこの事件を知つた人が、内心一樣に恐れたことは、乗員の死に方があるいは阿鼻叫喚の地獄絵図そのままであるかもしれないといふことでした。我先に人を押し退けて逃れようとしてゐる人がゐるだとか、あるいは余りに酷い死に方をしてゐるだとか、そのやうなことが心配されました。ところが海上に引き上げられ、浮き上げられた潜水艇の艇内を調べて見たところ、全員が整然としてその死に付いた状況が明らかにされました。佐久間艇長は指令塔下にゐまして、他の十三名の乗組員も全員生前本来の配置に付いたまま絶命されてゐた訳です。引き上げ作業に従事した人々の心配は一挙に無限の感嘆に変はつたと伝へられてをります。

この事件が報道され、全国に伝へられるや、感動の輪はこの時代の全国民に広がりました。やがて佐久間艇長の上着のポケットから黒表紙の手帳が発見され、そこに三九ページに互つて鉛筆で、九七五字を越える文字が認められてありました。今、これを簡単に紹介します。

(小田村寅二郎編『日本思想の系譜—文献資料集(下)—』、時事通信社、所収)

「小官ノ不注意ニヨリ 陛下ノ艇ヲ沈メ部下ヲ殺ス、誠ニ申訳無シ、サレド艇員一同死ニ至ルマテ皆ヨクソノ職ヲ守リ沈着ニ事ヲ處セリ、我レ等ハ国家ノ為メ職ニ斃レント雖モ唯々遺憾トスル所ハ天下ノ士ハ之ヲ誤リ以テ将来潜水艇ノ發展ニ打撃ヲ与フルニ至ラザルヤヲ憂フルニアリ、希クハ諸君益々勉励以テ此ノ誤解ナク将来潜水艇ノ發展研究ニ全力ヲ尽クサレシム事ヲ サスレバ我レ等一モ遺憾トスル所ナシ」

次に沈没の原因が記されています。

「瓦素林潜航ノ際 過度深入セシ為メ『スルイスバルブ』ヲ締メントセシモ 途中『チエン』キレ依テ手ニテ之レヲシメタルモ後レ後部ニ満水(セリ) 約廿五度ノ傾斜ニテ沈降セリ」
死の淵に至るまで将来同様の事故が起きないやうにと今度の事故の原因が克明に記されます。
そして「公遺言」と題して「謹ンデ 陛下ニ白ス、我部下ノ遺族ヲシテ窮スルモノ無カラシメ給ハラシム事ヲ、我ガ念頭ニ懸ルモノ之レアルノミ、左ノ諸君ニ宜敷」と書き記して何人かの名前があげられますが、艇員の遺族の上を思つて、遺族が今後生活に困らないやうにといふ思ひからこれを記されるのです。「十二時三十分 呼吸非常ニクルシイ 瓦素林ヲブローアウトセシ積リナレドモ、ガソリンニヨウタ 一、中野大佐、十二時四十分ナリ」これで筆が途絶えてゐますが、「呼吸非常ニクルシイ」トいふ言葉に胸を締めつけられる思ひが致します。この沈没自体が訓練事故の一つでありましたから、乗員全員が先づ艇が浮き上がるこ

とに努力したはずでせう。ただ、乗員が誰一人として自分一人だけの脱出や生還を試みなかったといふことだけは疑ひの余地のないことです。息が途絶えるまで各自の持ち場でその任務を尽くしたといふことに当時の人が感嘆しました。なんと崇高な人がゐるのか、なんと立派な死に方をする人がゐるのかと感嘆しました。

(二)夏目漱石の人間觀

夏目漱石もまたこの事件に驚きました。漱石は濡れたままの遺書を写真に撮つたものを見て驚嘆し、「文芸とヒロイック」といふ文章(『漱石全集 第十一卷 評論・雜篇』、岩波書店、所収)を一気に書き上げます。「ヒロイック」とは、あつぱれなといひますか、人間の崇高さや素晴らしさを形容した語です。これは当時隆盛だった自然主義文学に対する批判ともいへる文章なのですが、自然主義は現実を暴露することを基本的な立場と致します。事実を重んずると言ふ訳です。「自然主義を口にする人はヒロイックを描かない。實際そんな形容のつく行為は二十世紀には無い筈だと頭から極てか、つてゐる」、漱石はかう言ひます。自然主義は現実を暴露するのだといひ、そのやうなヒロイックな行為といふものは人間には滅多にないことだから小説の題材には取り上げない。そして世に頻繁にみられるやうな人間の姿を専ら描かうとする。それは性欲や物欲にとらはれた人間の姿です。「余は近時潜航艇中に死せる佐久間艇長の遺書を読んで、此ヒロイックなる文字の、我等と時を同くする日本の軍人によって、

器械的の社会の中の赫として一時に燃焼せられたるを喜ぶものである。自然派の諸君子に、此文字の、今日の日本に於て猶真個の生命あるを事実の上に於て證擔立て得たるを賀するものである。彼等の脑中よりヒロイックを描く事の憚りと恐れとを取り去つて、随意に此方面に手を着けしむるの保證と安心とを與へ得たるを慶するものである。

往時英国の潜航艇に同様不幸の事あつた時、艇員は争つて死を免れんとするの一念から、一所にかたまつて水明かりの洩れる窓の下に折り重なつたまま死んでみたといふ。本能の如何に義務心より強いかを證明するに足るべき有力な出来事である。本能の権威のみを説かんとする自然派の小説家はここに好個の材料を見出すであらう。さうして或る手腕によつて、此一事実から傑出した文学を作り上げる事が出来るだらう。けれども現実は是丈である。其他は嘘であると主張する自然派の作家は、一方に於て佐久間艇長と其部下の死と、艇長の遺書を見る必要がある。さうして重荷を担ふて遠き道を行く獸類と選ぶ所なき現代的の人間にも、亦此種不可思議の行為があると云ふ事を知る必要がある。自然派の作物は狭い文壇の中にさへ通用すれば差支へないと云ふ自殺的態度を取らぬ限りは、彼等と雖も亦自然派のみに専領されてゐない広い世界を知らなければならぬ。

長い引用で恐縮ですが漱石は自然主義に対して異論を唱へます。めつたにないことだけれども、ヒロイックな行為といふのは嚴然としてある。佐久間艇長の事件はこのことを語つて

ゐるのだといふのです。

なぜ僕はこの文章を取り上げたのかといふと、漱石の人間観に注意をしてみたいからです。人間にはヒロイックな姿がある。人間は他人を押し退けても自分は生きたいと思ふ本能に従ふよりも、死の淵までも、職務を遂行するといふ義務を果たすときが確かにあるのだ。さういふ姿が確かにあるのだ。本能にのみ従ふ獣とは明らかに違つたヒロイックな行為、さういふヒロイックな行為をする人間の広い世界が確かにあるのだといふことを言つてゐるのです。人間の素晴らしさや崇高さ、その生き方の素晴らしさ、それを認めざるを得ない事実や行為が確かにある。さうしてそれらは僕らの心を確かに動かすのだと漱石は言ひたいのです。

(三) 『きけ わだつみのこえ』 編集者の荒涼な人間観

『きけ わだつみのこえ』(岩波文庫)の名前を聞いたことのある方は多いと思ひますが、「日本戦没学生の手記」といふ副題が付いたこの本に、渡辺一夫といふ東大のフランス文学の教授が「感想」といふ序文を寄せてゐます。この本は戦争に行つて若くして亡くなられた方の遺書や和歌を編集したものです。ここにこの本の編集方針が書かれてゐます。

初め、氏はかなり過激な日本精神主義的な、ある時には戦争謳歌にも近いやうな若干の短文までをも全部採録するのが「公正」であると主張した。ところがさうはならなかつた。「若い戦没学徒の何人かに、一時でも過激な日本主義的なことや戦争謳歌に近いことを書き綴ら

せるにいたった酷薄な条件とは、あの極めて愚劣な戦争と、あの極めて残忍闇黒な国家組織と軍隊組織とその主要構成員とであったことを思い、これらの痛ましい若干の記録は、追い詰められ、狂乱せしめられた若い魂の叫び声に外ならぬと考えた。そして、影響を顧慮することも当然であるが、これらの極度に痛ましい記録を公表することは、我々として耐えられないとも思い、出版部側の意見に賛成したのである」と。このやうに出版部側意向に渡辺氏は沿ったといふのですが、ここに「痛ましい」だとか「極度に痛ましい」、更には「追い詰められ、狂乱せしめられた若い魂の叫び声」といふ表現がみられることに注意して下さい。

結局、渡辺氏は「純真なるがままに、煽動の犠牲になり、しかも今は、白骨となっている学徒諸氏の切ない痛ましすぎる声は、しばらく伏せたほうがよいとも思った次第だ。」として、出版部側の意向に賛同して「痛ましすぎる声」はこの本から除外する。なぜ「痛ましい」か。渡辺氏は「僕は、人間が追い詰められると獣や機械になるといふことを考へるのであるが」といふのです。「人間らしい感情、人間として磨きあげねばならぬ理性を持っている青年が、かくのごとき状態に無理遣りにおかれて、もはや逃れ出る望みがなくなつた時、獣や機械に無理遣りにされてしまう直前に、本書に見られるやうなうめき声や絶叫が、黙々として立てられたことを思えば、もはや、人間を追い詰めるやうな、特に若い人々を追い詰めるやうなことは一切、人間社会から除き去らねばならぬことを沁々と感ずる。戦争というものは、いか

なる戦争でも、必ず人間を追い詰めるものである。」ここでも注意したいのは、「人間が追い詰められると獣や機械になる」「獣や機械に無理遣りにされてしまう」といふ表現です。僕がここで問題にしたいのは、この本の中に出てくる戦没学徒の手記や和歌のことや先の大戦の性格や政治的な意義についてではありません。このやうに書いてゐる渡辺一夫といふ人の人間観を問題にしたいのです。人間が追ひ詰められると獣や機械になつてしまふといふ荒涼な自然主義的人間観です。ここには佐久間艇長の遺書やそれに感動した漱石のものとは全く正反対の人間観が読み取れます。

(四) 厳粛なる生

渡辺氏は、人間は追ひ詰められると獣や機械になると言ふのですが、「追ひ詰められた」青年たちの実際の姿はどうだったのか。吉田満氏の『戦艦大和ノ最期』(講談社)には次のやうな場面が描かれてゐます。戦艦大和の「ガングルーム」で連日死生論議が戦はされます。敗戦が必至になつて、自分たちの死も現実に迫つてきたときに、自分は何のために死ぬのかといふ真摯な問ひを皆が発し始めるのです。何ゆゑの敗戦なのか。何で日本は敗けてしまふのか。何のために自分は死ぬのか。自分は何のために死ぬのかといふ問ひはすなはちこれまでの自分の生涯は何のために捧げるべきなのか、自分は何のために生きてゐるのかといふ問ひでせう。自分が生きてゐる意味や価値は何なのか。このやうな真摯な問ひが発せられます。同じ

吉田満氏は「あとがき」に「若者が、最後の人生に、何とか生甲斐を見出だそうと苦しみ、そこに何ものかを肯定しようとはがくことこそ、むしろ自然ではなからうか。」と書いてるますが、果してこれをも追ひ詰められて獣や機械になった姿といふのでせうか。

『いのちささげて—戦中学徒・遺詠遺文抄—(正・続)』(国文研叢書)といふ本があります。これは現在の国民文化研究会の前身にあたる日本学生協会に連なり先の大戦中に亡くなられた学徒、いはば我々の先輩方の遺文や遺歌を編集したものです。『続いのちささげて—戦中学名譽教授の夜久正雄先生が書かれた文章も印象深いものです。』『続いのちささげて—戦中学徒・遺詠遺文抄—』を読むと、親しかった友人たちの言葉に、いまさらのやうに叱咤され教へられる。それは、この人たちが、「いのちをささげた」といふ事実によるが、それだけではない。「いのちをささげる」意味に深い省察を加へてゐるからである。国をまもるといふことの意味をいのちがけで考へてゐるからである。国をまもるといふことについて、当時の青年は心をつくして思想し実行したのである。青年時代の数年に全身心を傾けて人生の眞実—生きることの意味を—すなはち、いのちささげて死ぬことの意味を—求め求めた心のあと—これが彼らの文章である。」(吉田松陰『究理の学』—国際社会に処する日本人の考へ方の原則について、『国民同胞』昭和五年八月一〇日号) 僕が目を引かれ、また注意をしたいのは「生きることの意味を—すなはち、いのちささげて死ぬことの意味を—求め求めた心

のあと」といふ部分です。ここには読む者をして襟を正させしむるやうな、生きることの意味を命懸けで問うた真摯な厳肅な生の姿があります。渡辺氏が追ひ詰められて獣や機械になつたと形容した若者の姿はかうであつたと僕は信じます。

己れの感動を信ぜよ

僕らは今、自分が生きてゐることの意味を容易に問へない、あるいは生きてゐる実感を持ち得ない時代に、また時代風潮の中に生きてゐます。しかしだからといって僕らが今生きてゐる意味を問ふ意志だけはそれとは関係なく僕らには厳然とあるのです。皆さんのアンケートに見られた、何をしていいか分らない、あるいは何かもの足りないといふ声は、何れもこのままではいけないといふ皆さんの生甲斐を求める真摯な叫び声です。生きてゐる意味を実感したいといふ叫びです。プラトンの『クリトン』の中でソクラテスが「大切なのはただ生きることではなく、よく生きるといふことなのだ」と述べますが、僕らは生きる以上は矢張りよく生きようと思ふのです。何とか自分の人生に価値を与へようと努力もするのです。その時、僕らは「凄いなあ」とか「立派だな」、人間って何て凄いのかと心動かされることなくしてそれは可能なのでせうか。僕の心は佐久間艇長の遺書に確かに動きます。それに心動かさ

れた漱石の文章にも心動きます。死を前に生きる意味をそれこそ命懸けで問うた戦中の学徒の言葉にも心動きます。本当に立派だなあと思ひます。それを素直に感じること、そしてその自らの感動は疑ひのないものだと思ひます。そこから全てが始まる。そして佐久間艇長を始め、本当に立派に生きた人々の姿を知ること、学ぶこと、それが僕らの人生を必ずや豊かにしてくれる。僕はそれを信じます。

松下村塾での学問交流

——吉田松陰とその子弟——

東急建設㈱東京支店工務部次長

奥 富 修 一



阿蘇の火まつり

なぜ吉田松陰か

幕末の動きと松陰

松下村塾

諸生に示す

学問は道を得るに在り

嘉言林の如し

なぜ吉田松陰か

私は会社へ入りまして二十三年ほど経ちました。はじめの十七年間はヘルメットをかぶりまして現場監督の仕事をして参りました。超高層のオフィスビルやマンション、ホテルなどを手がけましたがその後は内部勤務になりました。管理職を拝命し今日に至ってをります。このやうな私の経歴ですので今日は古典講義となつてをりますが学校の先生のやうに歴史や国語の授業をするわけにはいきません。そこで私が皆さんにお話しできるのは、これまでの社会生活の経験を通じて時につけ折りに触れては親しみながら学んできましたある歴史上の人物のことに他なりません。その方のお話しをすることによって、多少なりとも教科書の範囲を超えて、歴史の生の姿に直接触れる学問のある事をご紹介できればと思つて登壇して参りました。

その人物は吉田松陰といふ方ですが、ではなぜ私が松陰を取り上げたのか、その理由を初めに申し上げておきます。それは他でもなく吉田松陰といふ方は実に奥の深い人間の魅力に溢れた方であるからです。そのことを松陰の言葉に伺ふことができるのです。三十歳といふ若さで亡くなつたのですが、それまでの間に手紙や論文、随筆等に膨大な量の文章を遺しま

した。松陰の言葉には力があり、生き生きとした躍動感に満ちあふれてゐます。眠った心を目覚めさせてくれます。更に大切なのは松陰の言葉は誠実で、温かみがあり厳しさのあることです。誠実で、温かくて、又厳しい、これらは若い人にとって最も必要なもの、それを全て備へてゐるのです。私も長い間松陰の言葉に惹かれて来た一人ですが今日は皆さんにもぜひ直接触れていただいで松陰を学ぶきっかけにしていきたいと思ひます。

幕末の動きと松陰

今日も午前中に村松先生がペリーのことにお触れになりましたが、嘉永六年（一八五三年）に黒船が来航しその軍事力を背景に幕府に開国を迫りました。その年は一度帰りますが翌安政元年（一八五四年）に再び来航し三月には日米和親条約の締結に至りました。この時に「下田踏海事件」といふのが起きてをります。これは松陰が起こした事件です。松陰は友人の金子重之助と一緒にペリーの黒船に乗り込みました。黒船の甲板の上で自分たちをアメリカに連れて行ってくれと談判したのです。残念ながらペリーは幕府との和親条約締結直後の微妙な時期であったことでもあり松陰たちの申し出を拒否したのです。この海外出遊の企ての失敗によって松陰たちは幕府に自首をして囚人になってしまいました。



当時の世界を取り巻く情勢、なかでもアジアは欧米の列強によって次々と植民地化されてゆく。日本は少しでも早く近代文明を採り入れなければならなかった。その必要性を強く感じてゐた松陰は自分がその魁にならうと志し敢へて国禁を犯さうとしたわけです。

翌年にはハリスが着任し今度は日米修好通商条約の締結を迫ります。この条約は関税自主権がなく治外法権も認めさせられた不平等条約ですが、これを元に戻すのに明治の終りまでかかってゐます。この時の責任者が大老の井伊直弼です。井伊大老は朝廷のお許しを得ないまま独断で条約締結に踏み切ってしまうのですが、そのために京都の公家を中心とした心ある勤王の志士たちの猛反発を招きます。そしてこの反対運動を力でもって押さへつけようとした。これがいはゆる安政の大獄となり、その余波を受け

て橋本左内や吉田松陰も処刑されてしまふのです（安政六年）。そしてまた井伊直弼自身も翌年には桜田門外の変といふことで暗殺され幕末の激動の時代に突入していきます。そして八年後には明治維新を迎へることになるのです。

先ほどの「下田踏海事件」については松陰の果敢な行動力を示すものとしてよく強調されるのですが、私は松陰の真髓はやはり教育者としての側面にあると思ひます。それといふのも松下村塾において松陰の薫陶を受けた多くの弟子が松陰の死後、幕末から維新にかけて実に目覚ましい働きをしていったからです。あたかも松陰の分身のごとく時代の表舞台に躍り出て国家的事業の遂行に力を發揮し、松陰の志を現実のものとしていったのです。

松 下 村 塾

松下村塾を実質的に松陰が主宰してゐた期間はわづか二年半余りです。下田踏海事件のあと幕府の命令で国元の長州藩萩に送り帰され一年間入獄させられてから実家の杉家に引き取られて謹慎生活に入ります。これが安政二年十二月、その松陰を周囲の人が暖かく迎へます。なかでも父や兄をはじめとする肉身親族の人たちは松陰の才能を惜しみ、松陰を先生として教へを受けようとしています。次第にその輪が広がってゆき近隣の子弟までもが集まってくるや

うになります。もともと松陰は長州藩の藩校で明倫館といふのがあり、そこで専門の山鹿流兵学の教授をしてゐましたから、その松陰が勉強を教へてくれるといふので次々と入門する人が増えていきました。やがて教へる部屋が手狭になり杉家の敷地内に塾舎を建設することにした。門下生たちによる勤勞奉仕です。専門の大工さんに頼むお金はなく古い木材を探してきて見よう見まねで築き上げてしまった。安政五年にはそれもさらに増築してゐるのですが、その年の暮には再び藩命によつて松陰は獄に下ります。これで実質的な松陰の松下村塾は終ります。

松下村塾で行はれた学問には松陰の専門の兵学をはじめ、漢学や儒教、日本の歴史、地理、そして現実の諸問題に関するもの、経済や政治まで含まれてゐて今で言へば総合的社會科といったやうなものでした。なかでも学問の主眼は机上の空論ではなく現実にいかに処するかに置かれてゐた。目前の今日の問題を解決することが重要なテーマとして掲げられた。当然時事問題も採り上げられ江戸や京都にゐる同志とも緊密な連絡が計られてゐました。それと喫緊の課題として今日明日の塾生活を維持していくことがあつた。当時は自給自足に近い境遇であつたやうですから、まづ食料を確保しなければならぬ。昼間は先生も弟子も一緒に畑を耕やし、草を取り、毎日食べる野菜も作つた。家に帰つてからはお米もつきました。夜になると松陰を囲んで本を読み討論を続けた。議論が白熱して明け方近くになつたこともし

ばしばであったと言はれてゐます。

このやうな塾生活、共同生活を通じて松陰の指導の下に多くの若い人たちが養育されていったのですが、その中の主な方たちを次に列記しておきます。年齢は松陰が三十歳で処刑された安政六年の時点で表示してあります。

桂 小五郎（木戸孝允） 27才 幕末維新の功労者、文部卿・内務卿・参議を歴任

佐世八十郎（前原一誠） 26才 参議、陸海軍制の確立に尽力、明治九年萩に挙兵、刑死

入江杉藏 23才 村塾四天王の一人、高杉、久坂らと国事に活躍、禁門の変に戦死

高杉晋作 21才 松門双壁の一人、長州藩奇兵隊総督

久坂玄瑞 20才 松門双壁の一人、松陰の遺志継承に奮闘、禁門の変に戦死、

夫人は松陰の妹

山県狂介 (山県有朋) 20才 日露戦役参謀総長、枢密院議長、公爵

伊藤利助 (伊藤博文) 19才 総理大臣、貴族院議長、公爵、晩年韓国統監として松陰の抱ける大陸政策実現に尽力

吉田栄太郎 (吉田稔磨) 19才 村塾四天王の一人、池田屋事件にて新撰組に襲はれ傷死

野村和作 (野村 靖) 18才 入江杉藏の弟、国事に奔走、神奈川県令、内務・通信大臣

品川弥二郎 17才 薩長連合に奔走、ドイツ公使、内務大臣、枢密顧問官

この中の品川弥二郎については次のやうなエピソードがあります。品川の家は足軽でしたので大変貧しく家からはわづかのお米しか持ってこれなかつた。そのお米で自炊してゐたのですが若くて食べ盛りですからお米ばかり食べてゐるとすぐになくなつてしまふ。そこで弥二郎はお豆腐のからをお米に混ぜておかゆのやうにして塩をなめながら三度の食事をして

ゐた。そのことを松陰は知ってゐました。松陰は実家の杉家で家族と一緒に食事をするのですが、ある時松陰のお膳に一皿のお菜が付いた。松陰はそれを兄嫁に頼みます。「この一皿を弥二郎のところへ持たせてやってくください」と。さうすると兄嫁は松陰がそれほど言ふのなら別にもう一皿作りませうと言ってくれます。ところが松陰は、それでなくとも実家の杉家には迷惑をかけてゐる、これ以上弟子のことでお世話になるわけにはいきません、と言って断るのです。そのやうにして弥二郎の下におかずの一皿が届けられた。品川はその一皿を目の前にして慈愛深い恩師の心に打たれ、杉家の方を向いて、しばらく頭が上がらなかつた、涙に頬を濡らしたと言はれてをります。

松陰の門下生として幕末から維新にかけて活躍した人は他にもたくさん出てをりますが、このやうに優れた弟子が輩出した理由についてよく私も考へるのですが、一言で概括して申し上げるのは非常に困難に思ひます。しかし初めにも触れましたが敢へて言ふならばそれは松陰といふ人の総合的人格そのものに、その人間的魅力に尽きるのではないか、と感得させられます。今日はそのことを松陰の文章に直接触れながら皆さんにも感じとっていただければと思ひます。

諸 生 に 示 す

初めの文章は安政四年（一八五七年）に書かれたもので松下村塾を松陰が実質的に主宰してゐた時期で「幽室文稿」といふ文集に収められてゐるものです。塾生といつしよに勉強をしてみたいある時に松陰は一つの論文を書き上げる必要に迫られます。その論文を完成させるためには他の事を一切やめて一ヶ月間の期日を限定し、集中してやり遂げたい、その間諸君とは逢ふことはできないが一ヶ月後の学問の進展ぶりを楽しみにしてゐるから大いに励んでもらひたい、と松陰の希望を伝へる文章です。

士別れて三日なれば刮目＊かつかもくして相待つ、一日見ずんば、三歳の如し。朋友相與ほうゆうあうそうよの情、学問日新の機、誠にかくの如きものあり、況や一月に於いてをや。余頃ろ心このこゝろに一文を構ふれども、事、考據こうきよに待つあり、遽率にわかに能く弁ずる所に非ず。因よつて蔽おほに一月を課し、諸君を謝絶し他業を廃棄し、以て之れを成就せんと欲す。……諸君顧おもふに亦時に乗じて精苦し、以て吾が目を刮かして、三歳の情を慰むるあれ。

※刮目……目をこすってよく注意してみることから人の学業が著しく進むのを待ち望むことを言ふ

「士別れて三日なれば刮目して相待つ」、「士」とは当時ですから当然武士のことですが、ここでは学問に志す者と言ひかへても良いと思ひます。この一文の前提が大切です。学問の道を着実に歩んで行くならばそれは日毎に充実して前進していくものだ、といふ前提があるのです。ですから学問に志す者は三日間も会はないでゐるとその間に相手の学業が進んでいて目がさまされるやうにその成長ぶりが心待たれるものだ、といふのです。「一日見ずんば、三歳の如し」、その学問に志した者の間ではもし一日会はなければ三年間も会はなかつたやうに久しい思ひがするものだ。かやうに短かい文章ですが学問に対する緊張感と深い思ひがよく込められてゐると思ひます。

同一の学問に志すことを松陰は別のところで「同学」と言つてゐます。同学とは例へば孟子に対して松陰は弟子である。松陰の弟子もまた孟子を学ぶ上では孟子の弟子である。ですから松陰も、また松陰の門下生も孟子に対しては同じやうに弟子になります。このことを同学の友といひます。「同業」といふのも同学を言ひかへた言葉ですが、これは先ほども触れましたやうに、松下村塾では昼間は先生といっしょに外へ出て畑を耕やし、夜は夜で松陰を囲んで勉強し合つた、このやうな雰囲氣のことを指してをります。「同学同業」の世界、学問の

道に志を向けた友人どうしと言っても良いでせう。さういふ友情で培はれた間柄であればこそ「一日見ずんば、三歳の如し」といふことになるのです。

「朋友相與の情、学問日新の機、誠にかくの如きものあり、況や一月に於いてをや」。朋友相與の情、友だちが互ひに手を取り合つて事にあたる気持、また学問が日に日に新しく進んでゆく機微といふのは実におろそかにできないものがある。たった一日、あるいは三日別れてゐてさへさうであるのに、これが一ヶ月となつたら想像に余りあるではないか、と言ふのです。

「余頃ろ心に一文を構ふれども、事、考據に待つあり、遽率に能く弁ずる所に非ず。因つて蔽に一月を課し、諸君を謝絶し他業を廃棄し、以て之れを成就せんと欲す」。自分はある論文(烈婦登波といふ人の伝記のこと)を書くことを心に決めたが、それには考據、いろいろと考へを定めるよりどころを持たねばならない。多くの資料を集めてくる必要があるので片手間にはできない。だから一ヶ月の期日を自らに課してその目的を達成したいと思ふ。その間は諸君とも会へないし他の事にも手を出さないことにする。そして「諸君顧ふに亦時に乗じて精苦し、以て吾が目を刮して、三歳の情を慰むるあれ」、自分と会へない間に皆さんは精進努力を重ね、一ヶ月後に成長した姿を私に見せて下さい。私の「三歳の情」を癒してほしい、と弟子に伝へるのです。

「諸生に示す」の書き出しの一行目は特に心に残ります。松下村塾での先生と弟子との交流、学問の雰囲気が良い出てゐる箇所と思ひます。繰り返し味はっていただきたいところです。

学問は道を得るに在り

次は松陰の代表的著作である講孟餘話の中の一文です。ここでは松陰は学問をするには勘どころがある、と言つてゐます。何が学問をする上でのポイントなのか、ただ時間をかければいいといふものでもない、そのことを明確に言つてゐるところですが、皆さんにとつても身近な問題だと思ひます。

凡そ学問の道死して後已む。若し未だ死せずして半途にして先づ廃すれば、前功皆棄つるものなり。学と云ふものは進まざれば必ず退く。故に日に進み、月に漸み、遂に死すとも悔ゆることなくして、始めて学と云ふべし。然らざれば皆井を棄つるなり。且つ曲芸を以て見るべし。書画を学ぶ者は、終身書画を学びて愈々己れの不足を知る。……故に泉に及ぶと云ひても、学問の極処に至れば事已に畢ると云ふにはあらず。学記に「学びて然る後

に其の足らざるを知る」と云へり。学べば学ぶ程益々高く、益々堅きの味を知るなり。然れども井を掘るは水を得るが為めなり。学を講ずるは道を得るが為めなり。水を得ざれば掘ること深しと云へども、井とするに足らず。道を得ざれば講ずること勤むと云へども、学とするに足らず。因つて知る、井は水の多少に在りて、掘るの浅深に在らず。学は道の得否に在りて、勤むるの厚薄に在らざることを。(盡心上篇第二十九章)

「凡そ学問の道死して後已む。若し未だ死せずして半途にして先づ廃すれば、前功皆棄つるものなり。」学問といふのは死ぬまで続くのだ。それを途中でやめてしまつてはそれまで積み重ねたものを棄ててしまふやうなものだ。そして「学と云ふものは進まざれば必ず退く。故に日に進み、月に漸み、遂に死すとも悔ゆることなくして、始めて学と云ふべし」と指摘します。先ほどの「諸生に示す」の一行目の文章と通ひ合ふものがあります。「然らざれば皆井を棄つるなり。」さうでなければ掘りかけた井戸を途中でやめてしまふやうなものだ。「且つ曲芸を以て見るべし。書画を学ぶ者は、終身書画を学びて愈々己れの不足を知る。」芸事を見てみなさい。書道や絵を学ぶ人たちは死ぬまでその道を学び続けていつてそれでも自分の不足、自分の至らなさがあるといふではないか。「故に泉に及ぶと云ひても、学問の極処に至れば事已に畢ると云ふにはあらず」。ある水源に達したと言つても、学問の最高のところに達し

たといつてもそれで終りといふことにはならない。礼記の学記篇にも「学びて然る後に其の足らざるを知る」と書いてあるやうに一定の境地に達すればより己れの不足が見えてくるものだ、と言ふのです。「学べば学ぶ程、益々高く益々堅きの味を知るなり。」これも同じことを重ねて言つてゐます。

その次からが松陰の本領が一層發揮されてくるところです。

「然れども井を掘るは水を得るが為なり。学を講ずるは道を得るが為なり。水を得ざれば掘ること深しと云へども、井とするに足らず。道を得ざれば講ずること勤むと云へども、学とするに足らず」井戸を掘る目的は何なのか、それは水を得たいがためである。水を得られなければどんなに深く掘つたとしてもそれは井戸とは言へない。それと同じやうに学問をする目的は「道を得る」ことにあると松陰は言ひます。その道を得ることができなければどんなに一生懸命勉強したと言つてもそれは学問をしたことにならないと言ひ切るのです。

「因つて知る、井は水の多少に在りて、掘るの浅深に在らず。学は道の得否に在りて、勤むるの厚薄に在らざることを」井戸の価値といふのはどれだけの水が出たか出なかつたかといふところにあるのであつて、浅く掘つたか深く掘つたかにあるのではない。同じやうに学問についてもその人が「道」を得たか否かが勤どころであつて、ただがむしやりに努力したからいいといふものではない。ここに出てくる「道」といふ言葉はこれまで学校で教へても

らへなかつたでせうから解りにくい言葉かと思ひます。概括して申し上げれば人としての生き方の核心、世の中にかに処して生きていくか、といふことにもならうかと存じますが皆さん自身の課題として考へていただきたい言葉です。

最後の一節の言葉は印象的です。日本人の学問の要諦が凝縮された表現であると思ひます。

嘉言林の如し

最後にご紹介するのは野山獄文稿の中の「士規七則」の冒頭の文章ですが、これは松陰が読書の喜びを語つてゐるところです。

冊子を披ひ繙はんすれば、嘉言林の如く、躍々として人に迫る。顧ふに人読まず。たとひ読むとも行なはず。まことに読みてこれを行なはば、すなはち千万世といへども得て尽すべからず。ああ、また何をか言はん。

「冊子を披繙すれば」、先人の文章、あるいは古典を繙くならば、「嘉言林の如く」、良い言葉、すばらしい言葉が次々と林のごとく出てくるではないか。そしてそれは「躍々として」迫つ

てくる。躍るやうにして自分の眼前に表はれてくるではないか。それなのに「顧ふに人読まず、たとひ読むとも行なはず」、人は読まうとしないし、たとへ読んでもすばらしいなと感動したことを実践しようとしなさい。「まことに読みてこれを行なはば、すなはち千万世といへども得て尽すべからず」、だから、本当に深く読みこなしてその感動したことを自分の身につけようとしていくなら読書の効用はつきないものなのだ、と松陰は述べるのです。短い文章ですが松陰の読書の姿勢が明瞭に写し出されてゐる個所と思ひます。

以上で松陰の文章の紹介を終へますが、松下村塾での勉学の雰囲気的一端でも伺ふことができたでせうか。このやうにして塾生たちは松陰との研鑽を通じてその長所をのばしていった。あるいは隠れた才能を引き出されていったのです。それも大地に根を張ったやうな思索を積み重ねてをります。確かに彼らは若かった。しかし当時としては一流の見識を持った青年として歴史の舞台に飛び出して行つた。そして松陰が身を以て示した志や目的を彼らが脈々として受け継いでゆき幕末から維新にかけて少しづつではあつたでせうが、実を結ばせていったのです。

この合宿教室もある時には「四泊五日の松下村塾」と言はれたことがあります。現在評論家として活躍中の方が取材され、この合宿教室は村塾の学風を受け継いでゐると指摘され、週刊誌に掲載して下さいました。結果としてそのやうに表現されることがある

かもしれないが、肝心なことは皆さん自身の力で「心を通はすことができる学問の場」として、これからの時間を充実に過ごしていくことができるかどうかだと思います。「心を通はす」こと自体が困難になった時代であり、そのやうに認識せざるを得ないことは大変残念ではありますがありますが、これといった特効薬があるわけでもないでせう。学問をする上で松下村塾の塾生たちが置かれてみた境遇は現在の皆さん方より遙かに悲惨であったと思ひます。それを思へば皆さんの方が手段や方法論においては数段恵まれてゐます。目の前の友と言葉を交すことから、あるいは古典を繙くところから第一歩を踏み出さうではありませんか。

最後に、私が学生時代より師事し今日まで御高導をいただきます九州造型短期大学の小柳陽太郎先生(社団法人国民文化研究会副理事長)から、この合宿教室直前に頂戴したお手紙の中に松陰に触れられた個所がありますのでご紹介して話を終へたいと思ひます。

「松陰先生の御言葉、全集のどの一頁を開いても、実に瑞々しく、しかも張りつめた弦のやうな爽やかさと力強さ——学問とは多言を要せず、たゞ先人の言葉の調べにこの身を合せること尽きることを、改めて実感させられます。」

『ビルマの豎琴』再考

——竹山道雄が後世に

伝えるメッセージ

東京大学名誉教授

福岡女学院大学教授

平川 祐弘



雪景色の阿蘇

「太平洋戦争」と「大東亜戦争」

東京裁判史観

文学に現れた太平洋戦争と大東亜戦争

キプリングの「白人の重荷」

徳富蘇峰の「黄人の重荷」

戦場にかける橋

アーロン収容所

『ビルマの豎琴』

和解——自誇と自虐を越えて

「太平洋戦争」と「大東亜戦争」

東アジアで戦はれた第二次世界大戦は、米国を中心とする連合国側によって、The Pacific Warと呼ばれました。それに対して日本側は「大東亜戦争」と当時呼びました。第二次世界大戦にまつはる解釈については、それを「太平洋戦争」と見る見方が、それを「大東亜戦争」と見る見方よりも圧倒的に強い。日本国内においてははまだしも、日本国外においてはインドネシアなどを除けば国外では圧倒的に強い。アジアで戦はれた第二次世界大戦は、「太平洋戦争」であつたか、「大東亜戦争」であつたか。その呼び方でその戦争の性格についての解釈に相違が出てまゐります。それを申しますのは、「大東亜戦争」といふ表現には、東アジアを白人の植民地支配から解放するのだといふ日本側の大義名分が含まれてをりました。

第二次世界大戦で日本は結局負けましたけれども、東アジアの解放のために戦つたといふ側面がとにかくありましたし、「結果的にはアジアの国々は独立したではないか。それはシンガポールなどで威張つてゐた支配者のイギリス人を、マレー人や中国人の見てゐるところで日本兵が平気でぶんぐつた。それで白人神聖視が木端微塵になつたからだ」といふ類の見方もございます。これは渡部昇一教授がエッセイ集『文明の余韻』（大修館書店）で、ハーマン・

ウォークの『戦争の嵐』といふ英米人の目から見たシンガポール陥落を扱ったベストセラー小説を論評したエッセイに出てくる見方で、この前の戦争の意味をはっきりさせてくれるとして、渡部教授はかう申されました。「この前の戦争は『太平洋戦争』といふよりも、日本が言ったやうに『大東亜戦争』という呼び方がよく合う点もあったのである」。しかしここで皆様にくれぐれも注意していただきたいのは、「太平洋戦争」といふより「大東亜戦争」といふ呼び方がよく合ふ点もあったといふ、その「も」といふ言ひ方でございます。

渡部教授は、「太平洋戦争」といふ呼び方は間違ひで、「大東亜戦争」といふ呼び方が全面的に正しいと主張されてゐるものではありません。過ぐる第二次世界大戦、日本はアジア太平洋地域で戦ひ、いろいろな局面もあったが、その中には「大東亜戦争」といふ呼び方がよく合ふ点も一部にはあった。その部分的性格を、その「も」で指摘してをられるわけであります。

私はアメリカが対日本の戦争を「太平洋戦争」と呼んだのは、その主戦場がハワイ、ミッドウェイ、ガダルカナル、サイパン、フィリピン、硫黄島、沖縄とことごとく太平洋の島々なのでありますから、「太平洋戦争」と呼ぶのはいたって自然で素直で無理がないと思ひます。しかし日本と戦つた中国側は、国民党軍にせよ、人民解放軍の前身の八路軍にせよ、中国本土で戦つたのだから、「抗日戦争」といふ言ひ方はピタリとしても、「太平洋戦争」といふ言



ひ方には違和感があるだらうと思ひます。しかし、ここで皆様にぜひともご注意願ひたいのは、中国の人々の圧倒的多数にとつて過ぐる大戦は、「太平洋戦争」ではないかもしれないが、しかし決して日本が主張したやうな「大東亜戦争」といふものではなかつたといふことでございます。

日本は「東亜解放」などといふ美辞麗句を連ねて、いはゆる支那事変の泥沼にはまりこみましたが、その原因が何であれ、中国の民衆に塗炭の苦しみを強ひたものであつたことに間違ひはない。日本は「東亜解放」などと言ひましたが、「解放」と叫ぶ戦争には由来怪しいものが多いのであります。

ソ連軍は一九四五年に東ヨーロッパを「解放」しましたが、今、東欧諸国はソ連の手で「解放」されたといふ抑圧状態から自由になつてほつとしてをります。北朝鮮は一九五〇年に韓国を「解放」しよう

としましたが、大韓民国は幸ひにも「解放」されなかつたお蔭で今日の相対的な繁栄を享受してをります。一九八九年、天安門広場の平和的デモを武力的に鎮圧したのも、人民解放を名乗る軍隊でありました。

さて、このやうに見てまゐりますと、「大東亞戦争」といふ言ひ方は日本国外でははなはだ通りが悪い。その通りの悪い名前と、その名前が含む、「大東亞戦争」は日本による大東亞の解放戦争であつて義戦だつた、といふ歴史解釈とは、やはりこれは海外では通りが悪い。それで「太平洋戦争」といふ呼び名が定着し、戦争に対する見方もその呼び名に沿つた線で定着してまゐつたわけであります。そしてそれは、言ふならば第二次世界大戦で勝つた側の歴史観——勝者の歴史といふ見方が大勢を占めつつあるわけでございます。

一体、戦争における勝者と敗者の間では、勝ち負けの程度にもよるのでありますけれども、勝者がただ単に戦争に軍事的に勝利しただけでなく、過去の歴史の解釈権を奪ふほどの政治的、心理的勝利を収めることができます。

東京裁判史観

第二次世界大戦で勝利者であつたアメリカは、敗戦後、占領地の情報も管理いたしました

から、日本やドイツやイタリアで情報を管理し特定の情報のみを流して敗戦国民の洗脳に努めました。それは一種の、英語で言ふインドクトリネーションでありまして、一九四八年(昭和二十三年)の市ヶ谷における極東国際軍事法廷で検事側が主張し、多数判事もほぼ認めた歴史観が、日本の大新聞やラジオによっても繰り返し宣伝公布され、その上、日本の左翼がそれに熱心に同調したこともありまして、世にいはゆる「東京裁判史観」なるものが広まりました。しかし、戦時中に日本で唱へられた「皇国史観」なるものにも実にかしな点が多々ございましたから、日本国民の多くは戦争に負けてひどい目に会ったと思つて軍部を恨んでおりましたから、皇国史観よりは東京裁判史観の方が受け入れられる素地があつたといふことは否定できないかと思ひます。

それでは東京裁判史観とは何かと申しますと、東京裁判におけるアメリカのキーナン検事や多数派判事の主張といったものの解釈をまとめてみますと、「日本は昭和に入つてから一貫して侵略を企んできた。満州事変がそれであつたし、支那事変もそれであつたし、ハワイ真珠湾の奇襲もそれであつた。第二次世界大戦で日本はナチス・ドイツ同様、悪者であつた」といふ歴史観でございます。東京裁判そのものにつきましては、「勝者が敗者を事後法によつて裁くことがそもそも間違つてゐる。日本側の残虐行為のみを取上げて、原子爆弾の投下やB 29の焼夷爆弾による一般市民の何十万といふ単位の焼殺を取上げないのは片手落ちである」

といふ感情は、私どもの世代には随分強くございました。アメリカ側にも東京裁判を、あれは勝者の裁判である。"Victor's Justice"と批判し、さういふ題で書物を出した方もをられます。すなはち、東京裁判そのものについては、その公平を疑問視する声はかなり出たのでございます。

私は、東京裁判の公正を疑問視する弁護士や学者が出たといふ点だけでも、アメリカ人はフェアな国民だといふ感じを持ってをります。その「東京裁判史観」は、米・英・オランダといった西側だけでなく、ソ連にも中国にも東南アジアにも、いやそれだけでなく日本そのものにも強く残りました。すなはち、「日本の軍部はかねてから侵略の野心を持ち、それでアジア大陸に進出だか侵略をし、米英をはじめとする連合国側とも戦争を行ふに至った。第二次世界大戦において、日本は侵略者であった」といふ見方であります。

米英人が、自分たちが戦った戦争は正義の戦争だと思つたのは当然であります。第二次世界大戦の際のドイツは、第一次世界大戦の際のやうな数ある帝国主義国の一つではなくて、ナチス・ドイツでありました。それは言ひ換へますと、ユダヤ人六百万人を計画的に、意図的に殺害するといふ人道に反する罪を犯した国でありますから、そのドイツを打ち破つたのは当然、正義の戦ひといふことになります。日本は東洋のドイツであるから、その軍国主義日本を打ち破つたのも正義の戦ひで勝利を収めたのだ、といふ論理になるわけでございます。

中国人民も一九三〇年代から四〇年代にかけて塗炭の苦しみを味はひましたから、そしてそれは実は中国内部において国民党と共産党がしのぎを削ってゐたために生じた苦しみといふ面もなかったわけではないのでございますけれども、しかし中国の民衆の多くが、過去においても現在においても「シアオリーベングイツ」と、「小日本鬼子」と書きますけれども、「日本人といふあの侵略者め！」とさういふふうには日本人に対していまだに感情を持つてゐるわけでございます、これは事実として認めなければならぬかと思ひます。

中国共産党の威信は今非常に低下してまゐりましたが、抗日戦を指導して勝利を収め、帝国主義勢力を中国本土から一掃したといふ功績でもって国民の支持を取りつけてまゐりました。中国の人々にとって、対日戦争は当然、正義の戦争だつたといふことになります。それは自分たちの土地の上で戦争が行はれて、個々の戦闘には必ずしも勝たなかつたかもしれないが、戦争には勝利したのですから、日本人が日露戦争を義戦と感じた以上に、中国人は中日戦争を義戦と感じたのではないでせうか。

その頃、中国から留学して東京の第一高等学校にゐた竹山道雄の生徒たち、さういふ留学生たちも続々と大陸へ帰って行つたわけであります。

さて、アメリカから見ても中国から見ても、半世紀前の戦争は「大東亜戦争」とは呼びびがたい。それでは極東国際軍事裁判でキーナン検事やウェブ裁判長が認定したやうな歴史観

が正しいのかと申すと、私はまづ日本帝国をナチス・ドイツと同じもののやうに認定されては困ると思ひます。ナチス・ドイツがユダヤ人を殺害したのは、国家が関与し、国家が主導した組織的犯罪でございます。日本も数々の残虐行為を犯してをります。満州で行はれた石井部隊の生体実験など国家の最上層部は関係しませんでした。程度之差こそあれ、あれは組織的犯罪だったのではないかとおもひます。しかしナチス・ドイツの罪とは質量ともに違ひがあるのではないか。

それから次に、昭和に入つて以来の日本が一貫して侵略的体質を持った国であつたかと言へば、相手側にアクションがあつたからこそこちら側にもリアクションがあつた場合が多いのでございます。それを一方的に断罪してよいかといふ問題は残ります。持たざる国日本が英米本位の持てる国の国際秩序に挑戦したことは事実でありました。満州事変がさうです、国際連盟脱退もさうでした。しかし、日本国民は自分たちが積極的に既成秩序を乱してゐると感ずるよりも、米・英・中国などによつて、逆に包囲されてゐるなどと感じたものでした。

それで私の立場は何かと申しますと、米国占領軍と日本左翼の合作とも申すべき東京裁判史観風の「日本悪玉論」には与しません、それかと言つて、大東亞戦争肯定論的な「日本善玉論」にも与さないといふことでございます。皆さんの中には、自分たちは日本人なのだから、日本が過去にした行為はこれをあくまで弁護すべきだとお考への方もをられませうが、

私は日本の過去について、誤解されたり曲解された部分は弁明し釈明しようと思ひますが、日本のしたことは何でもよろしいと言ひ張るやうなナルシズムの態度では、世界の人々をもちや説得できると思ひません。さうした方は日本国内で右翼的心情の老若男女には「頼もしい人」と思はれるかもしれないが、私の目には擬似愛国者と映じます。戦時中の日本軍は婦女暴行などを働いた兵士をもっと厳しく軍法会議にかけるべきであつた。さうした犯罪を大目に見たことは誤りであつた。それと同様、歴史上自国の過ちも見過してはならない。といふか、日本国内でも盲目的に大東亜戦争を肯定するやうな言動が出れば出るほど、諸外国では反動的に「日本悪玉論」が強まることを覚悟しなければならぬ。今はそれほど情報流通が頻繁に行はれてゐる世界のマスコミの情勢でございます。

文学に現れた太平洋戦争と大東亜戦争

それでは本題に入ります。その本題とは、さういふ米英側から見た太平洋戦争、日本から見た大東亜戦争、さうしたものはいったい文学作品にどういふふうに見えてゐるか、といふことでございます。

これからの日本人は外国から来た留学生の皆さんにも納得できるやうなお話をしなければ、

これからの国際関係を平和裡に維持できないのではないか。しかもその場合、割方デリケートな問題も上手にこれを取上げて、両面から物事を見て行くことが大切だ。さうすると別様に見えてくるのではないか。文学に現れた太平洋戦争と、文学に現れた大東亜戦争といふ言ひ方は、同じ過去の歴史を米英側、あるいは中国側、あるいは朝鮮側から見るとともに、日本側からも見て、その両方を突きつけてみたらどうだらう。さうすると意外に、今まで皆が思ひ込んでゐるのは違ふ視野が開けてくるのではないか。それが「比較」ではなからうかと考へるわけでございます。

それは別の言ひ方をしますと、一つの事件を表と裏と、両方から見るといふこと。“difocal approach”といふのがございます。写真機でフォーカスと申しますね、焦点でございませうけれども。バイフォーカルの「バイ」は「二つの」といふ意味で、要するに日本側からもアメリカ側からも見てみる。前に「トラ・トラ・トラ」といふ映画がございました。これは太平洋の海空戦をアメリカ側からも、山本五十六の側からも、両方から見ると語らせたものと記憶いたしますが、過去の歴史についても、なるべく表裏を合はせ見て、バランスの取れた見方をしたいと思います。

初めにまづ、第二次世界大戦に先立つ前史から考へていかうと思ひます。

東京裁判で不公正がある。あれは不公平だといふことの一つに、あの裁判では、昭和に入

つてからといひますか、正確には一九二八年から一九四五年までの日本の行動が問題にされたのであります。それに対して、絞首刑になりました東条英機氏は処刑される前に「過去百年といふスケールで判断してもらひたい」と申されました。その百年とは、イギリスは一八四一年に阿片戦争で香港を取りました。阿片戦争でイギリスが東亜を侵略して以来の百年—一八四一年から一九四一年まで—、私どもが子供の時歌った唱歌の歌詞で申しますと、「東亜侵略百年の野望を今や打ち砕く…」といふのが私どもが子供の時に歌った歌でございますけれども、「東亜侵略百年、そのイギリスの野望を打ち砕くために日本は戦ったのだ」と、それが東条氏の主張でございます。

その阿片戦争につきまして、アメリカ側はその阿片戦争が起きた当初から批判的でしたが、イギリス側は、あれは要するに、中国が通商の自由を妨げたから起こったのだといふ解釈であります、長い間イギリスはその非を認めませんでした。

そのイギリス側の非がイギリスでは公認されましたのは、第二次大戦後十三年の一九五八年にアーサー・ウェーリー—あの『源氏物語』を英訳した東洋学者であります—、あのウェーリーが中国人の目を通して見た阿片戦争 *The Opium War through Chinese Eyes* といふ本を出し、林則徐の目から見た阿片戦争をイギリスの読者に紹介してくれたからでした。

私はその本が出ましたところ、ロンドン大学の先生の家に下宿してをりまして、おかみさん

もインテリでありましたけれども、その本を読んで、「イギリスも昔は悪いことをしたんだなあ」と大変素直に驚いてをりまして、私はその時に、戦争をして一つの戦ひに勝利するよりも、公平な本が出て、その一冊の著書が人々の蒙を啓くことの方がよほど効果は大きいものだなあと感じました。

アメリカがイギリスの香港占領に批判的でありましたのは、アメリカは十九世紀を通じて植民地を持たない主義だったからであります。しかしそのアメリカも、ハワイを合併し、一八九八年にスペインとの間に米西戦争を起こし、スペイン領であったフィリピンを奪ひ、植民地とし、太平洋に進出だか侵略だかを開始いたしました。

キプリングの「白人の重荷」

一八九九年、イギリスの国民詩人ラジャード・キプリングが「白人の重荷」といふ後に大変有名になる詩を書きました。原詩は八行一連の詩が全部で七連ありますけれども、最初の二連だけを引用いたします。英語では題も“The White Man's Burden”といふのですが、英語から読んでみます。

Take up the White Man's burden——

Send forth the best ye breed——

Go bind your sons to exile

To serve your captives' need ;

To wait in heavy harness

On fluttered folk and wild——

Your new-caught, sullen peoples,

Half devil and half child.

Take up the White Man's burden——

In patience to abide

To veil the threat of terror

And check the show of pride ;

By open speech and simple,

A hundred times made plain,

To seek another's profit,

And work another's gain.

訳も読んでみますと、

白人の重荷

キプリング

白人の荷を背負え——

君たちが育てた最良の息子を送れ

君たちの捕虜の需^{もと}めに応ずるために

君たちの息子に義務を課し流^る浪の地へやるのだ

重い武装をつけたまま

動揺した野蛮な民の世話をやくためだ——

君たちが新たに捕^{つか}まえた、無^ぶ愛^{あい}想^{そう}な

なかば悪魔で、なかば子供のような連中だ。

白人の荷を背負え、——

忍耐強く待ち構え、

恐怖の威嚇をヴェールでおおい、

得意満面の表情を見せぬよう気をつけろ。

単純明瞭な言葉で

百遍も囁みくだいてわからせるのだ、

他人の利益を求め、

他人のために働いているのだということ。

Take up the White Man's burden—

Send forth the best ye breed—

この二行目の *ye* は英語の *thou* 汝といふ *thou* の複数形で、今の英語で言えば *ye* は *you*、「君たち」。すなはち、「君たち、アメリカ人」といふ意味であります。アメリカが育てた最良の青年をフィリピンへ送って、土着民といひますか、現地のフィリピン人を大勢捕虜にしたからその世話をやいてやれる、それがその次の二行の

Go bind your sons to exile

To serve your captives' need ;

といふ意味で、to exile は「流浪の地」と訳しましたが、「僻遠の地」「瘴癘の地」へ義務として送りこめといふ意味であります。捕虜の世話をやくためにと申しましたが、この captives といふのは、軍人や兵隊で捕虜になった者の謂だけではなくて、フィリピンを植民地としたから土地の者は皆、captives なのだといふ発想かと思ひます。

To Wait in heavy harness

On fluttered folk and wild

動詞の wait は wait for の「待つ」の意味でなくて、次の行の on と続いて wait on、すなはち「はべる」「世話をやく」といふ意味になります。給仕さんの waiter、waitress の wait と同じ意味であります。アメリカの青年を重武装させて、原住民に奉仕するために出動せろ、といふのです。そして原住民は fluttered and wild folk 「動揺した野蛮な民」だ、といふわけであります。この連中は

Your new-caught, sullen peoples,

Half devil and half child.

「君たちが新たに捕まえた、ぶすつとした無愛想な、なかば悪魔で、なかば子どものような連中だ」といふのです。

(先生は、この後、第二連の英語と訳を繰り返された。)

この詩は植民地事業については先進国であるイギリス帝国の代表的詩人として、当時二十四歳であったキプリングが、「君たち」アメリカ人に、フィリピンを植民地として経営するためにはどのやうな心構へで臨むべきかと説いたわけであります。そしてキプリングの言ひ分は、大変おめでたいのですが、植民地開拓の事業は利害を度外視した文明開化の事業だ、といふわけで、それで第二連の終はりの二行、「自分の利益でなく、他人の利益を計り、他人様のために働いているんだ」とさういふ主張であります。

もつとも、日本人も満州国の建設は王道楽土の建設といひ、朝鮮の経営も文明開化の事業といふ建前でありましたから、キプリングをあまり冷やかすことはできないわけであります。それから、植民地経営が鉄道や道路網を整備し、衛生状態をよくし、伝染病を減らしたといふやうに文明開化の事業といふ側面があつたことも、これまた事実でございます。

それではそのやうな利他的と錯覚する事業を遂行する動機は何によつたか。何であつたかと言へば、それは使命感によつてでありました。それはキリスト教宣教師の場合にはキリスト教化の事業といふミッションの意識で、それが世俗化したものが文明開化の事業といふ使命感であつたと思はれます。

この詩は、専門家に言はせますと、讚美歌の調子と同じ調子で書いてある由で、歌として

力強いのは、そのためもあるかと思ひます。盛られた思想は硬い思想でありまして、いはゆる私的な叙情詩の自分の内面をうたったものではなくて、パブリックな公的な詩であり、実はアングロサクソンの世界では大変にもてはやされました。

この詩のお蔭で White Mans' burden 「白人の責務」「白人の重荷」といふ表現は、この時以来自立して今日に至るまで独り歩きしてきたと言つてよく、「白人の重荷」と言へばそれが何を意味するかは、英米人には説明抜きで了解される表現となつてをります。

キプリングはその頃大変な人気者でありまして、彼の詩の一つ一つが天才がその時代へ伝へるメッセージであるかのやうに愛読されました。キプリングの詩は文芸雑誌に発表されたものではございませんで、ロンドンの『タイムズ』紙に出ました。この一事で、キプリングが当時のイギリスの単なる文芸的存在以上の社会的存在だったといふことがおわかりかと存じます。

キプリングをはじめ当時の二十世紀の初頭のイギリス人の多くは、地球上あらゆる人間に政治的に平等の権利があるとはゆめ考へてもをりませんでした。それどころか、イギリス人は文明社会の道徳的規律、それがすなはちヴィクトリア朝イギリスのキリスト教的道徳律でありますけれども、それを法、「The Law」として大文字に書きまして、定冠詞をつけて、そのやうな文明の法を、文明の掟を未開の民の間に押し広める、それが文明開化の使命であり、

その責務を担ふことが「白人の重荷」と思つてゐたわけでありませう。そしてイギリスは国家としてはそのやうな法を維持する世界の警察を以て任じてゐたわけでもあります。

— 当時はイギリスが世界の最強国でありました。もしイギリスが外にあって手を握るべき相手があるとなれば、それは同じ英語を話すアメリカでありました。それですからキプリングは、「白人の重荷」の詩をロンドンの『タイムズ』紙上に公表するに先立って、当時のアメリカの副大統領だったセオドア・ルーズベルトに送つたのであります。その詩を受け取つたルーズベルトがキャットボット・ロッジといふ政治家に感想を述べた手紙が残つてをりまして、「詩としてはむしろつまらないが、膨張主義的見地からはいいセンスだ」と書いてをります。ルーズベルトは、この詩が米国民衆にアピールするなといふことを心得てゐたといへませう。この詩は、一九〇〇年二月四日にロンドンの『タイムズ』紙に出て、翌五日にアメリカの新聞に一齐に掲載されて、その翌六日にアメリカの上院はアメリカによるフィリピン統治を決議しました。ルーズベルトは一九〇四年に第二回の大統領選挙に臨みましたが、選挙直前にわざわざキプリングに手紙を送つて、大統領に選出されたら、自分は「白人の重荷」を担ふつもりであると公約してをります。要するに帝国主義的な政策を掲げて植民地経営に乗り出したわけでございます。

今日、帝国主義といひますと、悪の象徴のやうに言はれますが、一昔前までは「帝国」と

いふ言葉には輝きがありました。ニューヨーク州は別名を「エンパイア・ステイツ」と言ひますけれども、そこでできた一番高いビルディングは「エンパイア・ステイト・ビルディング」。日本でも、東京で戦前一番立派なホテルといふのは「帝国ホテル」だったわけであります。「帝国」といふのは、いかに輝きのあるものとして考へられてゐたかがおわかりになるかと思ひます。

徳富蘇峰の「黄人の重荷」

英米人が「白人の重荷」を担ふと言ひ出しますと、ナシヨナリズムの強かつた明治の日本は黙つてをりませんでした。日露戦争に勝利した翌明治二十九年一月、熊本出身で実はキプリングとほぼ同年配の徳富蘇峰は『国民新聞』の紙上に「黄人の重荷」と題する一文を掲げ次のやうに大和民族の自己主張をいたしました。引用を読んでみます。

英国の文人キプリング氏は、白人の重荷を歌へり。是れ白哲人種が他の人種を統御するの責任あり。且つ權威あることを自覚したる告白なり。然れども若し白人に重荷あるとせば、黄人にも亦た重荷あらざるべからず。吾人は我が大和民族に向て此の重荷の自覚を促さずんばならず。

徳富蘇峰はジェーンズの熊本洋学校で英語を叩きこまれた人ですから、非常に英語がよくできました。国際的論説記者の資格を持った珍らしいジャーナリストで、外国の新聞をよく読んでをりました。イギリスやアメリカの帝国主義的主張が蘇峰のうちにあっては、たちまちに日本の帝国主義的発展の主張になって現れまして、キプリングの「白人の重荷」の主張が、蘇峰の論説にあつては「黄人の重荷」の主張にほとんど連鎖反应的に現れたものかと思はれます。

その先を読んでみます。

我が大和民族は、自から僭して、黄色人種の首たるものにあらず。我が大和民族の眼中には、人類ありて人種なし。白と云ひ黄といふが如き、皮相的の差別は、殆んど齒牙にだも掛けざる也。然も自から求めざるも、世界の二大人種の一なる、黄色人種は、何れも我が大和民族を仰がざるものなし。単に支那、朝鮮、暹羅等の黄色人種のみならず、印度、波斯、亜拉比亞、埃及、土耳其等、凡そ白哲人種の仲間以外に属し、若しくは属するものと認定せられたる各人種は、何れも大和民族を以て、其の希望を繋ぐ標的となしつつあるが如し。吾人は日露戦争が、世界の表面に散在する白哲人種以外の人種に、絶大なる感化を与へたることを、無視する能はず。

その日露戦争による黄色人種の国、日本の勝利は、白人不敗の神話を打ち破りました。そ

れだけに、その精神的影響はロシア周辺諸国をはじめ、広くアジア諸国に広がったが、それではその「黄人の重荷」といふ蘇峰の主張が、「白人の重荷」といふキプリングの主張と同じかといふと、同じではないのです。キプリングの場合には、白人が白人以外の他人種の重荷を背負って他人種のために文明開化の事業を行ふといふ主張でしたが、蘇峰の場合には、黄人（黄色人種）のうちの日本人が他の遅れた yellow race の重荷を背負ふといふ主張だからです。

蘇峰は初めのうちは言葉づかひが慎重でしたが、「黄人の重荷」the Yellow Man's Burden といふ言葉は the White Man's Burden といふ標語のやうには独り歩きはしませんでした。しかし、「東亜の盟主日本」といふ言葉が日本国内でしきりと唱へ出されました。その「東亜の盟主日本」と「アジア人のためのアジア」といふ二つの主張が結びつくと、これは必然的に大東亜共栄圏の理念に転化していきます。この蘇峰のいかにも日本の男らしい主張は、青年将校の革新派にはさぞかしアピールしたことと思はれます。日本人の多くは西洋文明へのあこがれを一面では持ちながら、他の一面では蘇峰がいふところの「白閥打破」の叫びにひかれました。先進国には植民地を持つ特権が許されてゐることを暗黙裡に承認しながら、そして自分自身も半ばその仲間入りをしたいと思ひながら、しかも他面、白人支配の世界の現状を打破したいとも感じてみました。

そして日本はその後、東亜の盟主であるといふ自己主張を裏付けるやうに、朝鮮を併合し、満州国を建設し、北支那に権益を確保いたします。そしてアングロサクソンと対決する方向に進み、白人によるアジア植民支配の解放を叫びます。

この議論は日本国内では景気がよくて歓迎されましたから、それに対して積極的に口を開いて反論することは難しかったし、反論した人は少なかつたやうに思ひますが、日本の知識人の名譽のために申しますと、反対者は皆無ではございませんでした。その一人である河合栄治郎教授は昭和八年十一月の『文芸春秋』に「五・一五事件の批判」を書いて、「日本人はアジア諸国の独立の回復を主張するけれども、日本は内部において朝鮮などを植民地にして、その土地の人に十分の自由を与へてゐない。アジアの国民がそんな日本を信用してゐると思ふならそれは錯覚である。もし日本が領土的野心を持たないで、アジアにおいて外国と平等の通商貿易を意図するなら、直接的に通商の自由を標榜するべきであつて、大アジア主義などを唱へるべきではない」とたしなめてをります。

私の感じるところでは、日本の男は子供の時から割方甘やかされて育つせゐるか、ナルシストが多うございます。特に日本主義者にそれが多うございました。それで自国の行動については、ダブル・スタンダードと申しますか、大目に見て許す人が多いのでございます。日本が台湾、朝鮮などの植民地を持つことについては、あれはイギリスを模範として植民地帝国

を作ったわけで、その時は先進国イギリスの真似をしたまでだ、悪くないだらうと言ひます。そのくせに、イギリスがアジアに植民地を持つてゐるのはけしからん、だからアングロサクソンの白閥の世界支配を打ち破らねばならない、その結果生じたのが大東亜戦争だから、大東亜戦争は義戦だ、と主張されます。そして事実、私たちの先輩は、正義の戦さと信じて死んでいった人が多かったのですが、それならそれでよろしい。日本は南方占領諸地域に独立を与へると同時に、朝鮮にもはつきりと、昭和十八年にでも独立を与へると明言してゐればそれは立派だったと思ひますが、戦前も戦中も戦後も、日本はそのやうな原理にふさはしい行動をきちんといたしませんでした。

さて、以上が今から半世紀前に戦はれた戦争についての前史といふか、片方に白人の重荷の主張があつたから、黄人の重荷の主張が出てきたのだといふ連鎖反応（チェーン・リアクション）の一例を御説明申し上げます。

古代中国の兵法家、孫子の「敵を知り、己を知れば百戦百勝す」といふ教訓がございます。相手を知り、己を知り、徳富蘇峰の大東亜共栄圏のイデオロギーといふのはどうやって出てきたのか。今のやうに「黄人の重荷」などといふ表現を見せると、日本語はそれほどできない英米人でも、なるほど片方にキプリングがゐたから徳富蘇峰も出てきたのだな、さう思ふと単に日本にだけ侵略者といふレッテルを貼ればすむ問題ではないな、といふ自覚が生ずる

のであります。ですから、やはり両方の面を見ることが大事であります。正義の女神は秤を持ってゐる、その秤のことを英語で、*Balance* といふのであります。

日本の過去に対して私は檢察官的に臨みたくないけれども、だからといって甘やかすおつかさんとか、単なる弁護士の立場には立ちたくない。本席にお集りの皆様にもやはり両方が見える二本足の人になっていただきたいと感じるわけであります。

戦場にかける橋

それでは次に第二次世界大戦についても、日本側と連合国側と双方から見てみませう。

イギリスで、第二次世界大戦中の日本なるものについてのイメージを作るのに一番貢献したのは映画「戦場にかける橋」だといふ説がございます。戦争中の日本軍がいかなるものであったか、といふイメージは戦時中よりも戦後に作られたものが多いのです。

映画を御覧になった方も多いと存じますが、話はかうです。一九四二年、イギリス兵の捕虜がタイとビルマの国境近くのクワイ川で軍用列車のために橋を架けるやうに強制労働に動員されて、それはひどい条件下で仕事を課せられた、それが映画に出てくるわけです。将校は働かなくてもいいのに働けと言はれてジュネーブ条約に反する、と英軍将校の捕虜が抗議

しますが、日本側はそもそもジュネーブ条約に入っていないといふか、日本はもともと自国兵については（いまの中華人民共和国と同じですが）捕虜といふものを認めなかった国です。それで反抗的な英軍将校がひどい懲罰を受ける。残酷な情景が出てまゐりますが、しかし実際はおそらくこの映画よりもっと残酷なものだったらうと思ひます。（先生は、英軍捕虜の一人であつたレオ・ロリングスの著書『クワイ川捕虜收容所』の一節に触れられた。）

映画の中では日本の鉄道隊が橋を作つても作つても橋は壊れてしまふ。それは日本の優秀な土木技師は内地に留めおかれて、南方の鉄道隊では橋が架けられないといふことになつてゐます。そこで捕虜收容所長の斎藤大佐は大変焦るわけで、その弱みに捕虜の中に土木の専門家がゐるイギリス側がつけこみ、捕虜のトップ、ニコルソン大佐が日本側に協力を申し出ます。「その代はり、待遇をよくしろ」と。日本軍対英軍捕虜のゲームで、イギリス側は自分たちは橋を作る技術——テクノロジ—を持つてゐるといふ切り札を持つてゐるわけですから、だんだんイギリスの捕虜の方が日本側に対して上手に出てきます。それがイギリス人といふか欧米人があの映画を見て嬉しいと感じたところだらうと思ひます。しかし日本軍に協力してインド侵攻のための橋を作つてゐるのですから、イギリス軍の若い将校がたまりかねてニコルソン大佐にこんな協力をしていいんですかと詰問しますと、ニコルソン大佐は、立派な橋を架けておけば橋はわれわれが戦争に勝つた後も役に立つ、これは文明の事業だ、お前ら

白人の荷を背負へ、といふことになるわけでありませう。

さうしますと、イギリス人にとつては戦前の植民地化の事業も正しかったし、戦争中も虐待された捕虜がこれだけ頑張った。あのクワイ川マーチは英国人の人間としての尊厳の讃歌となりましたが、不思議なことにあのマーチは日本でも大変流行いたしました。

しかし、実際には日本に積極的に協力したイギリスの将校はゐなかつたし、日本の鉄道隊の技術はすこぶる優れてをりまして、橋の設計はもちろん日本側がやったといふのが事実でございます。(先生は、日本の鉄道隊の元隊員たちがこんな映画を作られたことに対する悔しさからか鉄道の機関車をタイから買ひ戻して靖国神社に奉納し、これが展示された事実を述べられ、その措置がはたして正しかったか否かについて疑問を述べられた。またこの映画の原作者であるフランス人ピエール・ブールは、西洋は方法論に優れ科学を自己のものとし、他の文明に優越するとのヴァレリ一流の思想に囚はれてゐると述べられ、さらに瀬戸大橋に見られるやうに日本の架橋技術が世界のトップに達してをり、この面で西洋の優越は神話となつてゐる現状を紹介された。)

アーロン収容所

さて一九四五年八月十五日を境として、クワイ川捕虜収容所から遠からぬ辺りにたくさん

の別の収容所が作られました。日英主客を異にしたその一つが、ポツダム宣言を受諾して降伏した日本陸軍が入れられたアーロン収容所でございます。会田雄次氏が一九六二年に出した『アーロン収容所』は、今では中公文庫に入っておりますが、ベストセラーとなった本でございます。(先生は、この本の中から、イギリスの女の兵隊たちが日本兵捕虜に対し、従僕をこき使う横柄な女主人のやうな態度を示し、ある時は、その中の一人の女が掃除のために部屋に入った会田氏を気にもとめず、全裸で鏡に向かひ髪をすき続ける様はあたかも犬猫の前では人は裸を恥づかしかることもないといふ風であつたとの場面を引用された。)要するに会田雄次氏は、男と認定されなかつた、といふか人間とみなされなかつた。かういふ扱ひをされると、会田教授が後になつて『ヨーロッパ・ヒューマニズムの限界』といふ本をお書きになつた、その問題意識もわかると思ふのです。(先生は、階級社会に育ち、サーバントを操縦する術に長けたイギリス人が植民地経営に手腕を示したといふ面に言及された。また、この本が一九六六年、石黒ヒデ氏とルイ・アレックス博士の二人により英訳され *Prisoner of the British* といふ題で出されたこと、二人の訳者の間でなぜこの本を英訳するのかをめぐり意見が分かれてしまったことに触れられた後、次のやうに述べられた。)

石黒さんは、二人の対立からかう結論してをります。

我々は日本人もイギリス人も、たとえいかなる善意の持ち主にせよ、囚われ人なので

ある。我々一人々々の過去に囚われているのみか、それぞれの国の過去の捕虜となつて
いるのである。

お若い方はまだしも、本席にお出でのご年配の方は、やはりそれぞれ個人的な体験と
ともに、私たちの国の過去に多かれ少なかれ囚われていると思います。我々は歴史の捕
虜なのであります。

『ビルマの豎琴』

今、ビルマ・タイ国境近くの捕虜収容所の生活について、『戦場にかける橋』と『アール
収容所』と、連合国と日本側のいかにも食ひ違ったイメージを見てまわりました。そして、
この辺りを舞台としてできたもう一つの作品が竹山道雄の『ビルマの豎琴』であります。こ
の昭和二十三年に出た作品は、皆様、お読みになった機会とか、あるいは映画をご覧になつ
た方が多いのではないかと思ひます。

どういふ話かといひますと、昭和二十二年にビルマから引き上げてきた部隊が横須賀に着
く、非常にやつれてゐる部隊もあれば、一隊、非常に元気さうな中隊があった、それは隊長
が音楽学校の卒業生で、いつも兵隊に合唱させてゐた、それがよかつた、といふので、ここ

までは実話なのです。(先生はこの本の中から、「歌ふ部隊」と言はれたある中隊が、昭和二十年夏、イギリス軍に追はれてタイを指して逃げて行く途中、ある村で不思議な程歓待を受けたが、気がつくといギリス軍に取り囲まれてしまった、隊長は皆に「埴生の宿」と「庭の千草」を歌ひ続けさせながら戦闘の準備をさせたとの場面を取り上げられ、そこから本文を引用された。紙面の都合上、先生の引用の一部のみ掲げさせていただきます。)

そのしばらくの静寂のあいまに、はるかかなたの谷底の水の音がにわかにか高まって、はつきりと聞こえました。(中略)ふと、隊長はのどまで出かけていた号令の声をとめて、立ちどまりました。ふしぎなことには、森の中から、一つの歌の聲があがったのです。あかるとい声で、熱烈な思いをこめた調子で「埴生の宿」を歌っているのです。(中略)森の端の方では、別の一団の聲が「庭の千草」の節をうたっています。しかし、それも「：ザ・ラスト・ローズ・オブ、サンマ：」と英語です。(中略)われわれもそれに合わせてうたいました。(後略)

かうなると、もう敵も味方もなくなって双方とも村の広場に出て、いつのまにか一緒になって合唱をした。それは昭和二十年八月十八日の夜のことで、この中隊は山中を逃げてゐた

ために本隊と連絡も取れず、日本が降伏したことも知らなかった。イギリス軍はそれを残敵掃討で取り囲んだ。しかしイギリス兵は「ホーム・スイート・ホーム」の歌を聞いて、そこに平和と家庭を感じ、もはや戦はうとせず、日本側もそれに応じて歌ひ、かつ和した。そして聞いてみるともう三日前に停戦になってゐた。それで「われわれは武器を捨てました」といふことになったわけでありませぬ。しかし、日本軍とイギリス軍との戦争で、実際かうした和解の場面はございませんでした。歌の話は、第一次世界大戦のクリスマススの時に、ドイツ軍とフランス軍が互いにクリスマスの歌を歌つてその日は戦ひをしなかつた。さういふことが一九一四年十二月二十四日にはございました。竹山氏はその話を思ひ出して、日本人は日本の歌を歌つたと思つてゐたけれども、「埴生の宿」が実はイギリスの歌である。それではかゝらずもイギリス兵の感動を呼んだ、さういふ場面をまづ考へて、そのためには日英が戦つた場所を考へて、それで作品の舞台としてビルマが選ばれたのでありまして、竹山氏がビルマを知つてゐたわけではございません。

『ビルマの豎琴』の主人公は豎琴を奏でる水島上等兵とその人の不思議な運命で、それがほとんどミステリーといひますか、探偵小説のやうにうまく構想されてきてをります。なぜ失踪してしまつたのか、その謎解きで第二部、第三部、話が進んでいきます。

主人公の水島はなぜ捕虜収容所から脱走してしまつて僧になつたか。そして日本へ歸つて

こない。それは、戦死した人の遺骨を拾ひ、その冥福を誰かが祈らなければならぬ、さう思った。イギリス人がきちんと遺骨を整理して、それから日本兵のためにまで墓を作つてゐる。それなのに日本人がさういふことをしなければ恥づかしいではないか。さう思つて自分に務めを課したからであります。義務を守つて命を落とした人たちのせめてもの鎮魂を願ふこと、それがこの作品の底に流れてゐる気持だと思ひます。

『ビルマの豎琴』の著者は、日本人で戦つた人は誰もかれも一律に悪人であるといふやうな考へ方は善しとはいいたしません。しかし、だからといって日本がしかした戦争を善しとしてゐる作品でもございません。鎮魂のために祈ることは戦争を善しとすることではございません。『ビルマの豎琴』は竹山氏が第一高等学校の教授として日本の英才中の英才が戦地に出征するのを見送つた。その何人かの人は遂に帰つてこなかった。その人たちを偲ぶの情が根底にあつてできた作品かと思ひます。

その人たちが出征したころの雰囲気、作中人物の口を通して次のやうに語られてゐます。降伏して捕虜收容所に入れられて、日本兵が最初に時間的ゆとりができて反省した時に何を考へたか。最後の引用を読みます。

おもえば、われわれは歓呼の声におくられ、激励されて国を出たのですが、それにもか

かわらず、あのころから、国中にはなんとなく不吉な気分がみちていました。いまそれがまざまざと思い出されます。誰もかれも、つよがつていばっていましたが、その言葉は浮わつて空疎でした。酔っぱらいがあばれだしたようなふうでもありました。それを思うと、胸も痛み、恥ずかしさに身内があつくなるような気がしました。

こんな雰囲気の昭和十年代の日本だったといふことを、私たちは忘れてはいけなと思ひます。『ビルマの豎琴』は英、伊、西、バスク語やタイ語などにも訳されてゐますが、台湾で『緬甸的豎琴』(劉華享訳、星光)という中国語訳が出てゐることが、なにか有難いことのやうに感ぜられます。

和解——自誇と自虐を越えて

イギリスはビルマの戦ひに勝利しましたが、ビルマは戦後独立し、しかもいちはやく英連邦を去りました。コヒマの激戦地には

When you go home
Tell them of us, and say :
For your tomorrow,
We gave our today

祖国ニ帰りシ時

我等ガ事ヲ人ニ告ゲヨ、

君等ノ明日ノ為ニ

我等ハ我等ノ今日ヲ捧ゲタリト。

といふ墓碑銘が刻まれてゐる由でございます。イギリスの将兵よ、イギリスに帰つたら自分たちのことを皆に語ってくれ、君たちが将来平和に暮らせるやうに自分たちは自分たちの今日の命を捧げたのだ、といふ意味であります。

日本兵の多くは、ビルマで伝染病と飢ゑで次々と死んでいきました。自分たちはなんでビルマくんたりまで武器らしい武器も持たずに送られて、ジャングルの中で飢ゑて死なねばならなかったのかといふのが、今から四十七年前、亡くなる前に多くの日本の将兵が思ったこ

とかと存じます。

しかし、半世紀を振り返りますと、イギリス人将兵もインド人将兵も、何のために死んだのか、といふ疑ひはやはり生ずるのではないでせうか。

チャーチル首相はイギリス帝国を維持しようとして戦ひましたが、アトリーが首相に選ばれると、労働党政権はビルマに独立を与へ、そのビルマは一時は反英国になってイギリス人はビルマに入れなくなつたことがあります。しかし、アウン・サンの独立運動を助けた南機関の藤原元少佐らは、祖国独立の恩人といふことで入国できました。それで、いま述べたコヒマの激戦地を藤原元少佐が訪ね日本将兵の遺骨を収拾するとともに、あはせて右に述べた英軍将兵の墓に詣でました。帰国後、藤原少佐はそのことをエリザベス女王に手紙で報じ、英軍将兵の墓もきちんと手入れされてゐる旨書き添へました。すると意外にも、エリザベス女王から御返事のお手紙をいただいたさうであります。

戦争については、勝つた側の勝ち誇つた自誇といふか、自ら誇つた歴史であつてもいけないし、負けた側の自虐の歴史、勝者に媚びるやうな自虐の歴史もいけないと思ひます。それと同時に負け惜しみの歴史であつてもいけないと思ひます。当事者双方に納得のいくやうな説明が行はれた時、戦後の時代は初めて終はるのかと思ひます。

藤原元少佐への一通のエリザベス女王からの返書に、イギリスと日本の和解を私は感じる

ものですが、日本側とイギリス側と複眼で見た第二次世界大戦についてのお話、皆様に多少ご参考になりましたでせうか。(了)

質疑応答

〈問〉戦後アメリカが日本に敷いた政策の功罪についての先生のお考へをお願いします。

〈答〉アメリカが日本人を洗脳した、占領政策の後遺症が残ってゐる。それは事実です。しかしアメリカが占領した期間といふのはごく短いもので、その先は日本側が引継いでゐるのです。どんなに占領軍がうまくメカニズムを日本に残したとしても、日本人はもともと改造が上手なので、日本人の手による改造もありえたわけで、最終的な責任は日本側に多いと思ひます。アメリカ占領軍が悪いと言つたら、責任転嫁でなんとなく滑稽だと思ひます。韓国や朝鮮の方が日本統治の三十六年の負の遺産を言ひたてますが、私はそれをあまり言ひたてるのも責任を他に転嫁する趣きがあると思ふ者です。日本人はアメリカ占領のことをあまり言はないから逆に氣立てがいいなと思ひます。日本側は米軍による占領を進んで「これは第二の開国である」としました。アメリカの占領といふのは私は非常にうまくいった占領だと思ひます。ソ連軍に占領されなくて良かった、という氣持がありましたから。

問題は、別に昭和二十年代からでなくて明治、いやその昔から、日本人のインテリが常に

外国に模範を見つけてはそれを日本に輸入してその代理人エイジェントになってゐることです。徳川時代はある人は朱子学者だったり、ある人は陽明学者だった。明治になると、インテリは西欧の背景があつて光り輝きました。西欧の一番新しいものとしてマルキシズムが光つて見えた時代だつてありました。今の時代には、アメリカ・モデルを善しとして大新聞の婦人部などで「アメリカはこうですから……」、お医者さんなども「アメリカの育児法はこうですから」などと言ふし、さう言ふことで飯の種としてきた人が多い。フランスのヌーベル・クイジーヌがいろいろいふが、あれは日本料理をフランス料理に取り入れたものですから、あれを真似たらいいといふとかしなことになるわけで、やはり自分で何がいかといふ主体的判断をくだすより仕様がなないので、なぜ日本でダブル・スタンダードが可能になるか



といふと、ある時は「これは先進国ではかうだから」と言ひ、ある時は自分の都合で「これがいいから」と言ふ。二つの選択肢をうまく操作すると、植民地帝国を作つた時は、イギリスの真似をしたと言ひ、解放戦争の時はこれは正義の戦ひだと言ふ。さういふ自己正当化が割方やりやすい精神状況にあつたわけで、その辺の整理が皆さんの頭の中でよくついでるなわけではないでせうか。ずるい人はその場その場で御都合の良い解釈をする。その辺のバランスの問題を森鷗外はよく考へてゐたと思ひますが、近ごろは世の中の大勢に皆が何となく流されるやうになつてきた。

女の方で今、アメリカでフェミニズムがはやり出すとすぐ「フェミニズム」と言ふ人もゐる。「昔のままの良妻賢母で」と言ふと何かいかにも古臭い感じがする。昔のやうに家事に時間を取られなくて済む時代ですから、さうすると女の人が自分も仕事をしたと思ふのは当然です。しかしフェミニズムのアメリカで家庭崩壊が進んでゐるのも事実です。太平洋戦争に勝つたはずのアメリカが日本と並ぶ国になつたのは家庭崩壊で子供の教育がきちんとは行なはれず、労働者の質が低下したのが原因です。しかし女性を解放しないわけにはいけません。その辺のところは皆さまもどのやうな生き方を選べば良いか非常に難しいですね。「解放」といふのはたいていインチキだと先ほども申しました。まあ、しかし人生とはさういふ先のわからないものだから、未知の世界に自分自身の手で海図を引いて進むより仕様がな

ないでせうか。敗戦後半世紀で日米が経済大国として肩を並べるなどと一九四五年八月に思った人はこの地球上に一人もいなかった、と思ひます。

「深い泉の国」の私ども

神奈川県立湘南高校教諭

亜細亜大学非常勤講師

山内健生



米塚を眺望する

歴史や宗教に彩られた日

なぜ日本人は「墓石を跨ぐのか」？

ひげ目と「国際化」論

滞日四十年、ある西洋人の日本観

戦前戦後を貫ぬく「国民の祝日」

「こどもの日」「成人の日」「敬老の日」などの文化史的背景

「神武創業」と聖徳太子の時代——建国記念の日——

篝火のなかの新嘗祭——勤労感謝の日——

古代から続く折々の祈り

歴史や宗教に彩られた日

「二月十四日は何の日ですか」と聞かれた際に、若い人なら立どころに「バレンタイン・デー」と答へるでせう。幼稚園や小学校に通ふ子供から、「義理チョコ」などといふ妙な言葉があるやうに、大の大人達の職場の中にまで浸透してゐることは周知のこととせう。近頃では「ハロウィーン」といって、仮面をつけたり仮装をしたりして踊るパーティー（十月下旬）が流行し始めてゐます。デパートにはハロウィーン・コーナーが設けられ、かぼちゃ型の蠟燭や室内装飾の小物などが陳列されるほどです。バレンタイン・デーもハロウィーンも、本来的にキリスト教の信仰に裏づけられたもので、われわれ日本人が軽く考へてゐるやうないい加減なものではありません。バレンタイン・デーの由来は何か、なぜ、^{セント}聖バレンタインと呼ばれるのか、ハロウマス（十一月一日）の宵祭りをハロウィーンといふのですが、それがどのやうな日なのか等々、一度、きちんと調べてみて欲しいと思ひます。

クリスマス・イブは日本人の年中行事の中にすっかり溶け込んだかの感があります。洋菓子屋さんの店頭に積み重ねられた箱入りケーキの山にも驚かなくなりました。十二月二十四日といへば年の瀬も押し迫った頃で、気忙しい中にも過ぎ去らうとする一年を回顧しつつ、

新しい年を迎へる心の準備をする日といった趣があります。メリー・クリスマスのネオンに飾りつけられた商店街で「ジングル・ベル」の音色を耳にすると、楽しくなければ人生ではないノと思ひながらも「日本人は本当に人がいいなあ」とついつい思ってしまうのは私だけでせうか。もつとも海の彼方に理想郷を想定して、そこからこの世に幸福がもたらされるといふ観念は記紀神話にも見られますから、対外的な無警戒どころか憧憬の念を抱きながら外来文化に対応するといふのは日本人のある本質を示すものでもあります。

なぜ十二月二十五日が「イエス誕生の日」とされてゐるのかといひますと、ヨーロッパ（北半球）の太陽信仰と習合したからだとされます（宗派によっては一月六日や一月十九日に聖誕を祝ふ）。太陽の最も衰へる冬至は、同時に太陽が甦へる始点です。イエスの生誕が「太陽の再生・復活」とイメージ的に重なったわけで、「イエス・キリスト」を指して the Sun of Righteousness（義の太陽）といふやうに、根強い土着信仰の中にキリスト教が入っていったのです。その後、若干の暦の誤差を生じて冬至とずれたといはれます。

かうした「〇〇の日」は当然のことながら平日と違ふ意味づけがなされてゐます。まさにホリデーholiday（休日）は「聖なる日」 holy dayですから、仕事を休んで祈りを捧げる日となるわけです。そこには各々の個別的な歴史や宗教などの文化が色濃く反映してゐます。



なぜ日本人は「墓石を跨ぐのか」？

現在、地球的な規模でさまざまの情報が行き交っています。今後とも国際間の交流は盛んになってさらに多様な展開を見せるでせう。かうした時代になればなるほど、一層、深く自国の伝統的文化を理解しなければならぬと考へます。

バレンタイン・デーを知つてゐても（わが国のそれは似て非なるものですが）、一月十一日の「建国記念の日」に全く興味を示さないとしたら、やはり異常なことだと思ひます。ハロウィーンやサンクスギビング・デー（十一月の最終木曜日、いと高き全能のゴッドに収穫を感謝する日―アメリカ合衆国―）に倣つて踊つたり小宴を持つたりするのはいいとしても、十一月二十三日の「勤労感謝の日」の意味に何らの関心を

も抱かないとしたら、やはりをかしくはないでせうか。大学の入学案内などを見るまでもなく「国際人の養成」といった文字が氾濫してゐます。「心の国際化が必要」との声も聞きます。

しかし、それは自国の伝統をおろそかにして他国の風習に靡くことをいふのでせうか。国際交流とは、主体と主体、個性と個性が正面から向き合つて、互ひに相手の中に自国とは異なる文化的特質を見出し、同時に自他の間に相通ふ面を認識し合ふことだと思ひます。主体性をもつて交流することが相互の理解と協力の前提です。自国の文化について語らない者（語れない者）は相手にされないでせう。十分に合意に達し得ない場合でも「敵ながら天晴れだ」と互ひに尊敬の念を抱き合ふやうなつきあひをしたいものです。

外国語の会話力はいよいよ大切になります。それとともに大事なことは何を語るか、語る内容を持つてゐるかどうかといふことでせう。どんなに流暢に英語が話せたにしても国語で語る内容以上のことは話せません。

これから「国民の祝日」についてお話をします。既に幼稚園時代から「休日」として身近に接してきたはずですから、今さら何をと思はれる人もゐるでせう。学校や官庁・会社が一斉に休業になるほどに根柢がある日ですが、ただ単に「休日」「行楽の日」として扱はれて来たといつていいでせう。バレンタイン・デーやハロウィーンの例を見るまでもなく、わが国では外への関心が旺盛なわりには自らの拠つて立つ足元をあまり顧りみようとしません。ど

この国でも自国の伝統的文化を次の世代に伝えること、即ち「ナショナル・アイデンティティの醸成＝国民の育成」に力を入れてありますが、皆さんのこれまで受けてきた学校教育を振り返ってどうだったでせうか。

自らの内にナショナル・アイデンティティを覚える者にして、初めて他者のナショナル・アイデンティティの在りかに共感できるのです。「敵ながら天晴れ」といひ得るのです。例へば次のやうなことです。

日本人旅行者にとつて、パリのドゴール広場に立つ「凱旋門」は好奇心を満たす観光名所のひとつでせう。しかし、フランス国民にとつては戦歿同胞を追悼する記念碑的な霊的施設なのです。無名戦士の遺骨が埋葬されてゐる聖なる場所なのです。それなりの態度で拝観すべき所です。しかし、自国の戦歿者の慰霊を等閑にしてゐる者には、そこまで思ひが及びません。声高に冗談を言ひながら、レリーフに向つて会釈ひとつしようとしなくて通り過ぎる日本人の集団は、フランス人の目にどのやうに写つてゐることでせうか。日本人観光客は戦歿者の墓石を跨いだり紙屑を散らかすから、バスの中から見学してもらふことにしたといふ所もあります（米国ハワイ州の太平洋国立記念墓地）。全くの偶然からですが、訪問国の国旗を踏みつけて拘留された日本人旅行者がなぜさうされたのかの理由がなかなか呑み込めなかつた（タイ）といふ話も聞きました。

自国政府発行のパスポートを所持してゐても、精神的にデラシネ（祖国喪失者・根無し草）になつてしまつては、自らの人生の意義を把めないだけでなく、他国の精神文化の価値を理解することもできなくなるのです。和装ハロウィーンに打ち興じたからといって「アメリカ合衆国」を理解したことはありません。

ひけ目と「国際化」論

バレンタイン・デーやハロウィーンが流行つてゐるからといつても心配することはない、どうせ「和風クリスマス」の運命を辿るのだからといふ見方もあります。これまでわが国は太古以来さまざまの外来文化を受容してきました。そしてそれらを巧みに「和風化」してきたことと考へ合はせるならば、確かにわが日本人の旺盛果敢な文化摂取能力を信ずべきでせう。私もそれを確信します。とはいひながらも以前とは少し事情が異つてゐるのではないかと少し気になります。

それはかつての数百千倍規模の情報湯水の如く二十四時間やすみなく押し寄せてゐるといふことと、それ以上に気がかりなことはそれに対処するこちらの姿勢がぐらつてゐるやうに思はれることです。明治以前においても、外来の新情報にかぶれた少数知識人がゐなく

もありませんでしたが、それは全くの例外で確固とした「祖業の継承と実践」といふ揺ぎない地盤がありました。日常の挙措動作から折々の冠婚葬祭に至るまで無意識ながら「確固不拔の生き方」が国中に充満してゐました。これが例へば「日本仏教」(Buddhism in JAPAN)ではなくJAPANESE Buddhism)誕生の前提だったはずです。ただ単に大陸と海峡で隔てられてゐたからではないと思ひます。

しかし、明治の文明開化とともにこの国に根を降した「過去との断絶を善し」とする一部の思ひ込みは、国民皆学を旨とする学校制度の整備によって、そのうへ敗戦後は「平和と民主主義」といふ外国製の思想的枠組が「強制された」——言論報道出版は占領軍の検閲下にあった——ことによつて、さらにそれを正義であるとして拡声器のごとく今もなほ報道し続けるマスコミの大宣伝によつて、一層深まり拡大してゐるのではないでせうか。皆さんはこの渦中に生れ育つてゐますから（私も同様ですが）、ピンと来ないことかも知れません。

「今日の日本人は、自分の過去に就いて何も知る事を欲してゐない。教養ある人士も過去に引け目を感じてゐる」と在日ドイツ人ベルツが不思議千万のことだと記したのは明治九年のことでした（『ベルツの日記』）。それから百十余年、ついには「建国記念の日」についても「勤労感謝の日」についても、何も知らない（教はらない）が、「ハロウィン・パーティーなら行ったことがあるよ」と軽快に語る若者を生み出したといへるでせう。

「心の国際化を」といふ掛声も同一線上のものでせうし、国際化を名目として朝日新聞や毎日新聞が日々、報道面から明治大正昭和や平成の元号を意図的に抹消してゐるのも「引け目」の延長上のことだと思ひます。また左翼に靡くことを以つて良心的であるかに感じてきた者も、逆に誇らしげにリベラルを自称してゐる者も、つまるところはこの「引け目」なのです。彼らは「何も彼も野蛮であつた」「我等の歴史は今から始まるのだ」とベルツに語つた明治初年の教養ある人士の「申し子」といつていいでせう。左翼も自称リベラルも「国際人」たらんとして元号を無視する点で軌を一にしてゐます。そもそも、西暦（実はキリスト暦）が世界で普遍的な暦であるかの如くに考へてゐるのは、それこそ勝手な思ひ込みに過ぎません。例へば一年が三六五日でないところが地球上、あちこちにあるのですから。

在日四十年、ある西洋人の日本観

もし海外に赴いた人が国民の祝日のいくつかを例示しながら、自国の伝統を語り得たならば、どんなにか素晴らしいことだらうと平素から考へてゐます。そこには自らの歴史と文化が反映してゐますから、互ひに祝日を紹介し合ふことは相互理解の具体的な糸口となるはずです。

「国民の祝日に関する法律」は昭和二十三年七月の公布ですが、祝日の全てがそれ以前に根拠を置いてゐます。中には文献的に八世紀冒頭まで遡るものもあります。二十世紀の今日、最先端の技術力を世界に誇るわが国の公的祝日が奈良時代以前から続くものと同じなのです。わが国に四十年近くも住んでゐるスイス生れの学者が、この国はまだ神話的雰囲気漂ふ「深い泉の国」だと申しました。日本人は漠然と外にばかり関心を向けて足元を大切にしているのではないかと私の目には写るのですが、余所から来た人には太古がいまも生き続けているやうに感じられるのです。確かに静寂森嚴たる神社の佇や御神樂、家を建てる前の地鎮祭等々、近代生活を一皮剥げば古代につながるものが顔をのぞかせてゐるのですが、かうしたことは公的な学校教育では軽視され続けてゐます。

「深い泉の国」とは素晴らしく、まことに有難い呼称です。泉は地下のどこから湧き出してくるのか視覚的には全く見当つきません。そのどこからともなく湧き出す泉によつて、現実の我々は渴きを癒されるのです。それと同様に、「深い泉の国」とは遙か太古から続く伝統的文化に支へられて現在の日本があるといふ意味だと思ひます。或は日本は太古からのものが現在も生き続けてゐる国だといふことでせう。

一三五頁に掲げた「国民の祝日」一覽を見て気づかれた人もゐたでせうが、この中に「五月四日」が入つてをりません。五月四日は祝日ではなく休日なのです。十余年前、超党派の

国会議員の間で五月四日を「国民の祝日」として、三連休にしようといふ動きがありました。「太陽の日」とか「花と緑の日」とかといふ名称まで考へられたのですが、結局は陽の目を見ませんでした。

右の経緯から前後矛盾する二点を指摘できます。ひとつは平日とは異なる特別の意義をもつのが祝日ですが、残念ながら「休日」としてしか捉へられてゐないといふことです。もうひとつは、とくに強い反対があつたわけでもないのに、五月四日に適当な名称を付して祝日に加へることができなかつたといふことです。祝日が実態として休日に等しいとしても、ただ休日にならうとして名称を後から考へても納まりが悪く駄目だつたといふことです。何度もいひますが、平日とは違ふ「国民の祝日」は過去の事実^{じじつ}に根拠を置いてゐるのですから、当然の結果でした。ここに僅かに良識の存在を感じました。しかし、敵は然る者^{さるもの}で

第三条③その前日及び翌日が「国民の祝日」である日は、休日とする。

との一項を加へたのです(昭和六十年改正)。右に該当する日は五月四日しかありません。文字通り「名を捨てて実をとつた」のでした。それでも体裁のいい名前がつけられて、五月四日が「国民の祝日」にならなくて本当によかつたと思ひます。

《国民の祝日》に関する法律 昭和二十三年公布 昭和四十一年・平成元年改正

元日 (二月一日) —— 年のはじめを祝う。成人の日 (二月十五日) —— おとなになったことを自覚し、みずから生き抜こうとする青年を祝いはげます。建国記念の日 (二月十一日) —— 建国をしのび、国を愛する心を養う。春分の日 (春分日) —— 自然をたたえ、生物をいつくしむ。みどりの日 (四月二十九日) —— 自然に親しむとともに、その恩恵に感謝し、豊かな心をはぐくむ。憲法記念日 (五月三日) —— 日本国憲法の施行を記念し、国の成長を期する。こどもの日 (五月五日) —— こどもの人格を重んじ、こどもの幸福をはかるとともに、母に感謝する。敬老の日 (九月十五日) —— 多年にわたり社会につくしてきた老人を敬愛し、長寿を祝う。秋分の日 (秋分日) —— 祖先をうやまい、なくなった人々をしのぶ。体育の日 (十月十日) —— スポーツにたししみ、健康な心身をつちかう。文化の日 (十一月三日) —— 自由と平和を愛し、文化をすすめる。勤労感謝の日 (十一月二十三日) —— 勤労をたつとび、生産を祝い、国民たがいに感謝しあう。天皇誕生日 (十二月二十三日) —— 天皇の誕生を祝う。

戦前戦後を貫く「国民の祝日」

さきに「国民の祝日」は全て法律制定の昭和二十三年以前に根拠があると申しました。それでは昭和天皇の崩御によって新たに「天皇誕生日」となった十二月二十三日はどうでせう(平成元年二月改正)。まだ数回しかお祝ひしてゐないではないかとのご批判をうけさうです。天皇誕生日は以前は「天長節」(明治三年制定)といひましたが、その時代の陛下(今上天皇)

の御長寿（聖寿無窮）を言寿ぐ天長節の初出は光仁天皇の宝亀六年（七七五）九月十一日の記事（『続日本紀』）です。「勅すらく、十月十三日は是れ朕が生日なり」「内外百官、酺宴を賜ふ」云々とあります。平安時代以降、この種の行事が行はれて来ました（国史大辞典）から当代の陛下の御生誕に因む節会せちあひの行事は、文献的には一二〇〇年以上も遡るといふことです。

「みどりの日」も形の上では平成元年の法律改正で新たに設けられました。昭和時代の天皇誕生日（昭和二年、昭和「天長節」制定）でした。すると昭和天皇と「みどりの日」を結びつける何かがあるはずで、それは昭和二十五年から始った全国植樹祭です（第一回は山梨県）。全国を持ち廻りで行はれる行事で、毎年、御出席になられた陛下は次の様な御歌を詠まれました。

人々とあかえぞ松の苗うゑて緑の森になれといのりつ

（昭和三十六年、北海道）

黒川の胎内平にうゑし杉やがては山をみどりにそめむ

（昭和四十七年、新潟県）

人びととうゑたる苗のそだつとき菰野のさとに緑満つらむ

（昭和五十五年、三重県）

植林は五十年後、百年後の孫や曾孫のためのものです。治山治水につながる緑濃き山々は国の底力を示すものです。この日は端的にいつて「国土緑化に寄せられた昭和天皇のお気持ちを偲ぶ日」に他なりません。それでなくては昭和天皇のお誕生日が「みどりの日」となった意味はわからないでせう。

「体育の日」はどうでせうか。東京オリンピック（第十八回大会）の開会式（昭和三十九年十月十日）に因んだ祝日です（昭和四十一年改正）。実は東京でのオリンピックは昭和十五年に開催されることになってゐたのでした。が、残念ながら戦火のため中止になりました（昭和十三年七月、開催延期△中止▽を決定）。それから四半世紀、この間に戦争があり敗戦と占領があり講和条約の調印があり国連加盟（国際社会への全面的復帰）があつて、やうやく実現した東京オリンピックでした。

「憲法記念日」は昭和二十二年五月三日の施行日を記念したものです。その六ヶ月前の十一月三日に公布されてゐました。憲法一〇〇条に「公布の日から起算して六箇月」後に施行するとありますが、国民に公表された十一月二日とはどういふ日だったのでせうか。きりのいい十一月一日でも良かったはず。十一月三日は「明治節」（明治時代の天皇誕生日。昭和二年制定）といつて、当時の国民にとっては四大節（四方^{しだい}拜△元日▽・紀元節△二月十一日▽・天長節△四月二十九日▽）のひとつの佳節で「いい日」だったので。

帝国憲法が明治二十二年二月十一日の紀元節の佳日に公布されたのに做つたのでせうが、国民一般が好ましい日として感じてゐる日を期して公布するとは、なかなかの知恵者がゐたものです。占領下の独立喪失時に公布された憲法ですから手続的にも内容的にも多くの問題を点を内包してゐます。それを少しでも反発なく受け容れさせたいといふ占領軍当局者のわが

国民感情への配慮を読みとるべきでせう。従って「十一月三日」を無視して「五月三日」だけで憲法を論議することは全くの片手落ちなのです。

十一月三日の「文化の日」は既に説明したやうに明治時代の天長節（明治三年制定）です。昭和二年以来、明治節と呼称されてきた日です。

これらの「新しさうな祝日」も、その根本を尋ねると、戦前戦後を貫いてゐることがわかりただけなことと思ひます。

「こどもの日」「成人の日」「敬老の日」などの文化史的背景

「こどもの日」には、なぜ鯉のぼりを立てて菖蒲湯に入るのでせう。菖蒲湯の由来を辿って行くと、聖徳太子時代の七世紀初めの「薬獵」（野山で薬草を摘むこと）に至ります（推古天皇十九年 \wedge 六一 \vee 五月五日）。香りの強い植物は邪気を攘ふ力をもつと信じられ、老若男女を問はず、春から夏への季節の変わり目に身心の邪気を追ひ祓つたのでした。いまも広く行はれてゐる五月五日の菖蒲湯の伝統は一二〇〇年は遡るでせう。菖蒲から「尚武」となり、武家の「男児」の無事なる成長を祈ることとなつたのです。そして、さらに町人社会にまで広がって武家の幟のぼりに代つて出世魚の鯉で幟をつくるやうになりました。

「元日」は年の始めを祝ふ日ですが、「トシ」とは稲の成育する期間（稲の稔り）をいひます。今日、祖霊を迎へるといへば七月（八月）のお盆ですが、古くは（中世初めまでは）大晦日は祖霊が戻つて来る日とされてゐました。歳神としがみとか正月様と呼ばれる祖霊は家の守護神であり豊作をもたらす穀霊であります。子孫の繁栄を見守る祖霊とともに新年を迎へてきたわけです。祖霊が戻つて来られるやうに建てる目印が門松です。特別の料理をこしらへるのは祖霊（穀霊・歳神・正月様）にお供へするためなのです。そのお下がり人間どもがいただくのです。

なぜ一月十五日が「成人の日」となったのかといひますと、元服（男性十五歳頃、女性十三歳頃）はかつて新年の初めに行ひました。「数へ年」では生れた時を一歳とし以後、正月を迎へる毎に家中で（村中で）一緒に齢を数へていくのですが、新年の初めに元服を祝ふといふことは親族だけでなく祖霊とともに「成人」を祝ふことを意味します。ただし、旧暦の元日は新月で闇ですので望月の十五日に元服式を行ったところから、「一月十五日」の「成人の日」が生まれたといはれます。

「春分の日」「秋分の日」も面白いですね。年によっては日付がわづかに動きますので「春分日」「秋分日」となつてゐます。専らお彼岸の中日として親しまれてゐますが、彼岸の法要はわが国だけの「仏教行事」です。この日は真東から太陽が昇り真西に沈みます。これと西

方十萬億土の淨土といふ仏教思想とが習合して彼岸會になつたとされます。真西に沈む太陽を拜んで念仏を唱へると極樂淨土に往生すると信じられたのです。「日本後紀」大同三年（八〇八）三月十七日の記事によると、自害された崇道天皇（早良親王の追号）の奉爲おんために、諸國國分寺の僧に令して春秋二仲月（旧曆二月と八月）に「別して七日、金剛般若經を讀ましむ」とあります。旧曆二月と八月はいまの三月と九月ですから、彼岸會は文献上の起源としては二〇〇年近く遡ることになります。

「敬老の日」に關しても興味深い話が伝へられてゐます。養老の瀧伝説です。奈良時代の初め、美濃國に薪を伐りそれを売つては老父の好物の酒を求めてゐた親孝行の樵夫きこりがゐました。ある時、石の苔に足を滑らせて転倒したのですが何んとそこに酒の泉があつたのです。「その後日々これを汲みて」存分に老父に仕へたといふのですが、このことをお聞きになつた元正天皇は靈龜三年（七一七）九月に、その地に行幸し、その樵夫を國守にとりたてて、同年十一月に「養老」と改元されたといふ話です（『古今著聞集』十三世紀初頭成立）。

この物語の発端は『続日本紀』養老元年（七一七）十一月十七日条に記されてゐます。そこには元正天皇が靈龜三年九月、美濃國の多度山の「美泉」に行幸。「白髮反黒」「額髮厚生」「闇目如明」などの病疾平愈の奇瑞を愛でられ、この美泉を以つて「老を養ふ可し」「靈龜三年を改めて養老元年と爲す可し」云々とあります。

「敬老の日」の制定は昭和四十一年の法律改正ですが、九月中旬に地域のお年寄りを招待して「敬老会」を開くといふ習慣はかなり前から行はれておりました。これまた文献上の起源は一三〇〇年も遡ることになります。また、敬老思想に関連して注目すべき事実があります。奈良時代の学校といへば官吏の養成所（大学・国学）ですが、都の大学と各国ごとの国学で教授された学科目の中で「論語」と「孝経」の二つが必修科目とされておりました。孔子が門弟に孝道を説いたものが「孝経」ですが、日本人がそれによって初めて孝行を学んだわけではなく、養老・敬老を大切に考へてきた事実から、たくまずして「孝経」に一目を置くことになったと見るべきでせう。

「神武創業」と聖徳太子の時代——建国記念の日——

二月十一日の「建国記念の日」は昭和四十一年の法律改正で祝日の仲間入りをしたのですが、以前は「紀元節」と呼ばれておりました（明治六年制定）。紀元節とは初代の神武天皇の御即位に因む日です。昭和二十三年の「国民の祝日に関する法律案」の国会審議の過程で、世論の根深い共感的支持があったにもかかわらず、占領軍側からの要求で削除されたのでした（この法案自体が従来の国の祝祭日を再検討せよ！との占領軍からの指示によるものでした）。国家が独

立を喪失するとどうなるかを端的に示してゐますね。国旗の掲揚も許可を得た上で行はれた時代です。

神武天皇は高天原から日向の高千穂峯に天降った天照大御神の御孫ニギノミコトから三代あとの英雄で（神代の物語）、九州から東へ進み大和を平定して「辛酉かのとりの年の春正月かのえたるの庚辰ついでちのひ」に橿原の宮で即位されたと伝えられます。神武天皇の物語から「人の時代」となるのですが、これを伝える『日本書紀』（養老四年〇七二〇〇成立）は神武天皇御東征の記事から編年体で記録するやうになります。

何に基づいて初代天皇の即位年を「辛酉の年の正月朔日」と記したかといひますと、当時伝来してゐた讖緯しんみの説といふ吉凶を予測する説に拠つたのでした。この予言説によりますと、十于十二支のうち「辛酉」の年（六十年で一巡する）には大事件が発生する。とくに一二六〇年（二十一元、一節）ごとの辛酉の年には天命が革まるほどの大事件が生起するといふもので、神武天皇の御即位は大々事件であるから一二六〇年ごとの辛酉の年であつたであらうとしたのです。それではどこの辛酉の年を起点にして神武天皇の御即位年を算定したのでせう。なんと聖徳太子が摂政として諸改革に邁進されてゐた推古天皇九年（六〇一）の辛酉を基準にして、初代天皇の御即位年を算出したのです。

『日本書紀』編纂時の考へでは、推古天皇の時代を初代の神武天皇御即位と並ぶ重大な節

目として捉へてゐたことになります。推古天皇の御代は摂政聖徳太子の下で、さまざまの内外政策が練られ実行に遷されて行つた時代です。「冠位十二階・十七条憲法の制定」「遣隋使の派遣」「三経義疏の著述」「国史の編纂」「迦藍の建立」「神祇祭拜の詔・三宝興隆の詔の発布」等々、政治と思想と文化の各方面で今日のわが国まで貫ぬく骨格・礎をつくつたといつてもいい時代でした。

「神武天皇の御即位」と「聖徳太子の治世」とを同格とみた『日本書紀』編纂者の思想を見落すことはできません。その結果、西暦六〇一年から一二六〇年遡及して紀元前の六六〇年に神武天皇が即位されたといふことになりました。そのために、「建国記念の日」には歴史的な根拠がないなどといふ意見が一部にありましたが、神武天皇の御即位を聖徳太子時代から、一二六〇年遡つた元日と考へたといふ事實は消せませんから、それはどうしてだらうかと考へるのが後世の者の立場だと思ひます。神武天皇御即位に因む日が駄目だといふなら他にいかなる日があるといふのでせうか。もしわが国が他のアジア・アフリカや南北アメリカの国々のやうに他国の植民地になつてゐたとしたら、それこそ立派な「独立記念日」を持つことになつたでせう。

明治の開国期に、国旗と国歌が求められたやうに、自国意識の高まりの中で「神武創業」が回想されたといふことは自然のことだと思ひます。「辛酉の年の春正月の庚辰の朔」は、明

治六年に太陽曆に換算されて「二月十一日」となったのです。

篝火の中の新嘗祭―勤労感謝の日―

「勤労感謝の日」については「国民たがいに感謝しあう」とありますが、それなら大晦日に家族同士で「一年間、ご苦労さまでした」でいいわけです。なぜ「十一月二十三日」なのか。これは奈良時代以前に遡る「新嘗祭」(にひなめのまつり・しんじょうさい)に因んだ日なのです。

その年に収穫した新穀を天照大御神を初め天神地祇にお供へし神恩に感謝申し上げて、天皇陛下が初めて新穀を口にされる祭儀です。現在も皇居内の神嘉殿において、天皇陛下御親祭のもと毎年、篝火の中で厳修されてゐますが、その成文法的起源を辿ると養老二年(七八)の神祇令(大宝元年 \wedge 七〇一 \vee の神祇令とほぼ同文とされる)に至りますが、始行はもっと古く五世紀末の第二十二代清寧天皇の時代といはれます。

令の規定では「仲冬下卯」(十一月の下の卯の日)の祭となつてゐて、十一月二十日前後に行はれてゐました。明治六年からの太陽曆採用によって、その年(新曆)の十一月の下の卯の日が「二十三日」であつたことから、以後この日に固定したのです。

本来は旧暦の十一月の祭儀でしたから、もともと新嘗祭は冬至の頃に行はれるものでした。北半球で太陽が最も遠ざかって衰へる冬至は、また太陽が復活する始まりでもあります。そこで次のやうに説かれてゐます。

新嘗祭は（略）太古においてはおそらく冬至の日であつたらう。その日の亥刻（午後十時）といへば、もつとも太陽の衰えた時刻である。その陽の極まつた果てに、忌み籠つて夕御饌ゆのみけをきこしめして日神の靈威を身に体し、子刻（十二時）には一たん退出されるが、暁の寅刻（午前四時）再び神嘉殿に御されて、朝御饌あさのみけをきこしめされて、一陽來復、復活した太陽日神ととも、天皇としての靈性を更新されて、若々しい「日の御子」「日継の御子」として、この現世に顕現されるものと解されるのである。（真弓常忠著『大嘗祭』）

日神とは皇祖の天照大御神のことです。陛下の神々に祈られる靈的御力は、年ごとにお歳を召されるにもかかはらず、生命力に溢ふれた新穀をきこしめす（お食べになる）ことによつて、旧に復してゐるわけです。新嘗祭の本質は、単なる収穫感謝祭にとどまらず、非常に土俗的で古代を彷彿とさせるところにあります。

世界的な大都市東京、高層ビルと高速道路が交錯する近代都市東京の、その真ん中の闇の中で、篝火をたよりに五穀豊穰を神々に感謝しつつ国家国民の安寧を祈願なさる祭儀が行はれてゐるのです。現在では、夕ゆふの儀が午後六時から八時までで、暁あかつきの儀が午後十一時から

午前一時までといふことです。晩秋の冷気が迫り来る深夜、庭燎のもとで御奉仕あそばされる祭儀を遙かに拝察申し上げるだに畏きことと慄然とさせられます。

古代から続く折々の祈り

明治十二年七月に来日した合衆国の前大統領U・S・グラントは、明治天皇に次のやうに申し上げました。

それ、新嘗祭の如き宇内絶美の祭典、陛下自ら耕して新穀を取り、皇后宮親ら蚕みづかして神衣を製し、以て祖宗に奉し給う。(略)グラント宇内を周遊するも、かかる絶美の典式を見聞せず、陛下厚く聖意を此にとどめ、みだりに旧典古式を改め給うことなかれ。

(入江相政編『宮中歳時記』)

天皇陛下が自ら田植と稲刈りをなさり、皇后さまが養蚕をなされることは今日も同様ですが、その精神的起源を辿ると神話の高天原まで遡るのです。稲穂はニギノミコトが天から降る際に天照大御神から託たくかったものですから、今日、陛下が田作りなさり、その収穫物を毎年の新嘗祭に供へられることは、今年もこのやうに稔りましたと御祖先に告げ奉られることに他なりません。グラントはこのことを「宇内を周遊するも」絶えて見られない尊きこと

だといつてゐるわけです。

新嘗祭が収穫に関する祭だとすると、「祈年祭」（としごひのまつり、成文法的には大宝元年八七〇一〇の神祇令まで遡及。現在は二月十七日）は、国民の祝日にはなつてゐませんが、春に五穀豊穰を前もつてお祈りする祭儀です。この他、元日の「四方拜」「歳旦祭」から大晦日の「大祓」に至るまで、折々の祈りが皇居内の御神前で捧げられてゐます。わが国の歴史は太古から続くかうした「祈り」とともにあつたともいひ得るのです。

新嘗祭に関連して、もう一言。御位を踐まれた陛下が諒闇の明けた最初になさる新嘗祭を「大嘗祭」（おほにへのまつり）といひます。

年毎の新嘗祭では陛下のお膝下からの収穫が供へられるのですが、一世一度の大嘗祭では掘立・草葺きの大嘗宮（悠起殿と主基殿）が特に設けられ、さらに地方の民からの生産物が加はるといふ特色があります（高森明勅著『天皇と民の大嘗祭』）。平成の大嘗祭では秋田県（悠紀国）と大分県（主基国）が卜定され恙なく供進されました。そして、地方民が奉賛申し上げるといふ大嘗祭の古儀を踏まへながら、特定地域以外からの産物が献進されるといふ「庭積」にはづみのつくえ「代物」しろものの新例が明治以降、開かれたのですが、北海道の「昆布・干し塩鮭」から沖縄県の「パインアップル・乾燥ひじき」に至るまで全都道府県からの様々の品々が平成二年十一月には供へられました。（二四九頁の一覧表参照。）

非常に雑駁な内容で舌足らずの点が多々あります。今日の私どもの生活が古くからのもの
の延長上にあるのだ、そのことにもっと日頃から関心を持って思ひを至すべきではなからう
かといふことで「国民の祝日」を採り上げてみたのです。

わが国を指して「深い泉の国」と評したのは上智大学のトーマス・インモース先生（現、名
誉教授）です（『深い泉の国「日本」——異文化との出会い——』が、次の詩を作つてゐます。

深い泉の国

この国の過去の泉は深い。

太鼓と笛の音に酔いしれて

太古の神秘のうちに沈み込む。

測鉛を下ろし、時の深さを、わたし自身の深さを測る。

インモース先生は「太古が生き続ける日本」の神秘に魅かれながら、それは同時に「わたし自身の深さを測る」ことだと詠んでゐます。よくよく味はふべき一節だと思ひます。

「深い泉の国」の私ども（山内）

庭積机代物（平成二年の大嘗祭）

北海道	コンブ 干塩ザケ 菜豆(大正金時) ジャガイモ(男爵) 百合根
青森	ナガイモ ゴボウ リンゴ サケ薫製 ホタテ干貝柱
岩手	リンゴ ナガイモ 乾シイタケ 干ワカメ 新巻サケ
宮城	大豆 ハクサイ キュウリ リンゴ 干アワビ
秋田	アズキ キャベツ 大豆 スキヒラタケ 塩サケ
山形	大豆 リンゴ ゼンマイ クリ スルメ
福島	リンゴ ナシ 青ノリ 干マガレイ 干ゼンマイ
茨城	ハクサイ レンコン 乾シイタケ シラスタミ干 ワカサギ煮干
栃木	カンピョウ イチゴ シイタケ ナシ 大豆
群馬	コンニャクイモ リンゴ 干シイタケ
埼玉	小麦 ヤマトイモ サトイモ 茶
千葉	ビーナツ サツマイモ シイタケ ノリ カツオ節
東京	キャベツ ダイコン ウド シイタケ テンザク
神奈川	茶 ビーナツ ダイコン キウイ ノリ
新潟	サトイモ ナシ サケ
富山	大豆 サトイモ リンゴ 干エビ イナダ
石川	サツマイモ ツクネイモ アズキ ヤマイモ 干イナダ
福井	柿 マイタケ 越前ウニ 若狭ガレイ
山梨	ブドウ 柿 トマト コケモモ ヤマメの薫製
長野	リンゴ ナガイモ ワサビ 寒天 乾シイタケ
岐阜	富有柿 干アユ 乾シイタケ
静岡	茶 ミカン ワサビ シイタケ カツオ節
愛知	レンコン フキ ナシ 柿 ノリ
三重	茶 柿 ノシアワビ カツオ節 乾シイタケ
滋賀	茶 柿 小麦 干モロコ
京都	エビイモ(サトイモ) クリ 茶 スルメ
大阪	クリ ミカン エビイモ(サトイモ) 乾シイタケ チリメンジャコ
兵庫	丹波黒大豆 丹波グリ 兵庫ノリ 干ダイ
奈良	富有柿 ヤマトイモ 緑茶 吉野クズ
和歌山	味一ミカン 柿 干サバ
鳥取	ナガイモ 二十世紀ナシ 乾シイタケ 丸干イワシ スルメ
島根	西条柿 ワサビ 乾シイタケ 板ワカメ 岩ノリ
岡山	中国ナシ 鴨ナシ ツクネイモ 黒大豆 干タコ
広島	ミカン サヤエンドウ 干カレイ(でびら)
山口	温州ミカン 岸根クリ スルメ 干エビ 煮干イワシ
徳島	スタチ 乾シイタケ ワカメ
香川	はだか麦 富有柿 オリーブ 乾シイタケ 干エビ
愛媛	はだか麦 クリ ミカン 乾シイタケ 干ダイ
高知	乾シイタケ カツオ節 ユズ プンタン
福岡	柿 ナス 乾シイタケ 干ダイ 干ノリ
佐賀	サガマングリン 柿 レンコン ノリ
長崎	乾シイタケ ミカン スルメ 煮干 長ヒジキ
熊本	スイカ アールスメロン 茶 温州ミカン 乾シイタケ
大分	ゴボウ 秋冬ダイコン ビーナツ ワサビ クリ
宮崎	乾シイタケ 茶 キンカン カボチャ カツオ節
鹿児島	茶 プンタン サツマイモ 早堀りタケノコ カツオ節
沖縄	パイナップル 茶 クロアワビタケ 乾燥ヒジキ

『週刊読売』増刊号（平成二年十一月二十七日号）



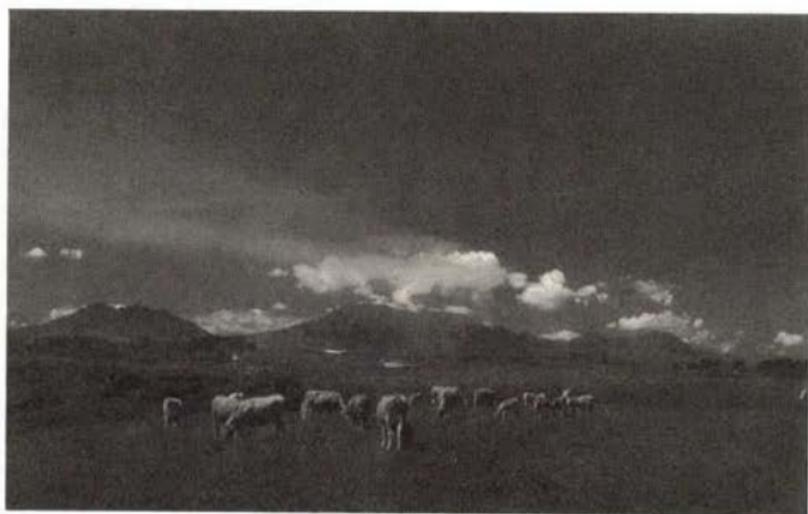
講

話

つながるは いのちのすがた

元日特金属工業(株)常務取締役

加納 祐五



阿蘇原野に放たれた牛馬

「いのち」といふこと

明治天皇の御製をいくつか

いのちの形而上学

心のはたらき

「心」と「精神」は好伴侶たるべきこと

失はれた「心」を回復するには

合宿もけふで三日目になります。この三日間を振り返ってどんな感想をお持ちでせうか。合宿ではじめて會った人が多いけれど、もう心を開いて思ふことを話し合ふことができる、そして、ふだんと違って何か心が充たされるやうに感じられると、若しそんなふうに感じてをられるなら、それは一体何に根拠し何を意味してゐるのだらうか。そんなことを皆さん自身の体験を基にして少しばかり考へてみたいといふのが今日の話の主題です。

「いのち」といふこと

心のうちを隠すことなく話すことができるのを、私たちは「心を開く」とよく申しますが、これは思ふに、相手が信じられてゐるといふことではないでせうか。「信ずる」などといふと或いは遠い別世界のことのやうに思はれるかもしれませんが、別に難かしいことではなくて、言ってみれば、心が通じることなのだと思ひます。「神を信ずる」といふのは神さまと心を通ひ合ふといふことでせう。また、そんなふうにして話し合つてゐると、何となく心が充たされてゆくやうに感じられる、心が生き生きとしてくるといふなら、それは自分が生きてゐることを実感してゐることだと思ひます。私たちはよく「いのち」といふことを言ひます。それを説明することは難しいことになりましたが、若し皆さんがこの合宿でいま申しましたや

うな感じを持ってをられるなら、その経験自体の中に「いのち」は現前してゐるのだ、と考へて一向に差支へない。私はさう思ふやうになりました。かうして私たちが心おきなく思ふことを話し合ふことができるといふのは、われわれ自身が「いのち」に包まれてゐるからなのです。人と人との心が通ふところに「いのち」は現前してゐるのであつて、そのことを「つながるはいのちのすがた」と言つたわけです。かう考へれば「いのち」といふことも大変身近かなものになるでせう。

明治天皇の御製をいくつか

そのやうなことを考へるときいつも思ひ出す明治天皇のお歌があります。

隣

さしなみのとなりにかよふ道ならむ籬の竹のひまのみゆるは (明治三十九年)

このお歌でどんな情景がうかびますか。きっと木々の緑も豊かな自然の中の風景でせう。竹の垣根の一ヶ所が開いてゐる、ただそれだけの情景をありのままにお詠みになつたのですが、



この開いた垣根をご覧になって、これは隣に通じる道なのだらうと、ふと思ひあたられたのです。隣の家と往き来をしながら暮らすといふのは人間にとって基本の共同隣保の懐しい生活事実です。自然の風景の中にあつて、思ひはおのづと人間生活の意味、味はひへと誘はれてゆくのです。また、こんなお歌もあります。

蟲

さ夜ふかく心しづめてきく時ぞむしの鳴くねはあはれなりける (明治四十一年)

蟲聲

さまざまの蟲のこゑにもしられけり生きとし生けるもののおもひは (明治四十四年)

心をしづめ、心を集中してじーっと聴いてみると、

およそ生命あるものの思ひが胸に沁みてくるといふご感慨であり、また

風後落葉

ひとしきりさそひし風はしづまりておのがまにまにちる紅葉かな　（明治十八年）

風はさそひ、紅葉はそれぞれの心のまに散るといふ、心のないもみぢの葉にも、空氣の動きである自然の現象にも「命」を感じてをられます。幾つかのお歌をご一緒に味はったのは、「いのち」といふものはこのやうにして感じられるものだといふことを感じとつていただきたかったからです。生理学的な生命は自然科学的に究明することができるでせうが、いまお話ししてゐる「いのち」は知的には理解できないもの、いはば芸術的に感受するより他ないものです。ですから例へば、明治天皇の御製のやうな優れた芸術作品などを深く味はつてみる事が一番大切なことで、あまりあれこれと考へることは要らないことですが、けふはその余計なことになります。が、「いのち」を感じるとはどのやうな意味のことかといふことについて考へてみようといふわけです。それも何かの役に立つと思ひますので。

いのちの形而上学

それについて、ルートヴィヒ・クラージェス（一八七二—一九五六）といふドイツの学者について触れたいのですが、別に外国人を引合ひに出す必要はないので、本居宣長の「物のあはれをしる」といふのも山鹿素行の「格物致知」いふのも、みな「いのち」の形而上学ともいふべきもので、それについてお話してもよいのですが、クラージェスは自身ヨーロッパ人でありながら最も深刻なヨーロッパ文明の批判者なので、しきりにヨーロッパ文明の行詰りが言はれてゐる今日の状況に鑑みて、皆さんに考へていただく上でその方がよいのではないかと思つたわけです。彼は物理、化学、哲学、心理学を学び、のちに性格学を創始しました。馴染みのうすい名の学問ですが、人格とはどのやうにして形成されるかといふ学問だと考へて下さつて結構です。沢山ある著書の中でも『人間と大地』と『心情（心）の抗争者としての精神』とが有名で、その書名自体がよく彼の考へを示してゐます。前者は、人間は大地、宇宙につながることによつて生命あるものになるといふことです。人間と大地が切離されたことがヨーロッパ文明衰弱の原因だと申します。後者は、意表をつく表現で多くの誤解を招きました。彼は心情と精神とをはつきり分けて考へました。心と精神は一つものだと考へてゐ

る私たちは面食らひます。だから「精神」を「理性」と置き換へたら理解し易いでせう。もつともそれでは彼が理性ではなく敢へて精神と言つた気持ちには汲み取れないかもしれませぬ。「精神」は人間にだけ与へられた貴重なもので、これなくしては人間の文明も文化も考へられないのですから、人間的価値として大変高いものとして考へられてゐるのです。それはそれで宜しいのですが、実はそのやうに考へられてゐる「精神」から、実は「心」が抜け落ちてしまつてゐるのではないかと警告するのがクラীগエスの真意ではなかつたか。そしてそこにヨーロッパ文明腐敗の原因を見てゐたのです。

心のはたらき

それではその「心」とはどういふものでせうか。先程の御製を例にしてお話してみませう。天皇さまは鄙びた田舎のある風景を眺めていらつしやいました。また夜も更けて虫の声を聞いていらつしやいました。それは目に見え耳に聞こえる感覚的な事実ですが、それだけには終りません。さうしていらつしやるうちに、おのづからに他人との交はり、人と人とのつながり、また生きとし生けるものの思ひといったものの上に御自身の思ひを馳せられるのです。それが「心」のはたらきです。クラীগエスはこの働きをシャウエンと言ひます。観得する、

又は観照すると訳しておきませう。心眼で見るといふ含みです。目で見るだけでなく心で見ることによって、感覚的事実といふ部分的な事柄にとどまらず、総合的全一的な人生の意味合ひを味得することができ、「いのち」に触れることができるのです。宣長が「物のあはれをしる」と言ったのはこのことでせう。もう一つ大切なこと、それは観得といふ心のはたらきは受動的に働くといふことです。見ようとして見られるものでなく、感じようとして感じられるものでもありません。前に申しましたやうに、私たちの周囲はすでに「いのち」に満たされてゐるのであつて、我々はそれを感じることができないでゐるのですから、何もあらためて探し廻る必要はなく唯だ気がつけばいい、気がつけば「いのち」は向ふから語りかけてくるのです。受動的といふのはそのやうな意味であつて、何もせずにはんやりしてゐることは勿論ありません。観得の働きが深まれば深まるほど我執は消えてゆくのだとクラークスは言ひますが、もし皆さんが心を開いて話ができてるのなら、其処ではもう随分我執は消えてゐるのではないでせうか。「秋夕」といふ明治天皇のお歌があります。

思ふことありとはなしに大空のうちまもらるる秋の夕ぐれ
(明治三十四年)

如何ですか。暮れゆく秋の空を虚心に御覧になりながら、天地自然、宇宙の生命に思ひをぬ

ぐらせておいでになる天皇さまのお姿が目には浮ぶではありませんか。

「心」と「精神」は好伴侶たるべきこと

クラークスは「心の対抗者としての精神」と言ひましたが、精神が貴重なものであることは前にも申しましたとおりです。例へば歌を作る場合のことでいふならば、観得された心象を表現するために言葉をえらび、その布置を考へるといふのは「精神」のはたらしに属します。実際に歌の形となつてまとまらなければその人の人格表出は完成しないのですから、精神はいかに大切なものかがわかりでせう。ところで、実際に感ずるところがなく歌を作つたらどうなりますか。そんな歌は心がないから駄目な歌です。クラークスが心配した「精神」は、例へばそんな歌のやうになつてしまつた「精神」だと言つたらいいのでせう。だから大切なことは「精神」は一人歩きしてはならぬといふことです。「精神」と「心」は互に好き伴侶でなければなりません。ゲーテが「わが観照（観得）そのものが思惟（精神）であり、わが思惟は観照である」と言ひましたのは、この間の消息をよく物語つてゐます。ゲーテがそのすぐれた観照によつて得た想念を、生涯をかけて劇詩「ファウスト」に仕上げたのは彼のとびぬけて強靱な精神の力であつたと言はねばなりません。それほど大切な精神ですが、

もし心を忘れたらどうなりますか。心を失ったものがものを考へることほど恐ろしいことはありません。何故かといへば、それは結局には自分の得手勝手にもものを考へ、偏狭な自己を押し通さうとすることになるからです。その恐ろしさをイギリスの文学者チェスタトン氏は「狂人とは理性以外のすべてを失った人のことだ」と申しました。さすがに逆説の名人らしく、実に言ひ得て妙だと感心します。私どもが聖徳太子についてお教へを受けた黒上正一郎先生、そのまた思想上の先生であった三井甲之先生は、正岡子規の流れをくむ優れた歌人でもいらつしやいました。私どもが明治天皇の御製について目を開かせていただいたのも三井先生のお陰ですが、その先生が、いま申しましたゲーテの言葉を引きついで「論理学は詩魂に導かれねばならぬ、実有は思惟に先行するが故に」と言つてをられます。詩魂は歌ごころです。実有といふのは先程も申しました全一的に把へられた人生の眞実といふことでせう。人生の本当の意味を味はふことができるのは歌心があつてのこと、ものを考へるのはそれから。このことで、理知は心情に導かれねばならないのです。クラークスは、「精神は心に浸ひたされてゐなければならぬ」と言つてゐますが、いい言葉ですね。

失はれた「心」を回復するには

クラゲスは「心」が失はれたことにヨーロッパ文明衰退の原因を見出したのは前に申しましたとおりですが、さて日本はどうでせう。明治以降、西欧文明の摂取に大成功したのは素晴らしいことでしたが、少なからず「心」を失ったことも争へないところです。ではその心を回復するには如何するか。これもクラゲスに聞いてみませう。彼は、「心」は天与のものだと言ひます。だから自分の勝手に捨てることも拾ふこともできません。育てることもできないのです。勿論他人ひとに育てて貰ふものでもありません。自分の力で好きなやうに育てることができないのは植物の場合も同じであつて、植物はわれわれが手で引っぱって成長させるわけにはいかないのと同じです。われわれに出来ることは養分を与へることだけだと言ひます。さうすればあとは自然の力によって育つのです。

それでは「心」に与へる養分とは何かといへば、それは「驚異と手本」だと言ひます。驚異は畏敬に通じます。彼は、大地の力、宇宙の生命に、そしてあらゆる生あるものに畏敬の念を抱きました。この敬虔の念によって人と人とは結ばれ、人と郷土はつながるといふのです。では、手本とは何でせう。それは神々であり、詩人であり、英雄であると言つてゐます。

さういふ手本について学ぶのです。

そこで最後に私の経験をお話しませう。私は先程の御紹介にもありましたやうに、高等学校時代に黒上正一郎先生にお会いすることができました。何を教へていただいたかといふと、明治天皇の御歌と聖徳太子の御文章でした。それは正に詩人であり、英雄であり、また神々でもあったわけです。さういふことを教へていただいて私は大変な驚きを感じ、畏敬の心も恵んでいただくことにもなりました。また和歌といふものについても目を開かせていただいたわけです。今日の私のまづい話でも、多少はおわかりいただいたのではないかと思ひますが、歌の道に心がけるといふことはとりもなほさず観得の力を養ふこと、心の眼を開くやうに努めることなので、つまりは「いのち」に至る道ともいふべきものです。「心」を回復するためには、このやうな機縁にめぐりあふことが大切です。若し皆さんが、この合宿で本当に友だちと心おきなく話ができるやうになつたのならば、それはチャンスです。苦しみながらも初めて歌を詠んでみるといふのも一つの大きなチャンスです。このチャンスを逃してはなりません。

今日は、ヨーロッパで或いはアジアで、至る処大きな動乱がつづいてゐます。そんなとき、心を回復するために和歌を詠むなどと迂遠な話ではないか、と思ふ方があるならば、それは心得ちがひです。今日の難局を究極において克服するものは心を措いてはありませぬ。自分

の心を育て、その心に花を咲かせることは、決して生易しいことではなく、また悠長な話でもありません。これで私の話を終ります。

若き友らへ語りかける言葉

——心のふるさと——

国民文化研究会常務理事

長 内 俊 平



雲海の中の阿蘇高原

はじめに——知るといふことの本義について——

「ムク」といふ少女の話

懐かしさの源泉

心のふるさと

人はパンのみにて生きるにあらず

祖国の現状

最後に——すずやかな眼をもった青年の輩出を願って——

はじめに—知るといふことの本義について—

ただ今司会の大島伸一君が、「知る」といふ言葉を使ひ、講義のなかでも随分出て参りましたが、一体「知る」とはどういふことなのかを先づ皆で考へてみませう。

私の知人が先日「長内君、君は津軽の出身ださうだね。それぢや津軽民謡のルーツは知つてゐるだらうね」と言ふので「知らね」と答へましたところ「それぢや津軽唄つがるうたのなかの三下さんさがりの唄は何と言ふ」と聞くので「それも知らね」と返事しましたところ、「君は津軽衆だと言ふけれども、津軽のことを何も知らんぢやないか」と言はれました。

そこで私は、その知人に「君は随分津軽のことに詳しいくはいな。それなら津軽唄つがるうたつこ相当上手だべの」と言つたら「歌へない」つて言ふんですよ。

私は先程紹介されました様に、戦後五年間百姓をしました。家内と二人で、道路に落ちてる馬糞拾ひから始めました。戦争に敗れたばかりの時でしたから肥料がない訳です。ですから馬が歩いて行つたあとの馬糞を拾つて歩きそれを肥料にしたのです。とに角、真剣に百姓をしようと思ひましたので、さういふことから始めました。

また村から二里半ぐらゐ離れた弘前まで、便所しもこえ（下肥）を貰ひに行きました。諸君は笑ふで

せうが、そのころは人糞は最高の肥料だったので。けれども見知らぬ人の家に行ってもすぐには汲ませてくれません。「餅か何か持って来たが!!」「いや」と返事するともう汲ませてくれません。最後は親類の家に行つて汲ませて頂き、やつと櫛きりに積んで雪道を帰るときに、持つて行つた弁当は、拳大こぶしのそれも半分は大根の葉の入つたおにぎり二個だけです。祖母と家内は、お米が浮んでゐる様なそれも大根の葉の方が多い粥かゆをすすりながら、やつと持たせてくれたお握りですが、もう途中で腹が減つて減つて倒れさうになる。そんなことをして百姓を続けました。

ですから、私が故郷へ帰り、酒でも入ると姉は「俊ちゃん、やえへ」と言ひます。「やえへ」といふのは「唄ひなさい」と言ふ意味です。

はあーあああー

津軽名物じよんがら節よ

若い衆唄つて主の囃子

娘踊れば 稲穂も踊る

と唄ひますと、うちの姉は「もひとつやえへ」（もう一つ唄ひなさい）つて言ひます。（拍手）今日は時間がありませんので、これだけにして置きますけれども。（笑ひ）

要するにその知人は、いろいろなことをよく知つてゐるわけです。ところが肝腎の民謡を



唄へないのです。五冊や六冊の本を読むことはそんなに苦勞でありません。しかし津軽唄を、「もう一つ歌えへ」と言はれる程になるまでには、余程の苦勞が要ります。それだけでなく、本当に百姓の苦勞を体験しないと唄に生命いのちがこもらないでせう。

日本の歴史、伝統を滔々しやべと喋れる人を、日本をよく知ってゐる人と言ひますか。さうぢやないでせう。

私達は、だしぬけに生まれて来た訳ではないのです。お父さんお母さんあり、祖父母あり、その先ずつと祖先の方方がをられて、今日の私達があるので。その間に積み重ねられ私達の血潮となつてゐるものが、日本文化といふものぢやないですか。私達一人一人に染みついてゐる筈のものです。

ですから「日本って何ですか」と聞かれたら「恥かしながらこの私です」としか言ひ様のないものでせう。我をして我たらしめないものは、知識であつ

て、文化ではありません。

どうか本当に「知る」とはどういふことなのかを真剣に考へてほしいと思ひます。

「ムク」といふ少女の話

一年程前の産経新聞に「ムツゴロウ謎の川一二〇〇キロを行く」と題する畑正憲さんの紀行が載り大変興味を以って読んでをりました。中国とインドの国境にある、インドのアッサム州の謎の大河を踏破された時の記録であります。

アッサム州といふのは、東はビルマ、北はチベットとブータン、それから西は、この間、海外協力事業団の方々が飛行機事故で亡くなられたあのネパールに接してゐるところです。

そしてブータンといふ国は、諸君も知つてをられる様に、この春、三十年もの永い間ブータンに住みつき、農業の指導をされて、英国でのサーに当る、ダシヨーといふ称号で呼ばれてをった西岡京治さん(五十九歳)が、国葬で厚く葬られたあのブータンです。国王にお礼に参上した西岡さんの奥さんに、国王はねぎらひの言葉をかけられたのに対し奥様は「主人はこの次はブータンに生れ変はると思ひます」と答へられたと聞きます。

私達と血を共にする同胞のなかに、かう言ふ尊い事業に一生を捧げられた方がをられるの

です。

さて、ムツゴロウさん達は、「ゲリン」と言ふ小さな村に一夜泊り、翌日ポーターを雇った。ところがやって来たのは、諸君の様な頑強な青年ではなくて、十歳を少し過ぎたばかりの少女達ばかりだったといふのです。ムツゴロウさんは、大変びっくりしました。ひと包を二十キロづつにしてあったからです。「こんな小さな子供達が来ることを知ってをったら、もつと荷を小さくして置くんだった」と思ったさうですが、その少女達は、薦で作った背負ひ紐を荷にひっかけ、一方を頭で支へただけで、何の苦もなささうに、スタスタと歩いてゆく。履いてゐるものと言へば、半数以上が粗末なゴム草履で、なかには裸足の子もをつたといふことです。

やがて道は、急に登りになって行き、道跡もときどき消えてしまふやうな小石だらけの斜面で、左をみれば千尋の谷底です。手を使はなければ渡れない様な急な崖になる。肩でやつと息をしながら、あゝもう駄目だ、ここでギブアップしたらどんなに楽だらうと何度も思ったさうです。

さうしたら、その少女のなかに、「ムク」といふ名のチベット族の少女がをり、前の晩村の祭りで一緒に踊った少女だったさうですが、その子は、六つの時に父上をなくされ、ムツゴロウさんを見た途端、「天から父が降って来た」と思ったと言ふのです。ですから、ムツゴロ

ウさんが、よろめいて膝を下しかけたりすると、「こんなところで休んではいけません。ゴー」と情容赦なく尻をたたくといふのです。このあとは、ムツゴロウさんの手記をそのまま読ませて頂きます。

「つまづき、よろめくと、ムクの手が伸びて来た。ふと気がついた。斜面をたどる時、ムクは必ず左にゐた。谷側にゐて、私を落下させまいとしてゐるのである。

胸がじいんと熱くなった。百萬の愛の言葉より、それは切なく、私を勇気づけてくれるものであった。」

私は、その手記を読んでゐて、ここへきたときに、異常な感動に襲はれました。

それは、私が忘れ果ててゐた「尊いもの」に出会った様な、懐かしい遠い祖先に会つてゐる様なそんな感動だったので。

懐しきの源泉

それで、一体この懐しさはどこから来るのだらうか、と考へてゐましたところ、それには、二つの理由がある様に思はれて来ました。

その一つは、紀行に添へてある写真をみますと、この少女達の顔や姿が、私が幼い頃育ち

ました下北半島の小さな漁村で一緒に遊んだ少女達とよく似てゐるのです。その上住んでゐる民家の格好も、家のなかに大きな囲炉裏いろりがあつて、その脇に薪を積んである様子までそっくりなのです。「これは不思議だなあ」と思つてゐるうちに、岡潔先生のお話が思ひ出されて来ました。岡先生は高名な数学者で、文化勲章も受賞された方でございますが、この合宿にも二度おいで下さり忘れられないお話をして下さいました。

その岡先生が、昭和四年に洋行なされた折、シンガポールで船を降りたところ、そこは砂浜の様な浜辺が長く続いてをり、数本の、先の方にだけ葉がついた椰子やしの木が見え、その下に日本の神社の原型を思はせる様な民家がぼつんぼつんと建つてゐたと言ふのです。先生は、「この景色をみてゐるうちにひどく懐かしい気がした。それはただの懐しさではなく、異常な程度の強い懐しさであつた。その時以来私は、日本民族が南方から来たものであることを疑はない。」（『春宵十話』二〇二頁）
 と言はれた、そのお話であります。

岡先生は、そのお言葉につづけて「想像の翼をひろげてみれば、……日本民族は一万年位前に黄河の上流に位置してゐたのではないかといふ気がする。それは支那上代の情操がわれわれにびつたりするからである。」（同書所載）と言はれました。

皆さんもよくご承知の詩経（孔子様の編と言はれる、紀元前十世紀頃の支那の詩三百五篇を収め

た書)のなかの「桃之夭々たる、灼々たるその華、之子干歸ぐ、其室家に宜しからむ」などの詩を朗誦してをりますと、先生のおっしゃる様に、萬葉の心に通ふものを覺えますね。やがて地球が冷たくなって来たために私達の祖先方は南下し、海を渡ってこの日本へやって来たのではないかと言ふお話でした。

なほ岡先生はそのなかで大変面白いことをおっしゃってをられます。我々日本人が佛教といふものがよく分るのは、祖先がそこを通って来てゐるからではないか、と言ふ意味のことです。さう申せばさき程申し上げたネパールはお釋迦様が誕生なさったところですね。さて、その話をおききしたしばらく後に、柳田国男先生の書かれた『海上の道』を読んだのでありますが、達人の直感力はまことに一致することに驚いたのであります。

柳田先生は、明治三十年の夏、大学二年生の折、伊勢湾の入口に当る渥美半島の突端、伊良湖崎に遊ばれ、その間に「アユ」(アイノカゼ・海岸に向つてまともに吹いてくる風・渡海の船を安らかに港入りさせ、またくさぐさの珍らかなものを渚に吹きよせる風)にのつて、椰子の実が渚に流れ寄つてゐるのをみつけ、我々の祖先が、南の國から渡つて来たことを確信されたのです。この感動を友人である島崎藤村に語つたところ、藤村はあの懐しい「名も知らぬ遠き島より流れ寄る椰子の実一つ」(椰子の実)の詩を作られたのです。

あの詩のなかの「思ひやる八重の汐々……」といふ表現は、ただ遠い幾重なす海原を越え

てといふことだけでなく、この日本に稲の種と、その耕作の技術を背負ひ、幾年もの間「アユ」の吹く日を待ち、命をかけてこの国に渡って来た遠い祖先方に寄せる深い思ひが籠こもつてゐると思ふのです。

また併せて昭和天皇様がおなくなりになられる前年（昭和六十三年）に

ブータンのならばしわれに似る話浩宮よりたのしく聞けり

とお詠みになられた御製が浮んで参りました。

ブータンの子供達の遊びは、竹馬乗り、べいごま（貝独楽）など私達の幼い頃の遊びとそっくりだと聞いたことがあります。

ですから浩宮様が目を輝かせながら、おちい様であられる昭和天皇様に、ブータンの風習を話してをられるご様子が眼に見える様なこの御製が直ちに浮んで来たのでした。

そんなことが、私の心のなかに折重なつて「ムク」といふ少女の尊い姿をみてゐるうちに、遠い私達の祖先に出会つてゐる様な感動となつたのだと思ふのです。

心のふるさと

いま一つは、私達人間は、洋の東西を問はず、美しいもの、尊いものに触れると、感動い

たします。

私は日本人であります、フランスの画家ミレーの「晩鐘」といふ名画が、戦後初めて日本で公開されましたとき、見に行つて深い感動に襲はれました。

一方昨日加納先生が話されたあのトインビーさんがお伊勢様に行かれたとき、「世界で最も神聖なものがここにある」と感嘆されたといふことは皆様も御存知であります。

それは何故でありませうか。

その秘密をソクラテスは次の様に言つてをられます。

「我々人間は、かつて神々のあとについて行き、天空の果まで昇つて行つて、そこに真の意味に於て、在るところの存在―色なく、形なく、触れることも出来ない《実有》といふべき、真善美の備はつた靈妙な世界をみたことがあるのだ。

人間の魂は、どの魂でも生れながらにして、真実在を觀てきてゐる。人が美しいものに感動するのは、その思ひ出が甦つてくるからなのだ。若しさういふ体験がなかつたならばどうしてこの人間に感動がやってくるであらうか」(プラトン著『パイドロス』岩波文庫・藤沢令夫訳より筆者要約)と言つてをられます。

八木秀次君が、講義の締めくくりで「己の感動を信ぜよ」と言ひましたが、人は、自分の才覚で感動するものではないのです。やつて来るものなのです。だから信ぜよと言つたので

す。

また、お釋迦様は「一切衆生悉有佛性」（涅槃經）と言つてをられます。

しかし、この言葉はあまり気軽に使つてはいけません。私達が使ふとすぐ観念的になつてしまふからです。「ああさうだよ、一切衆生は悉有仏性だよな」なんて、いとも簡単に言つてしまつて、分つた様な氣になるのです。さうではなく、加納先生が仰られた様に「鳴いてゐる虫も皆友達なんだ」といふ感動の表現なのでせう。道元様は、「悉く佛性有り」とは読まず「悉有は佛性なり」と読まれたといふことを戸田義雄先生は、『祖国と人類の悲願』のなかでおっしゃつてゐます。

聖徳太子様は—聖徳太子様のことが私が、一言でも申し上げることが出来ますのは、一重に黒上正一郎先生の書かれた『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』（以下単に「御本」と言はせて頂きます）のお蔭でありまして、私共は、『明治天皇御集』とこのご本を何よりも大事に致して参りました。—

十七条憲法の第二条の中で「人九はなはだ 悪しきもの鮮しすくな、能く教ふれば之に従ふ」とおっしゃつてをられますが、このお言葉は、「悉有佛性」といふ佛語を、御自分の体験と照し合はされながら深く味識みしきなされた、人間の靈性れいせいに対するご確信の表現かと存じます。

ですから「能く教ふれば之に従ふ」。よく教へると、その眠つてゐる靈性が甦つて来て、ハ

ツと気付くのだ、との仰せかと存ずるのであります。「鮮し」とは「無い」といふご確信であります。

明治天皇の御製に、

いつはりの世をまだしらぬ幼子がこころや清きかぎりなるらむ（『子』明治四十二年）

といふ御製がございます。

いつはりの世をまだ知らない「幼子の心」がいま申し上げた、かつて人間が神々のあとについて行つて觀照した真實在の世界であり、佛性であり、靈性そのものであるとの教へかと存じます。

また、

幼児にうたはれてこそ言の葉のしらべいよいよたかくきこゆれ（『歌』明治四十一年）

といふ御製もございます。

この合宿の準備のために私は六日からここに來てをりました。さうしたら七日の朝に廊下で、三歳位の女の兒がお母様と手をつないで歩いて來るのに出会ひました。「ああ、可愛いいな」と思つてゐたら、やがて「お手手つないで、野道をゆけば、皆可愛い小鳥になつて……」と歌ひ出しました。天女の声つて、かういふものかと思ひました。幼兒の声つて何といふ素晴らしいものかと感じ入りました。

私が、ムツゴロウさんの紀行を読み、「ムク」といふ少女の尊い姿を見て、たまらなく懐かしい世界に引き入れられたのは、以上二つの理由が折り重なりながら私を「心のふるさと」へ連れ戻してくれたからではないかと思ふのであります。

人はパンのみにて生きるにあらず

イエスキリストは「人はパンのみにて生きるに非ず」(新約聖書マタイ伝第四章)と言はれました。

それではパン以外の何によって人は生きてゐるのでありませうか。

それは、私が先程から申し上げて来た「心のふるさと」「をさな心」へ立帰ること即ち魂を養ふ糧—加納先生のおっしゃった養分—を言ふのだらうと思ふのであります。

精神と肉体は一体不二なものでありますから、食べ物(肉体を養ひ、「幼心にかへること」は魂を養ふものだ、)と言ひ切つてしまふと間違ひです。—私が小学生の頃東北地方に、餓死する人が多く出る程の飢饉がありました。

小学生で弁当を持って来れぬ児童がいっぱい出ましたので、県でお握りを給した学校がありました。そしたらある学校の小学五年生の女兒が支給されたお握りを食べずに家へ持って

帰って、まだ学校にゆかぬ小さな弟と妹に別けて食べさせてゐた、といふ話を聞いたことがあります。皆さんがデパートで買ってくるお握り一個と、その小学校五年生の兒が弟妹にわけて与へたお握り一個は、カロリーも、なかに含まれる栄養分も同じかも知れません。

しかし姉が自分の飢を忍んで弟妹に与へたお握りは、勿論二人の肉体も養つたでせうが、この世で最も大切な慈みといふ魂の糧を姉から恵んで頂いたものではありませんか。ですから身体を養ふものと、魂を養ふものとを截然と分けて考へるのは間違つてをりますが、今は分りいい様に、魂の糧を口にしたら（「心のふるさと」へと立帰つたら）どんな力が恵まれるかについてお話しませう。

皆さんは、明日いよいよ合宿も終り、お家へ帰ります。女子の方はお家へ帰るや「お父さん、お母さん只今!!」と言つただけで涙ぐむ方もをられませう。男子の諸君は「お父さん、お母さん只今!!」ああお母さんの手料理が食べたかつたなあ」ときつと言ふでせう。「お父さんお母さん只今!!」と大きな声で言つた途端、皆さんは、お母さんの膝に抱かれてゐたときの幼兒―即ち「心のふるさと」「をさな心」―に瞬時にして立帰つてゐるのです。

その時先づ、何とも言へぬ心の平安に恵まれるでせう。そしてどんな素晴らしい御馳走よりも、お母さんが作ってくれる料理が、おいしく、どんな立派なホテルの部厚いベッドよりも、お父さんお母さん、お姉さんや弟の声がすぐ近くに聞えるわが家で寝るセンペイ布団の

方が、はるかに温もりがあることに気付かせられませう。

その時あなた方は、人の真の幸とは何かといふ物の本質を見抜く、すずやかな眼—慧眼—を恵まれるのです。

さらに、明日からお父さんお母さんが喜んで下さる様に、もっと頑張らなくては、といふ生きる勇氣が湧いて来るのを覚えるでせう。

さうです。魂の糧を口にしますと、即ち「をさな心」に立帰りますと、「心の平安」と「物事の本質を見抜くすずやかな眼」と「生きる勇氣」が恵まれるのです。

祖 国 の 現 状

私達はいま、あまりにパンのみを求めすぎ、魂の糧を手に入れる努力を惜しんではをりませぬか。そしてそのことの重大さに気付いてをらぬのではありませんか。加納先生は昨日、その危機の深さに気付いてほしい、と言はれました。

いまわが国の児童や生徒のなかに登校を拒否してゐる者が五万人も居るといふことを学校教育に携はってをる知人から聞きました。これに登校をいやがる人の数を加へたら驚くべき数に達するでせう。

社会の一つの現象は、その社会の姿を写す鏡でせう。

街には、車が溢れ、食べるものは満ち足り、着る物にも何一つ不自由しない今の日本で、未来を背負ふべき児童・生徒達に何が故に、最も楽しかるべき学校を厭いとひ、これを拒むものが多くなって来てゐるのでありませうか。

いな、資源が何一つない国でありながら、物を浪費して、心の痛みも感じなくなつてゐる（憤つしみの心を失つてゐる）私達大人の 慢な、病んでしまつてゐる魂をそのまま児童・生徒の姿が映し出してゐるのではないでせうか。

今から八十年程前、ラジュームを発見してノーベル賞を受賞されたキューリー夫人が、夫を顕彰するために書かれた文の最初に、御主人の言葉として「犯罪人の手に掛かければラジュームは非常に危険なものになりかねない。……人類は自然の秘密を知つて果して得とくをするであらうか。その秘密を利用出来る程人類は成熟してゐるであらうか」（戸田義雄著『祖国と人類の悲願』所載—キューリー夫人の生家を訪ねて—より）

と書き残された言葉は、そのまま今の私達に投げかけられてゐる言葉ではありませんか。今日科学は、目を見張る程進んでをりますが、それを人類、いな生きとし生けるものの幸の為に活用してをると言ひ切れるでありませうか。

私達はいまこそ魂の糧を手に入れる努力をするべきときであります。

最後に—すずやかな眼をもった青年の輩出はいしゅつを願って—

しからば、如何にしたら魂の糧を手に入れることが出来るのでありませうか。

しかしそれには残念ながら近道はありません。知識みたいに「ああ分りました」といふ具合には行かない。各自各自の生涯をかけての努力と自得に待まつしかないからです。

しかしヒントはあります。

その一つは最も身近かで、最も当り前なものに感動することです。

この席に、熊本県の丸米まるこめ小学校の先生をしてをられる養田誠一さんが居られますが、その養田先生の教へ子から昨日手紙を頂きました。『二十六の瞳を輝かせて』といふ題の小学六年の生徒さん達から写真入りの便りを頂いたお礼に歌を送ったその返しのお便りでした。

そのなかに「私は今、一時一時がとても楽しくて、いつも顔が笑ってます。本当に笑ひ出したら止らないんですよ。先生は大きな声で笑ったことがありますか。今の時期、丸米は大きく育いって行く稲の緑色がとても綺麗で、自然しぜんっていいなと、当り前の様にある自然がすごく綺麗に見え、稲が本当に生きてゐるやうな様子が伺うはれます。…」（山口渚さん）

といふお便りがありました。本当にこの子は、当り前のことと思はれることに感動してゐ

る。当り前のもののなかに天地の命を感じとつてをるでせう。

いま一つは「…養田先生の家へ遊びに行つたところ皆で、長内先生から頂いたお手紙を拝見させて貰ひました。ずっと読んで行つて、私の名前を見付けたとき、すごく嬉しかったです。そして感動しました。…私がもう少し大きくなつたら長内先生に会ひたいです。…」
(神瀬由香さん)といふお便りです。

この子供さん達は、稲を見ては感動し、便りのなかに自分のことを詠んでくれた歌をみつめては感動してゐるのです。この感動こそが魂を養ふ糧なのです。しかしなかでも、最も身近かで最も当り前なものは、先程から申し上げてゐるお父様、お母様であり、私達のお先祖様であります。

今から一、三〇〇年も昔の私達の祖先であり、皆さんと同じとしじろ歳頃の防人達さきもりがうたつた歌に、

忘らむと野ゆき山ゆきわれ来れどわが父母ちちははは忘れせぬかも

天地あめつちのいづれの神を祈らばかうつくし母にまたこととはむ

—天地のどんな神様に祈つたならば懐かしいお母さんに会つて「お母さん!!」と言へるだらうか—

時々の花は咲けども何すれぞ母とふ花の咲き出来でこずけむ

—春には春の花、夏には夏の花が咲き、秋には秋の花が咲くといふのにどうして「お母さ

ん」といふ花が咲かないのだらうか、若し咲いたら「お母さん」と呼んで、一緒に睦み合ふことも出来るだらうに—

といふお父さんお母さんを幼子の如く切々と憶おもふ歌があります。

お父さんお母さんそして祖先方こそは、私達にとり佛様であり、観音様であり「心のふるさと」であります。

佛様といふのは、どんなよいことをする人も、どんなよくないことをする人も平等にいっくんで下さる方と言はれてゐます。また観音様はどんな悩みでも、どんな苦しみでも聞き届けて救つて下さる方と聞いてをります。

しかし本当に諸君のどんな悩みでもどんな苦しみでも聞いて下さるのは、お父さんお母さんではないですか。

ですから、皆さんも小さな子供さんがいまにも転びさうになりながら「お母さん!!」と行つて懸命に駆けてゆく、あの姿を真似て下さいよ。

然さうすれば、自おのづから「心のふるさと」へ導かれ、「物事の本質を見抜く、すずやかな眼—慧眼—」を恵まれるであります。

一国の消長は、この「すずやかな眼」を身につけた青年が幾ら多く生れるかにかかつてをります。

どうか慕ってやまないよき師をみつけ、——八木君は、あんな立派な人になりたい、といふ
憧^{あこがれ}なしに立派に人にはなれぬ、と言ったでせう。——いのちをも分け合ふ様なよい友を得て——
黒上正一郎先生と梅木紹男さんの友情の深さは、『黒上正一郎先生のうたと消息』（国文研刊）
のなかの数々の歌となつて残されてをりますが、

國のため末はなりなむよき人を身にかへてもと祈りぬわれは（同書八九頁所載）

の歌でも知られる如く黒上先生は病氣になつた梅木さんの身代りにならうとされた程二人の
友情は深かつたのです。

聖徳太子様に対する信と、梅木さんとの深い友情が、私共の会の誕生の基であつたことを
忘れてはならぬと思ひます。黒上先生のお言葉のなかに「自ら親和の體驗なくして他に協力を
を教ふことは出来ぬのである。」（東京高師信和会趣意書（本二四五頁所載）と）ございます様に、
本当に素晴らしい友を持って、初めて人にも「仲よくしろよ」と言へるんぢやないですか。
——互に勵まし合ひながら、私達の祖先方が幾千年幾万年かけて美しく彩^{いろどり}を添へてくれた、わ
が祖国日本の豊かな歴史といふ思ひ出の道を辿りながら、尊きもの、悠久なものを戀ひ求め
て行つて下さい。

——私は先程、人間には普遍的に佛性・靈性が天与のものとして備はつてゐることと、併せて
ムクの話から遠い祖先に会つてゐる様な懐かしい思ひに誘はれた旨を語りましたけれども、

ここで注意して頂きたいのは、この人類に具有されてゐる佛性といふものだけを追求してゆくと観念的になつてしまふといふことです。「幼な心」とは何ぞや、などといくら考へても分るものではありません。—

われわれの祖先が何万年、何千年かけて、いろどり彩を添へてくれた歴史といふ思ひ出の道を辿つてゆくとき—天照大神様・素戔すさのをのみこと鳴尊・菟道稚郎子うさぎのわきいらつこ・日本武尊・弟橘媛など古事記に出てくる神々や聖徳太子様を始め万葉集などに私達の懐かしい祖先方がいっぱいいらつしやるでせう。—その尊い方達の跡を辿つてゆくとき、どこからともなく囁きかけてくる懐かしい「心のふるさと」の声をきつときけることと信じて疑ひません。

完

■ 短歌入門

短歌創作導入講義

福岡県立須恵高等学校教諭

那 須 三 元



広がる草千里

短歌創作をお勧めする理由

短歌創作上の留意点

私の作品から

歌の調べといふこと

台風一過、天気もだいぶ回復し、いよいよ待ちに待ったレクレーションの時間がやつてまゐりました。このレクレーションの時間は、同時に短歌を創作していただく時間でもありませんので、皆さんの中には気の重い方もいらつしやるかもしれませんね。「短歌を詠む」といふ経験をしていただくことは、このセミナーの重要な研修テーマのひとつなのですが、ではなぜ短歌創作をお勧めするのか、といふことについて最初にお話しさせていただきます。

短歌創作をお勧めする理由

最近新聞を読んでをりまして、つぎのやうな投書を目にしました。

▼たとえば、車で通勤途中、右折しようとしている対向車があるとすると、止まって通してやるのは簡単なことだ。だがその間、自分の後ろの車は待たされることになる。たとえば、電車に乗っていて座っている自分の前にお年寄りが来たとする。席を譲るのは簡単だ。でも譲れなかった隣の人は面白くない。

親切は不親切と隣合わせだ、だからやらないほうがいい、というわけじゃない。だれかのために良かれと思ってやるのが、他のだれかを不快にすることがある。それを考慮す

る必要はあると思う。「西日本新聞平成四年八月一日付「ヤング雑記帳」公務員 26歳」

皆さんはこの二十六歳の方の意見をどう思はれますか。「止まって通してやるのは簡単なことだ」とか、「席を譲るのは簡単だ」などありますが、例へば乗物の中でお年寄りに席を譲るといふのは、普通そこに某かの心の葛藤を伴ふのではないでせうか。また、「譲れなかつた隣の人は面白くない」ともありますが、私も先日次のやうな経験をしました。私がたまたまバスに乗つて後ろの方に立つてをりますと、赤ん坊を連れた若い夫婦が乗り込んで来たのです。すると前の方の座席に座つてゐた髪を赤く染めた若い女の人が、すつと立ち、「どうぞ」と言つて赤ん坊を抱いたお父さんを座らせたのです。私はそれを見てゐて何か爽やかない気持ちになつたのですね。例へ自分が躊躇してゐる内に隣の人が座席を立つて席を譲つたとしても、譲れなかつた自分を恥づかしく思ふ反面、「ああやつぱりかういふ人もゐるんだなあ」と、却つていい気持ちになるのではないでせうか。私はこの二十六歳の公務員の方の意見は、我々の心の実態から随分離れてゐるのではないかといふ気がするのです。「親切は不親切と隣合わせだ。だからやらないほうがいい、というわけじゃない。だれかのために良かれと思つてやるのが、他のだれかを不快にすることがある」とありますが、「親切」とは他を思ひやる行為でせう。そして、さういふ思ひは、我知らず自然に湧き起こるものであつて、そこに



は実際には「他のだれかを不快にする」といふ理屈の入り込む余地はないのではないでせうか。世間にはいろいろな人がゐるわけですから、確かにある人の「親切」な行為によつて「不快」になる人もゐるかもしれない。しかし、私たちが大切にしていかなければならないのは、他を思ふ気持ちが我知らず自然に湧き起こるといふ心の働きだと思ふのです。この投書者が「親切」と言ふ時、そこにはある具体的な人の心の動きが思ひ出されるわけではない、つまり観念です。このままでは「自分が親切なことをしないのは、それが同時に誰かに不親切になるからだ」などといふ観念の遊戯に何の違和感も覚えなくなつてしまふことにもなりかねません。この人は多分真面目に考へてゐるのだと思ひますが、このままでは真面目に考へれば考へるほど、「親切」「不親切」といふ観念に縛られて恐らく何もできないのではな

いでせうか。

右のやうな投書に接してすぐに思ひ出しますのは、かつてこのセミナーに何度もお出でくださつた文芸評論家小林秀雄先生の「美を求める心」の一筋です。

▼見ることは喋ることではない。言葉は目の邪魔になるものです。例へば、諸君が野原を歩いてみて一輪の美しい花の咲いてゐるのを見たとする。みると、それは菫の花だとわかる。何だ、菫の花か、と思つた瞬間に、諸君はもう花の形も色も見のを止めるでせう。諸君は心の中でお喋りをしたのです。菫の花といふ言葉が、諸君の心のうちに這入つて來れば、諸君は、もう眼を閉ぢるのです。それほど、黙つて物を見るときは難しいことです。菫の花だと解るといふ事は、花の姿や色の美しい感じを言葉で置き換へて了ふことです。言葉の邪魔の這入らぬ花の美しい感じを、そのまゝ、持ち続け、花を黙つて見続けるといふ事は、花は諸君に、嘗て見た事もなかつた様な美しさを、それこそ限りなく明かすでせう。(中略)

さういふ姿(発表者注 物の美しい姿)を感じる能力は誰にでも備はり、さういふ姿を求める心は誰にでもあるのです。たゞ、この能力が、私たちにとつて、どんなに貴重な能力であるか、又、この能力は、養ひ育てようとしなければ衰弱して了ふことを、知つてゐる

人は、少ないのです。今日のように知識や學問が普及し、尊重される様になると、人々は、物を感じる能力の方を、知らず識らずのうちに、疎かにするやうになるのです。物の性質を知らうとする様になるのです。物の性質を知らうとする知識や學問の道は、物の姿をいはば壊す行き方をするのです。例へば、ある花の性質を知るとは、どんな形の花辨が何枚あるか、雄藥、雌藥はどんな構造をしてゐるか、色素は何々か、といふ様に、物を部分に分け、要素に分けて行くやり方ですが、花の美しさを感じる時には、私達は何時も花全體をひと目で感ずるのです。だから感ずることなど易しい事だと思ひ込んで了ふのです。

「小林秀雄著 『美を求める心』から」

「葦の花」といふ言葉を「親切」といふ言葉に置き換へれば、先程の投書者の陥つてゐる問題点が明らかに浮かび上がつて来ます。「花の姿や色の美しい感じを、そのまゝ、持ち続け、花を黙つて見續けてゐれば、花は諸君に、嘗て見た事もなかつた様な美しさを、それこそ限りなく明かすでせう」とありますが、「親切」といふ觀念の紆路に嵌まり込んで具體的な人の心の動きから目をそらしたのでは、我知らず他を思ひやるといふ人の心の美しい姿を感じることはできないでせう。小林秀雄先生は「さういふ姿を感じる能力は誰にでも備はり、さういふ姿を求める心は誰にでもあるのです。たゞ、この能力が、私たちにとつて、どんなに貴

重な能力であるか、又、この能力は、養ひ育てようとしなければ衰弱して了ふことを、知つてゐる人は、少ないのです。」と言つてをられます。先程の投書者は「親切」といふ観念を徒に振り回して、人の心の美しい姿を感じる感受性を衰弱させてゐるのではないでせうか。

しかしこのことは、独りこの投書者だけでの問題ではないと思ふのです。現在の我々の回りにには圧倒的なマスメディアの影響の下、いかに多くの観念が渦巻いてゐることか。戦争・平和・自由・平等・民主的・トレンドイ等々、枚挙に暇がありません。私達は日々さういふ観念に依拠しつつ、ともすれば「物を感じる能力の方を、知らず織らずのうちに、疎かに」してゐると言へないでせうか。そこに短歌創作をお勧めする意味が出て来るのです。

短歌創作上の留意点

※『短歌のすすめ』三十五頁 『日本へ
の回帰第27集』一七八頁参照

では実際に短歌を詠む上での留意点を、数年前に私の学校の一年生が初めて詠んだ短歌を例として説明しながら、更に、短歌を詠む意義についてお話ししたいと思います。

▼須恵高校一年生が入学後最初に詠んだ短歌「四月歓迎遠足短歌詠草抄」

①ラガーマンボールを追って泥まみれトライ挙げろと心一つに(男子)「教師生徒対抗スク

―ルスポーツ紹介試合―

- ② 楽しみのラグビー試合雨降りて傘で見えないああくやしい（女子）
- ③ 楽しそうに大声で歌う先生の親しみ感じる笑いのうず（女子）「体育館での歓迎会」
- ④ 晴れたならお弁当広げ輪になってはずむお喋り楽しんだのに（女子）
- ⑤ 朝早く弁当の支度する母に有り難しやと感謝すべし（女子）
- ⑥ 雨降りて楽しみだった遠足が中止だろうとても残念（男子）

※感動の見つめ方が足りない場合

- ⑦ 学校に払った僕の交通費そのお金も雨に流るる（男子）↓洒落が中心であり感動が詠まれてゐない

- ⑧ 雨降って海の中道やめになり残念だなあ残念だなあ（男子）↓一句言葉が浮かばないため繰り返して埋めている

- ⑨ 雨の中ラグビーを見て思ったはボールを落としたことを笑う者は何事も一生懸命やった事がない者だからであろう（男子）↓最初の感動を見つめると短歌の形になる（傍線部は考へてゐる部分）

- ⑩ 昼過ぎて腹がへりつつ教室へ外ではしとしと春雨の降る（男子）↓心をよく見つめ焦点を

一つに絞る↓一首一文

①前の晩でる坊主つるしては天を見上げて祈り続ける(女子)↓実感と離れた誇張は表現が浮いてしまふ

短歌は感動を表現するものである、といふことに先づご注意ください。合宿を通じての様々な思ひ、印象に残った、また、感銘を受けた事実や場面をよく見詰め素直に表現していただきたいと思ひます。「感動の見詰め方が足りない場合」の例を挙げてをりますので、それを見ながらこの点について説明いたします。

「四月歓迎遠足短歌詠草抄」とは、この生徒達が入学して間もなく、海の中道海浜公園への歓迎遠足が雨で中止になつて校内で歓迎行事が行はれました。私の学校は、スクールスポーツとして男子はラグビー、女子はバスケットに力をいれてをり、歓迎遠足の際公園で教師と生徒の代表がラグビーの試合をして、新入生にスクールスポーツを発表するのが恒例なのですが、この時は体育館での歓迎会と運動場でのラグビーが歓迎行事として行はれたのです。そのことを、私が授業に行つてゐた一年生三クラスの生徒に短歌に詠んでもらひ「四月歓迎遠足短歌詠草」といふ歌集を作りました。

⑦は、雨で歓迎遠足が流れたといふことと、お金が無駄になつて流れたといふことを掛け

た洒落が中心になつてをり、洒落の面白さをねらつてゐるわけで、感動が中心ではありません。ですから、かういふものは短歌とは言はないのです。

⑧の歌は「雨降つて海の中道やめになり残念だなあ」で終はつてしまつたのですね。これでは五七七七七といふ形にならないから、もう一回「残念だなあ」といふ言葉を重ねた。余程強い感動に裏打ちされてゐる場合は言葉を重ねても緊張に満ちた強い思ひの表現になりませんが、さうでなければ弛緩した歌になつてしまふものです。この歌は結句が足りないために四句を繰り返しただけであり、言葉が足りないといふことはやはり自分の感動の見つめ方が足りないといふことです。ささいな心の動きであつてもじつくり見つけてやれば言葉はいろいろ浮かんで来るものです。

⑨は、これは歌の形をしてをりませんが、最初にやはり感動があると思ひます。雨の中で一所懸命先生と生徒がラグビーの試合をしてゐる、その姿に強く感動したのではないでせうか。だから、ボールを落とした選手を笑つてゐるのを見て腹を立てたのでせう。かういふ場合も、やはり最初の感動をもつと見つめてその焦点を絞り、それを言葉にする必要があると思ひます。あとから思ひ浮かんだ理屈を付け加へたから、定型に納まらない表現になつてしまつたのです。

⑩の歌は、上の句「昼過ぎて腹がへりつつ教室へ」と、下の句「外ではしとしと春雨の降

る」では、詠んでゐる対象が分裂してゐる、つまり焦点が二つになつてゐますので、どちらかに焦点を絞つて詠むべきです（このことを、「一首一文…一首には一つの感動の焦点を詠む」と言ひます）。この場合もやはり感動の見つめ方が足りない。足りないからかういふ分裂した歌になるので、例へば春雨の降る様子をもつとよく見つめますと、それだけで立派な一首ができるでせう。

それから⑪ですが、明日の遠足のために今夜の雨が止んで欲しいと思ふ気持ちはよく分かりますが、それにしても「祈り続ける」といふのは⑪を読む限り実感とは離れた誇張した表現であると思はれます。この誇張表現も、気持ちの見つめ方が足りないわけで、感動をよく味はつて的確な言葉を探す煩はしさに、往々にして、安易に誇張した言葉で表現して満足してしまふことがありますので、是非ご注意ください。

①②⑥は、拙いながらもそれぞれその思ひが素直に表現された歌だと思ひます。初心者でも、素直に自分の感動・思ひを表現すれば、人の共感を呼ぶ素晴らしい歌になるのです。

このやうに見て来ますと、最初に「短歌は感動を表現するものである」と申し上げましたが、そのためにはやはりじっくり感動を見つめる忍耐が必要ですね。先程の小林秀雄先生の文章に「それほど、黙つて物を見るといふ事は難しいことです」とありましたが、歌を詠むとは、まさに「黙つて物を見る」修練を積むことあり、それによつて物の美しい姿を感じる能力を

「養ひ育てる」ことに外ならないのではないでせうか。五七五七七の定型は、後に述べますやうにそれが素晴らしい短歌独特の調べを奏でるといふこともありませんが、定型に納めようとすることでの確かな言葉を選ぶ修練を自づから行っているわけで、的確な言葉の適切な組み合わせにより感動の息づく緊張した表現を生み出すのが定型詩短歌の創作であると思ひます。

私の作品から（一月「富山極楽坂スキー研修旅行」詠草抄）

では、次に日頃私自身がどういふふうには短歌を楽しんでゐるか、といふことについて、昨年の私の学校のスキー研修旅行の折に詠んだ歌を紹介させていただきたいと思ひます。

▼第一日目早朝博多駅コンコースにて

① 出発の時近づきて集ひ来る生徒の顔も輝きて見ゆ

特急「雷鳥」にて

② 遙かなる岸は霞みて海かとも見まがふばかりに琵琶湖広がる

③ トンネルを出づるすなはち雪野原眼前にありて歓声起こる

④ 雪原を窓の外に見て生徒らと人生をまた宗教を語りつつ行く

▼第二日目スキー学校入校式

⑤初滑り待ちがてぬがにスキー靴の音響かせて集ふ生徒は

見学の生徒とホテルにて

⑥頂に登りし生徒の我が土産（つと）と差し出す見れば雪の玉かも（リフトにて見学後）

⑦頂は眺めすばらしい短歌（みちかうた）あまた詠まると嬉しげに言ふ

⑧いつの日か病治してスキーしたしと語るを聞けば祈らざらめや

⑨スキーより帰る生徒ら待ちみつづ語るも楽し種々（くさぐさ）のこと

午後に見学の生徒とゲレンデに出る

⑩雪橇に先生と乗りて歓声を挙げつつ生徒は滑り下るも

⑪連なれる山のかなたに富山原陽に照らされて浮かぶがごとし

夜に

⑫スキー板足に取り履くや後ろ様滑り転びぬと語る生徒は

⑬気持ちよげに山の上より滑り来る人に「我も」と思ひし生徒も

⑭耳の辺に風を切りつつ滑りしと目を輝かせ語る生徒も

消灯後

⑮部屋の戸を少し開くれば部屋内は寢息満ちたり疲れたるらし

▼第三日目ゲレンデにて

⑯降り積みし谷の深雪（みゆき）に動物の小さき足跡続きたる見ゆ（リフトにて）

⑰転びてもすぐ起き上がり急斜面恐れず滑る男子生徒ら

⑱「先生！」と声合はせ呼ぶ生徒らに思はず行く手を変へにけるかな

夕食時留学生（豪州）のスピーチ

⑲博多弁のなまり巧みに語りゆく留学生のスピーチ楽し

▼第四日目夜の立食パーティーにて

⑳この旅の朽ちぬ形見と我が詠める歌の数々壇上に詠ず

①の歌は、早朝のガランとした静かな駅に次第に生徒達が集まってくるのですが、いよいよ待ちに待った修学旅行で生徒達の顔も嬉しさうに輝いて見えたといふ歌です。勿論、スキー研修といふことで、嬉しいのは生徒達ばかりではなかつたのですが。

②③④は新大阪駅から特急雷鳥で富山に向かふ時の歌です。④は、ある女子生徒が「実は先生、私、以前ある宗教団体に入ってみたんですよ。」といふことを話に來ましたので、そこで人生や宗教についていろいろな話をしました、そのことを詠みました。

⑤の「待ちがてぬがに」とは、「待ち切れない様子で」といふ意味。いよいよスキー研修が

始まりました。最初の日の午前中、私は宿舍で待機してゐたので、見学の生徒とのやりとりを⑥⑦⑧⑨で詠んでをります。

午後から私もゲレンデに出ました。⑩⑪はその折の歌です。見学の生徒はスキーができないので、体育の先生と一緒に橇に乗せ、私の横をすうつと滑つて行つたのですが、先生と一緒に歓声を挙げて楽しさうに滑つてをりまして、私もとても嬉しく思ひました。

⑫⑬⑭は、最初のスキー研修を終へた生徒がお互ひに話してゐたり、直接私に話してくれた感想を詠みました。⑮の歌の生徒は、実際に滑つたのはほん少しの距離なのですが、風を切つて滑つて行くのを耳の辺りで感じたのがとても印象に残つたやうです。

⑯は、オーストラリヤからの留学生の男子がをりまして、夕食の際にその子が楽しいスピーチをしました、そのことを詠んでをります。

⑳は、研修最後の夜の夕食は立食パーティーでしたが、学年主任の先生から私の短歌をいくつか発表したらどうかと勧められ、壇上で詠じたことを詠みました。

以上のやうに、当時の短歌を読みますと、生徒達と過ごしたスキー研修の思ひ出が次々に蘇つて来て、何とも言へない気持ちになります。短歌は、心の表現手段として大変優れた五七五七七といふ形を持つてをりますので、私は、自分の人生を短歌で表現することで、人生をより深く味はう感受性を養うふと共に、それを自分の生きた証しとしたいと考へてをります。

歌の調べといふこと (古典鑑賞↓歴史の学びの糸口として)

最後に、短歌、特に連作短歌の鑑賞を通して、言葉のもつ調べ・リズムを感じる糸口としていたただきたいといふことをお話しします。

私が学生時代にこのセミナーに参加して、とても良かったと思ひますのは、言葉には調べとかりズムといったものがあるといふことに初めて気付くといふ経験ができたことです。次に挙げてをりますのは、国文研の先輩になられる方で和多山儀平といふ方の連作短歌ですが、どうか、声に出して詠んでいただきたいと思います。

▼黒の瀬戸 和多山儀平 (昭和十九年戦死 『短歌のすすめ』二五四頁)

黒の瀬戸の名に負ふ速潮突出でし岬をめぐり空に散るかも
流れ速きうしほ行き交ひたちまちに渦潮まきて船呑まんとす
目ざす方たちまち失ひ吾がのれる船傾けりうしほけぶるに
つきすすむ発動機船の舳をどり波間に沈み影かすれゆく
人皆のおびゆるまでに荒れ狂ふ此の速き瀬戸いかにかこえむ

船長室に舵輪握りて黙しつづけて見守るたくまじき老人
幾年を海に鍛へしその人の潮焼けし頬よするどきまなこよ
かへりみれば三笠の村の渚はも波間波間に見えかくれする
隼人の薩摩の瀬戸の名に負へる速潮こえて吾は旅ゆく

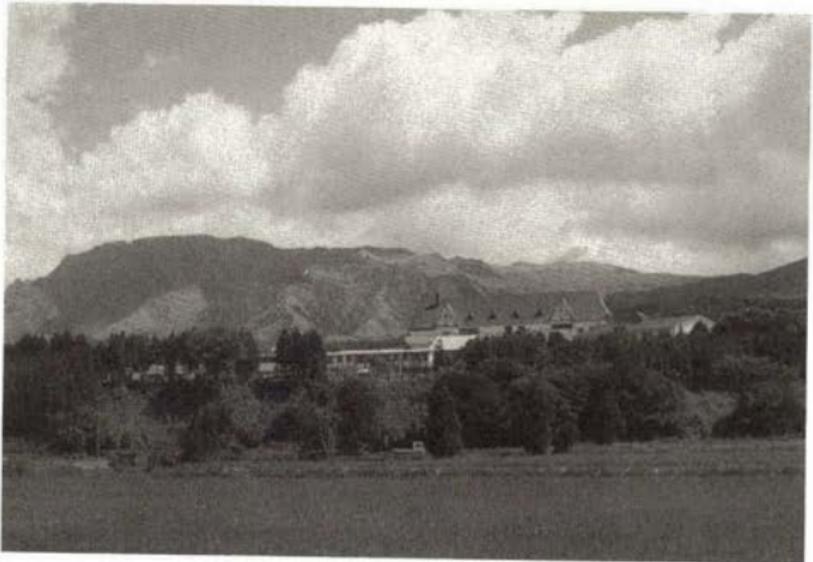
いかがでせうか。声に出して詠んでいきますと、何とも言へない緊張した調べが、五七五七七のリズムに乗つてうねりのやうに伝はつて来ませんか。その調べがそのまま和田山さんの緊張した生そのものを彷彿とさせます。もしさういふものが少しでも感じられれば、小林秀雄先生の文章に「花の姿や色の美しい感じを、そのまゝ、持ち続け、花を黙つて見續けてみれば、花は諸君に、嘗て見た事もなかつた様な美しさを、それこそ限りなく明かすでせう。」とありまじやうに、是非その感じをたいせつにしていただきたいのです。さうすること、次第により豊かに感じることができるやうになる筈です。

歴史を学ぶといふことも、古典をその調べやリズムに注意して味はひ、その時代の人々の心を感じ取るところに本当の喜びがあるのでないでせうか。短歌を詠み、また鑑賞すること、美しい姿に感じる心を磨き、また言葉に表現された人々の深い思ひに触れるといふ豊かな心の世界を是非皆さんも経験していただきたいと思ひます。

創作短歌全体批評

日商岩井㈱大阪エネルギー部部長

澤部 壽 孫



阿蘇外輪に囲まれた宿泊地

はじめに

批評と添削

をはりに

はじめに

皆さん、今晚は！ 昨日、皆さんが草千里で創作なさった短歌を、国文研の齡とつた先生方が選歌し、国文研の若い世代や事務局の方々がほとんど徹夜で、ガリを切り、印刷して、出来上がったのがこの歌稿です。歌稿には各人最低一首、全員の短歌が掲載されてみて、総数は四百十九首です。短歌は誤字を訂正した以外、仮名づかひなど全て原文のまま掲載されてゐます。初めての方もいらっしやると思ひますが得難い経験をなさいました。短歌全体批評は、皆さんの短歌にケチをつけるとか、高いところからみて物を言ふことではありません。「よし、自分もぜひ短歌を詠んでみよう」と皆さんに思っていたきたいのが主旨です。ただ登壇した以上何か言はないといけませんから、歌を選ばれた方はお気の毒ですが（笑ひ）、厳しいことを言はれたとしても、愛のムチだと思つて下さい。

批評と添削

台風でダイヤは乱れおあわていつ着くのやら夏合宿

この合宿の直前に襲った台風に遭遇した作者が、合宿に間に合ひたいものだと、あわててゐる様子がよく出てゐます。皆さんも同じ体験をなさったわけで、共感される人も多いかと思ひます。思ひが素直に云はつてくる良い歌です。ただ「夏合宿」では字足らずゆゑリズムが狂ひます。「夏の合宿」とした方が良いでしょう。字余りは良いとされてゐます。

(添削後) 台風でダイヤ乱れておほあわていつ着くのやら夏の合宿

うまかつたきのうの肉を思ひだし牛をみる目も馬をみる目も (一同爆笑)

この歌をよんで皆さんはお笑ひになりましたが、牛や馬を食欲の対象としかみることが出来ないのは悲しいことです。私達の祖先は、牛や馬あるいは生きとし生けるものの生命にまで、思いを馳せてきました。牛や馬を食してその犠牲のうへで私達は生きてゐます。生きとし生けるものの生命について、もう少し思ひを馳せて頂けたらと思ひます。また「きのう」は「きのふ」、「思ひだし」は「思ひだし」と歴史的仮名づかひを用ゐます。

草千里の壮大な地の中にあるとんぼや人のなんと小さき

先づ、「壮大な」といふ言葉で大きっぱに把握した為に、大自然にふれた感動が直接伝はつて来ないので。大自然に比べ自分はいかに小さいかを感じてをられる気持は分かりますが、

草千里の野原を人やとんぼと比較して、草千里の方が大きいといふ当り前のことを詠んでみるとうけとられます。何に自分の心が動いたのか、短歌相互批判の時に、ご自分のお気持を皆さんに披露され皆さんで直し合ったら良い歌になるのではないでせうか。



八月八日午後八時半合宿所到着
いらっしやいといと温かく迎へます師
の御姿に疲れいやさる

何の説明も不要で、そのまま私達の

心に入ってきましたね。首を長くして待ってをられた先生と、一生懸命駆けつけてきた作者との心の交流が直に伝はってきます。

山の背に夏の草はむ親子馬故郷に残した父母思ふ

草千里で親馬のあとを慕って歩む子馬を見て、作者が、お父さん、お母さんを偲んだ良い歌です。ただし「山の背に」は山の頂上の部分を意味しますので正確ではありません。

(添削後) 親子そろひ夏の草食む馬を見て故郷にいます父母思ふ

我が思ひ伝ふる友の現はれし今日といふ日は忘れがたしや

合宿も余すところあと二日、合宿の三日目になって、自分の思ひを本当に聞いてくれる友達にめぐり会へた、今日といふ日は何とも忘れ難い日だと云ふ感激でせう。まさに合宿の目指すところです。但し「忘れがたしや」の「や」は「も」にしたほうが良いでせう。

（添削後）我が思ひ伝はる友の現はれし今日といふ日は忘れがたしも

仲間らと歌を詠まむと黙しけるこの一時を忘るまじと思ふ

草千里で皆真剣に短歌を作ってる。その一瞬の光景が目に見えるやうです。
「仲間ら」は「友らみな」に変へたらいかげうか。

高原の風に吹かれてゆったりと寝ころぶわれは空っぽの心

「空っぽの心」といふ表現が気になりますね。草千里で寝ころんで安らいでゐる、無心であるといふ意味だと思ひますが。多分「寝ころぶわれは」に続く言葉を探してゐて、提出期限が迫り、切羽詰まって、「空っぽの心」としたのではないでせうか。（笑ひ）。

（添削後）高原の風に吹かれてゆったりと寝ころびをれば心安らぐ

草千里見わたすかぎり草色のうしのおいと阿蘇のふんえん

草千里の見渡すかぎりの草色、牛の匂ひ、阿蘇の噴煙、三つの題材を一ぺんに作者は詠みたいですね。欲張りすぎてゐます。(笑ひ)短歌は一首一文、すなはち感動の中心を定めてそこに心を集中することが大切です。どうぞ作り直してみてください。

息切らし丘を登れば阿蘇平野立ちすくむ我に風吹けり

「立ちすくむ」は「息をのむ」とし、「風吹けり」は別の歌にしたほうが良いでせう。

(添削後) 阿蘇平野広がる見えて息をのむ友らと丘を登りきたれば

中岳の火口いづこと見渡せば白き煙が私をにらむ

「煙が私をにらむ」といふのは他人にはよく分かりません(笑ひ)。班別の短歌相互批評の時間にご自分の気持を述べ、他人にも分かる言葉を皆さんと一緒に考へてみて下さい。

風そよぐ丘に登りて眺むれば白き煙の静かに上がれり

同じ情景の歌ですが、素直な気持がそのまま表現され、誰にでもわかる良い歌です。

大阿蘇の峰よりわきたる白雲の中より聞こゆひぐらしの声

はるか遠くの白雲の中からひぐらしの声が聞こえてくるといふ表現は昨日の情景には当てはまらず、正確ではありません。白雲が湧いてゐる情景と、ひぐらしの声が聞こえる情景を別々の歌にされたら良いと思ひます。

ふと耳をすませば遠き林よりひぐらしの鳴く音の聞こゆる

前の歌の「ひぐらしの声」と同じ情景がひぐらしの声に焦点を絞って一息に歌はれてゐます。ただ「ひぐらしの鳴く音」は「ひぐらしの鳴く声」になさったらと思ひます。

（添削後）ふと耳をすませば遠き林よりひぐらしの鳴く声の聞こゆる

岩肌に根張り出でたる草の芽のしがみつきたるそのひたむきさ

草がひたむきに生きようとしてゐる姿に感動された内容は良いのですが、分かりにくい歌ですね。根が張り出してゐるのと、草の芽がしがみついてゐるのと両方の主体が草の芽です。まぎらしい重複した表現は避けた方が良いと思ひます。

(添削後) 岩肌いのちに根張り生ひたる荒草のひたむきな生命いのちに心打たるる

台風のため動かない新幹線の中で

いつでるか分からぬ電車の中でも座席合せて友らと語らふ

情景が目に浮かんでくる様な歌ですが「でも」は「にゐて」とされた方が良いでしょう。

次に女子班の皆さんが作られた短歌は、概して繊細な細やかさの感じられる良い歌が多く、日本の将来は大丈夫であると思ひました。良いお母さんには是非なつてください。

佐久間艇長の遺言を読み

死を前に努め果たせし先人の姿学びて心ふるへる

○

輪になって思ふ心を語り合ふ友を得たことうれしく思ふ

いづれの歌も思ひがこもってるていい歌です。二首目の「輪になって」の「なって」は口語ですから「輪になりて」と直してください。

友人と草原に腰を下ろしてひぐらしの声じつと聞き入る

情景が目には浮かぶいい歌ですが、五七五七七になってをりませんので直してみます。

（添削後）友人と草原の上に腰おろしひぐらしの声にじつと聞き入る

見渡せば大きく広がる山々のような心を常に持ちたし

気持はよく分かる気がしますが、「山々のような心を」といふ表現が不正確です。おほらか、全てを包み込む、慈しみ深いとかいろいろ含んでるのでせうか。具体的にどうお感じになられたかを詠まれたら、良い歌になると思ひます。「よう」は「やう」ですね。

風の中ボール投げあう子供らの姿に我の心もはずむ

良い歌です。「投げあう」は「投げあふ」、「心もはずむ」は「心もはずむ」です。

今年また老驅ひつきげ若きらと阿蘇の麓に学びてうれし

甚だ借越ですが「学びてうれし」は「学ぶがうれし」とされたらいかがでせうか。

雑誌の広告を見て昨年の合宿に参加され、今年もまた参加された社会人班のお方の歌です。六十五歳の方が、学問の念止み難くはるばる北海道から参加されてをられるのです。

事務局の高校生達および写真班の方も、仕事をしながら、短歌を創作してくれました。

青々と高くひろがる阿蘇山のふもとにそよぐ涼しげな風

○ 情熱を強めたぎらせはるばると出現したる若者二百（爆笑）

情景が素直に読まれてをり、また皆さんの後輩である高校生が、あなた方を情熱にあふれた若者であると見てくれてゐる。嬉しいでせう。この期待にぜひ応へてください。

次にこの合宿にお寄せいただいたお歌を紹介させていただきます。参加されなくても心一つにこの合宿を思っていていらっしゃる方々のおもひが伝はつて来ます。

思はざる嵐つどに集つどひいかならむことなからむを祈るはるかに
（武蔵野・夜久正雄）

○ 台風を衝いて集ひし若き等に語りつがれむ「日本のいのち」（北九州・森田維佐男）

ここで国民文化研究会の皆様のお歌を紹介いたします。最初は折田豊生さんの歌です。

雨風の荒れにしきのふを思ふにもここだの友を迎へしうれしき

この集ひ実り多かれもろともに学びつ語りつ心つくして

折田さんは、この阿蘇合宿の運営委員長として、昨年厚木合宿の直後から合宿開催のために寝食を忘れて献身的な奉仕をしつづけてこられました。台風の中を、ここだの（多くの）友がよくぞ来てくれた、心からの嬉しさが伝はってきます。一年間の苦勞そして深い思ひが歌に凝縮されてみると感じさせられます。次は白濱裕さんの歌です。

開会するとき近づくも窓辺打つ風雨いよいよ繁くなりゆく
つつがなき旅なれかしと念じつつひたすら電話の連絡を待つ
はからずも数多あまたの友の集ひきて合宿開かるありがたきかな

白濱さんは、折田運営委員長の補佐役として、折田さんと苦勞をともにして来られた方です。心のこもった歌です。最後に小田村寅二郎先生（理事長）のお歌を紹介しませう。

合宿第一日（八月八日）台風十号に際会して

吹き荒るる嵐の音はすさまじくすべての交通路は遮断せりとふさはあれど夜更くるまでに集ひ来し友らの数の増しゆくがうれし先き逝きし友らのみたまのみ守りを現しく感じぬこの開会に

「先き逝きし友ら」とは、瀬上安正先生と加藤敏治先生です。お二人とも生前、熊本に住みになり、この合宿こそ日本の礎を築く力となることを深く信じ、合宿の開催に献身された方々です。有り難いことに、台風にもかかはらず皆さんが続々と集って来られた。ひとへにお二人の御霊の守りがあったからであるといふ大変に思ひのこもった歌です。

を は り に

皆さんがお持ちの『短歌のすすめ』の「はしがき」に小田村寅二郎先生がお書きになってみます様に、昔から短歌の世界は平等なのです。身分、年齢、職業、能力による差が一切ない、お年寄りも若い人も偉い人、さうでない人、誰もが心を自由に通はせ合へるのが短歌の素晴らしさなのです。万葉集には天皇から名もなき民まで多くの日本人の歌が平等に掲載さ

れてをります。私達の祖先は短歌のことを「しきしまの道」と呼んで非常に大切にしてきました。短歌は、他人と心を通はせ合つて生きるために、また自分の心をつめる修業の道として、祖先に欠かせない存在だったので。

歴代の天皇、防人、戦国の武将、源実朝、明治維新の志士、正岡子規、大東亜戦争で亡くなられた方々、その他名もなき多くの人達の短歌が遺されてゐます。日本の歴史を知るためにも、短歌に是非親しんで頂きたいと思ひます。

万葉集の防人の歌を読めば、その頃の若者達の心がひしひしと伝はつて来ます。大学生が短歌は分からない、祖先の遺した言葉も分からない、となると、日本の伝統とか、文化とか偉さうなことは言へないのではないでせうか。短歌は趣味でやるものだから、専門歌人に任せてあげば良いとかいふものではないのです。短歌の歴史的意義については戦後教へられてをりません。私自身、このことを、この合宿で教はり、今では短歌は私の人生になくてはならないものになつてゐます。

感性が非常に豊かな大学時代に、短歌に親しみ古典を読んで下さい。先人の心にふれれば心は活き活きします。心を働かせる学問をして、身の周りに細やかな心遣ひのできる人になつて下さい。家族、友人等に歌を送らうとするのが先づ歌を詠む「コツ」です。

拙い私の話をご静聴頂き、まことに有り難うございました。

■ 青年の言葉

自分を知るといふこと

タマボリ株式会社勤務

吉きつ

川かわ

理みち

夫お



合宿の朝

タマポリ株式会社と申しまして、例を上げますと、インスタントラーメンに、粉末や液体のスープが入ってをりますが、それを包装してゐる材料を製造したり加工してゐる業種に携はってをります。

大学の一年のときに初めてこの合宿に参加して以来、約十年が過ぎました。その間、合宿を機会に、先生、先輩、同輩、そして後輩と、付き合いをもたせて頂いてをります。その中で、考へてきたことの一端をお話したいと思ひます。

学生の頃、皆さんもさうかもしれませんが、自分はいったいどう生きれば良いか、いったい自分はどういふ人間なんだらうかと、漠然とした問ひではありますが、非常に大切な問ひを發し始め、一年、二年、三年と学年が進むにつれて徐々に漠然としたものが具体化され、卒業後もその具体的な課題に取り組む事を私なりに続けてをります。

では、いったいどういふ具体的なものに取組んできたか、小林秀雄さんの言葉に迫りながらお話しします。皆さんは、歴史といふ言葉を耳にされると、どんな印象をお持ちになるでせうか。試験の為の暗記や、事実関係の把握といふことに終始し、人生とは全然かかはりのない所で扱ってきたといふのが歴史の印象だったのではないでせうか。

ところが、小林秀雄さんの歴史観は全く違った取り組み方をされてをります。昭和四十五年に雲仙で合宿教室が行なはれ、小林さんが講議をされました。その中で歴史家とは過去を

研究するものではなく、過去を蘇らせる人なのだと言はれ、「本当の歴史家の書いたものは、大変魅力的でしょ。何故魅力があるかっていうと、あれはその歴史家の現在の内に、過ぎ去つてもうなくなつた者が生き返つているからなんです。そこに生きてゐるから、生きたまま書くから僕等を捉えるんです。」（新潮 昭和五十八年四月臨時増刊号）と指摘してをられます。この蘇へるといふ言葉には小林さんの深い思ひが込められてゐる様に感じられます。さらにこの言葉について織田信長を引きあひに出され、次のやうに述べてをられます。

「織田信長を振り返つてみたまえな。織田信長つてやつての性格がだな、「信長公記」という本を読めば、君、わかるだろう。君が理解すれば、信長つてのは、こんなやつか、と思つて、君がもし興味を抱けば、興味を抱いてゐることが分かるだろう。そうすりゃ、イヤな奴と思ふかもしれない、イヤな奴だと思へば、君は、信長を嫌うものが自分の中にあるなと思ふな。それは、君、自分を知ることじゃないか。」中略 「自己を知るといふことは、君の精神を豊富にすることであつて、君は、自分が、マッチのような男だなんてことを知るんじゃないんだよ。」

信長に引かれるものが、自分の中に感じられたら、引かれてゆくものが自分の中にあることが発見できる。それが自分を知ることになると言はれてゐるのです。

また自己を知ること「君は自分がマッチのような男だなんてことを知るんじゃないんだ



よ」と言はれましたが、歴史上の人物に比べて自分はどんなに小さいのかといふやうに反省させられて気持ち小さくなることではない。自分が歴史上の人物に心を向ける、そして跳ね返ってきた手応へに、自分の存在を、自分自身を感じる事ができると言はれてゐる様に思へます。

私も、学生の時から輪読会で勉強してきましたが、時として、その著者が生きた時代に向かつて自分の心がポーンと飛んで行くやうな、昔の人の声が、肉声が聞こへてくるやうな、さういふ感動に駆られることがあるんです。これが自分にとって生きた学問だと思へる時があるのです。歴史は、知識として外から与へられるのではなく、自分自身の心の内に元々あって、自分でそれに火をともしることが大切だと思ふのです。

それから三十五班の班付をされていらっしやる加

藤善之さんがお書きになった『浮上する「大和心」』といふ本があります。徳間書店から出版されてをります。この本の冒頭に「大和心」が現代女性の中にも生き続けてゐる例としてこんな話を紹介されてゐます。

それは、日本が高度成長を続ける頃の話です。しばしば日本へ出かけ、きまつて新幹線で東京から大阪へ行くロンドン商工会議所の副会頭がロンドンのある講演会でこんな話をするのです。

「あるとき私は、ふと、自分がいつもグリーン車の同じ座席に座っていることに気づきました。不思議に思つて本社に電話してみると、担当の課長が『切符の手配は係の女性がするので代つてみましょう』と言います。ややあつて、電話に出た二十二歳になるといふ若い女性は、私にこう言うのです。『お気づきになりましたか？ 貴方は会社にとって大切な外国のお客さんです。ですが私のような一社員には大したことは出来ません。私に出来ることは、せめて富士山のよく見える一番良い席の切符をとつてさしあげるくらいのことでした。』このような思いもなかった返事がかえつてきたのです。」

何か義務感に駆られてやったことではなく、本当に心の優しい、ほのぼのとした自然な姿が感じられます。謙虚な気持ちで仕事をされてゐるのだなと思へます。またかうした電話をくれたお客さんがゐたということで、この女性もさぞ嬉しかったことでせう。

そして私がこの文章を読んで心に響くものがあるといふことは、日本人としての私自身を知る糸口ではないかと思へるのです。

また加藤さんは、学校教育、とりわけ大学では、「大和心」をなくする学問が集中的になされ、それを趣味程度のものとしてしか扱はなくなってしまったことを指摘されます。そして、「日本人らしさをどこで教えられたかを思い出してみるがよい。また、自分たちが子供に、いつ、どこで、どの程度それを教えたのか、また自分に教える力があつたかどうかも考えてみれば、判然とするだろう。」と文章を続けられます。加藤さんが家庭の中で、会社の中で、社会の中で、大和心を持った日本人らしさを、周りの人達に伝へようと努力されてこられたその激しい姿が、この文章からは感じられてなりません。まさに人とのぶつかり合ひの中において鍛へていかれたお姿が偲ばれます。私は独身で生活の苦勞もろくにしている身ではありませんが、自分自身のこれからの生き方といふものが問はれてゐる様に感じられてなりませんでした。

最近、私の職場に二十代の中途採用者が三人入ってきました。彼らと仕事上のことで、打々発止とやり合ふことが、私にはまだできませんし、また、社内、社外を問はず上司が部下を叱りつけるやうなことも少ないように思へます。やはりぶつかり合ひといふものがなければ恐らく信頼関係といふものも育たないのでせうし、他に対する反応がなければ本当の自分の

姿も見えてこないのではないでせうか。

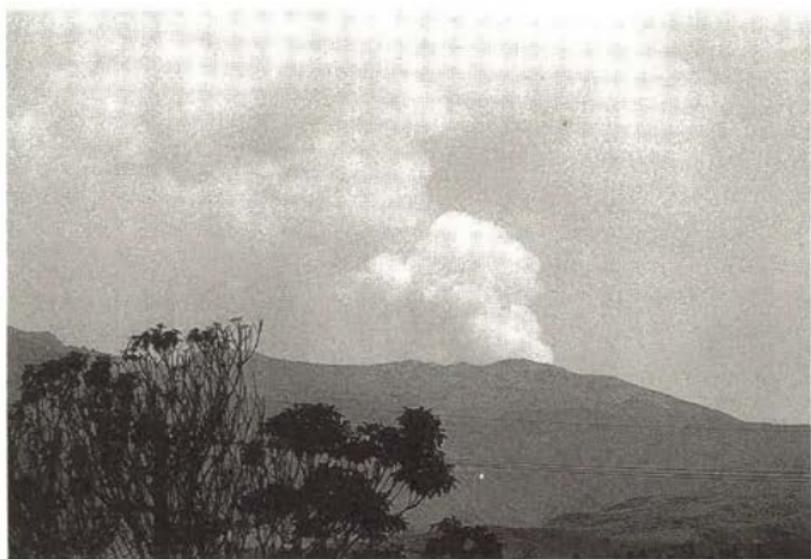
職場にせよ、あるいは合宿に集った仲間にも、心にピンピン響いてくるやうな付き合いがなければ、自分の生き様、生きている証は、はっきり見えてこないと思つてをります。

拙い話ではありましたが、これで終はります。

歴史と人生

福岡県立太宰府高等学校教諭

黒 岩 真 一



ホテルの窓から阿蘇を望む

現在、私は高校で日本史を担当してゐますが、今日はその授業を通して近頃考へて来たことの一端をお話したいと思ひます。

今年の一月のことでありませう。私どもの学校も他校と同じやうに、三年生を進学決定者と未決定者に分けて授業しました。進路が既に決まった生徒達には、とにかく何をやっても構はない。どうしようかと考へた末、これまでの授業で十分にできなかった人物史をやつてみることにしました。

ところで人物史をどのやうな形で展開していくかですが、さうだ和歌を用ひよう、和歌にしたためられた歴史上の人物の心に迫つてみようと思ひまして、比較的生徒に馴染みの深い人物中心にプリントを使つて行つてまゐりました。

最初、通常とまったく違つた授業なものですから、生徒が戸惑ふのではないかといふ危惧がありました。けれども授業の度に求めた生徒の感想文を読むと、こと、この授業に関しましては、ほとんどの生徒が予想外の興味を示してくれてゐたのでした。最後の授業を終へての感想として、ある生徒はかう言つてゐます。「こんな日本史の授業はとてもいいと思ひました。和歌を通すとその人物が何百年も前に生きた人でも、その人の雰囲気や考へてゐることが伝わつてきて、一人一人強い印象が残りました。普通の日本史の授業もこんなだったらどんなに成績がよくなるだらうな。この時期の私にとって、とっても充実した時間でした」と。

では、どのやうな授業になつたか少しばかり触れてみたいと思ひます。古代に始まり明治時代まで進んだあと、最後の一回をどうしようかといふことで思ひ浮かびましたのが、昭和天皇のことでした。あの時ずいぶんとマスコミが陛下を追悼する番組を編成しました。その中で天皇の戦争責任問題が再び論じられたことを覚えてゐます。為にする戦争責任論といふのはこれはどうしやうもないのですが、陛下の気持ちも知らないで、何となくさういふことかなあと思つてゐる人が結構ゐたのではないかと思ふのです。

陛下が崩御なされた時、生徒達はちやうど中学校の二年生ではなかつたかと思はれますが、果たしてどう受け止めてゐるか案じられました。ですから、何としても、当時、陛下がどういふ気持ちでをられたかを知つてほしいといふこともありまして、陛下の御製も、その頃のものを選びました。

たくさんのお歌の中から約四〇首ぐらゐ用意いたしました。勿論とても一時間の授業でふれることはできません。ですから、これはといふ御製について若干の解説をつけながら、生徒と一緒に読んでいったわけです。

社頭の寒梅

風さむきしもよの月に世を祈るひろまへ清くうめかをるなり

代々の天皇が代表されて、神々の前に私ども国民の幸せ、あるいはこの国のたひらぎを常々

栗原勤路



祈ってこられたことは前々から授業中に話してゐましたけれども、いま一度話をしてこの和歌を読みました。この御製から非常に緊張した調べを感じます。陛下が一心に祈られてゐるお姿がはつきりと偲ばれてきます。大変風寒く、霜が白く降りてゐて月が皓々と冴え渡つてゐる。さういふ早朝に、陛下が神殿で一生涯命神々に祈られてゐる。祈り終はられて我に返られたときに、梅がふーと香つてきたといふお歌だらうと思ふのです。

この歌が詠まれましたのが昭和二十年です。愈々この年にわが国は敗戦を迎へるわけですが、この当時、南方の戦場では次々と人々が戦ひ敗れて死んでいった。あるいは北の方でもさうです。国内ではどんどん爆弾が落とされて、家を焼かれ、そして親兄弟を失つて、国民は非常に悲しみ、しかしそれでもちっと耐へてゐる。風雲急を告げて行く当時にあつ

て陛下がどのやうなお気持ちでをられたか。それが伝はつて来る様です。

それから、今朝の御講義の中で、終戦時に誠に異例ではありましたが、陛下のご決断がもとになりまして終戦を迎へることになったといふことを村松先生がおっしゃられました。その時の事情を生徒に少しく話しまして、次の数首の御製と一緒に読んだいっただけです。

終戦時の御製

爆撃にたふれゆく民のうへをおもひいくさとめけり身はいかならむとも

身はいかにもいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

國がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり

折にふれて

海の外の陸に小島にのこる民の上安かれとただいのるなり

かうして、詳しく触れることができない歌は、とにかく読むだけといふ形にして進めて行きました。この授業が終りましたあと、生徒達の感想に目を通しましたところ、このやうな感想を寄せてゐました。

「私の心にいちばん残つたのは昭和天皇です。和歌を読んで、ご自分が苦しい立場にありませんが、国民思われる姿が伝わってくるようでした」

もう一人、

「特に印象深かった人物として名前を挙げるなら昭和天皇でしょう。なぜなら、それまで自分にとっての天皇は、ただ国民に愛想を振りまくだけにすぎない存在でした。和歌を通じて昭和天皇は本当に国民思いの人だなあと思いました。常に国民の幸せ、そして自然の素晴らしさを思っているこの心の豊かさは想像もつかないものでした。この和歌に限って、嘘偽りはないのですから、この天皇の素晴らしさが自分の誤解を解きました」

と、かう書いてゐるのです。特に最後の「この和歌に限って嘘偽りはないのですから、この天皇の素晴らしさが自分の誤解を解きました」の部分、この生徒は自分にとって天皇は国民に愛想を振りまくだけの存在であったと言ってみますけれども、それが変はった。

私はかういふ生徒達の感想を読みまして、胸の高鳴るのを覚えました。このやうに陛下の真心がこれほど生徒達の心にストリートに伝はってくるなんて「これはすごいなあ」と思っただんですね。私は今回、かういふ授業を試みてみて、予想以上の反響に出会って心から嬉しくなったものでした。

ところで、なぜ生徒たちは今回このやうに感動したのだらう、面白く感じてくれたのだらう。また、私の普段の授業で足りなかったのは何だったのであらうかと色々書を読み思ひを巡らしました。そのやうな時、小林秀雄先生の『歴史と文学』の中の次の文章が目にとまり

ました。

「学生の心といふものは、人生の機微に対しては、先生の考へてゐるより、遙かに鋭敏なものである。人生の機微にふれて感動しようと思つて待つてゐる学生の若々しい心を出来るだけ尊重しようと思つて務める事だ。」

「なるほど」と私は思ひました。例へば源実朝がゐます。実朝は將軍であります、北条一族からその実権を奪はれてゐる。しかし、大雨が降つて民、百姓が嘆いてゐると、実朝は、將軍である自分は民を救はなくてはいけないといふことで、

ときによりすぐれば民の嘆きなり八代龍王雨やめたまへ

といふ歌を詠んでゐるのです。さういふ歌を読んだ生徒が、そこで実朝の別な姿を感じてゐる。あるいは例へば正岡子規。枕許にかかつてゐる花瓶の花、庭先に咲いてゐる花を彼は歌に詠んでゐる。それまで正岡子規といふのは、「和歌詠み」といふイメージから生徒は弱い人のやうに思つてゐた。ところが実は、子規が脊推カリエスといふ不治の病に苦しみながら激痛に耐へて、これらの歌を詠んでいったのだ、あるいは新聞に激しく論評を續けていったのだといふことを知つた生徒はそこに非常に感動した。さういふことを感想文に書いてくれます。生徒たちは、かういつた人生の機微といふものに触れたとき面白いと感じたのでせう。それから次の文章です。

「歴史は、眼をうつろにしてみさへすれば、誰にも見はるかす事が出来る、平均にならされ、整然と区別（けじめ）のついた平野の様なものではない（中略）天稟の詩人の直覚力を持たぬ人は、常に努力して己の鏡を磨かなければ、本当の姿は決して見えて来ない、さういふものであります。だからこそ、歴史は古典であり、鑑なのである」

私はこれまで日本といふ国がどういふ国かを、如何に判りやすく教へるかに気をとられすぎてゐた。また、膨大な事項をいかに整理したら良いかに腐心しすぎてゐた。これは大学受験といふものがありますから、知らずしらずにさうしたところばかりに工夫してをつたといふ事に気づいたので。なるほど思つたのです。

やはり、初心に返つて、己の鏡を磨きつゝ、自らが歌や古典を読んで味はつた瑞々しい感動こそを授業の核に据ゑるべきだ。さういふ様な授業を行つていかねばだめだと強く思ひました。

一年の歩み

大正大學文學部哲學科四年

岡 山 英 一



阿蘇に向かふ

平成三年夏の厚木での合宿教室から、各地區、各大學へと戻った我々は、合宿で巡り合った新しい友らと共に、新たな活動を展開した。

まづ東京地區では、亜細亜大、中央大、早稲田大でそれぞれ輪讀會が営まれ、それと並行して學生の據點である正大寮を中心に、各大學合同で明治の時代精神に焦點を當てた勉強會と合宿、及び『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の通讀會が行はれた。關西地區では、學生と若手OB一體となつて、『日本への回歸』のバックナンバー、橋本左内『啓發録』などの輪讀が行はれた。九州地區では、熊本大生を中心とした小林秀雄氏の『考へるヒント』の輪讀會などが開かれた。各地區、各大學で主催された合宿は別表の通りである。また、合宿教室参加者の便りを基に、「ふるさと通信」が發刊され、全國の學生間での相互交流が圖られた。

かうした半年間の研鑽の集大成として、年明けの平成四年三月十八日から二十一日(女子は三月十九日〜二十一日)にかけて、神奈川縣三浦半島の城ヶ島ユースホステルにて、全國學生春季合宿が行はれた。ここにその内容の一部を記して置きたい。(合宿の詳細な日程については別表を参照されたい)

まづ、近年異例の試みではあつたが、合宿に先立つて、普段の生活の中で思つてゐる事(例へば最近讀んだ本、友達との付き合ひ、時事問題の所感、將來どのやうに生きていくべきかといふ事等)について、各自が文章に纏めたものを提出し、合宿の前半は、その中から皆で考へたい問

題について討論を行ふ事とした。合宿當日、開會式、自己紹介・所懐表明の後、早稻田大學第一文學部四年生の大島伸一君、中央大學文學部二年生の草野直樹君が、先の「問題提起文」に基づいて合宿導入発表を行なつた。兩君の提示した「自分は將來どのやうに生きて行きたいか」「それには今どういふ勉強をして行くべきであらうか」といふ問題を中心に、班別討論が行はれた。

續いて二日目には、亜細亞大學經營學部四年生の佐藤順一郎君が發表した。佐藤君は、本音で付き合ふといふのは、一面で付き合ふ事ではなく、言はば自分と相手との全部で付き合ふ事でなければならぬ、しかし、果して我々はさういふ付き合ひが出来てゐるだらうか、何か窮屈な付き合ひに陥つてはゐないだらうか、と問題提起を行つた。

午後には、(社)國民文化研究會常務理事の長内俊平先生に御講義を御願ひした。先生は、人の真心は「よくもあしくもうまれつきたるままの心をいふ」といふ本居宣長の言葉を引かれて、昨年から皆で討論を重ねてゐるが、諸君らは自分の實力以上の自分を人に見せようとしてゐるから駄目なんだ、友情を知つてゐない者が人に友情を傳へられる筈がないぢやないか、と厳しく指摘された。そして、合宿の後半に輪讀する豫定であつた『古事記』に觸れられて、『古事記』に現はれてゐるやうな「怒り」「嘆き」「慟哭」といった飾らぬ心こそ、我々が取り戻さなければならぬものではないか、古事記の中からさういふ命を感じ取つて、自分の

ありのままを交感できる友を求めて行かうぢやないか、と語られた。「真の友達付き合ひをして行かう」「人生に直結した學問をして行かう」と呼び掛けてきた我々自身が、實際にはぎこちない付き合ひをし、自分の本音から離れた學問をしてゐたのである。一同、長内先生の力強い御言葉に、自分の至らなさを痛感すると共に、又「くよくよせず、頑張って行かう」と勵まされる思ひがした。かくして、素直な気持ちで『古事記』を讀み、決して背伸びする事なく、自分の感じた處を語り合つて行かう、さういふ志が参加者一人一人の中に芽生えたのであった。

佐藤君による『古事記』の成立過程を中心にした導入發表の後、『古事記』「倭建の命の東征」から輪讀が始められた。御父景行天皇の命により、東征に向はれた倭建の命が、直面せる困難に如何に立ち向かはれたか、同行の者や慕ってくる者達とどのやうな心の交流をなされたか、さういふ御心をひたに偲びつつ文章に迫つて行つたのであった。

三日目には、神奈川縣立湘南高校教諭、亜細亜大學非常勤講師の山内健生先生に、『古事記』と現代生活』と題する御講義を御願ひした。先生は、ユダヤ・キリスト教世界では「神人懸隔」が絶對的だが、『古事記』やその他日本の神話を扱つた書物の中では、神と人が晝然と區別されず、同一界、同一次元の下に極く自然に描かれてゐる、そこに日本人の神觀念の特徴があるので、と指摘された。さらに先生は、現在もなほ天皇様は祖先の神々にお仕へ

平成3年度 全国学生春季合宿 日程表(男子班)

	3月18日(月)	3月19日(火)	3月20日(水)	3月21日(木)
7:00		起床	起床	起床
		朝のつどひ	朝のつどひ	朝のつどひ
8:00		朝食	朝食	朝食
9:00		学生発表	班別 古事記輪讀	感想発表 及び 懇談
10:00		全体討論		
11:00		班別討論	レクリエー ション	昼食
12:00		昼食	昼食	
1:00				
2:00		班別討論	山内健生先生 御講義 「古事記と 現代生活」 及び 質疑応答	感想文執筆 及び 短歌創作
3:00	入所	長内俊平先生 御講義		閉会式
4:00	開会式	古事記輪讀 導入発表	短歌創作 及び懇談	
5:00	学生導入発表	班別 古事記輪讀		
6:00				
7:00	夕食 入浴	夕食 入浴	夕食・入浴	
8:00				
9:00	班別討論	班別 古事記輪讀	班別 短歌相互批評	
10:00				
	就寝	就寝	夜のつどひ	

になり、御祀りを續けてをられる、我々の現代生活も一皮剝ぐと神話的なものがどんどん出て来る、我國にはかうした儒佛傳來以前の古いものが、生きた姿で現在まで残つてゐるので、傳統といふものは普段仲々意識されないものだが、譬へて言へば、地震などの豫期せぬ地異天變に際してのビルディングの安定が、そのビルのどれだけ深い所まで基礎工事がしっかりなされてゐるかに基づくやうなもので、我々の今日は正にさういふ永く深い傳統に支へられた處にある、『古事記』はその一つなのです、と語られた。

我々は『古事記』を輪讀しながら、倭建の命はこの時どのやうにお思ひになつたのだらうか、弟橘比賣の命の御氣持ちはいかばかりであつたのだらうか、と思ひを馳せ、御心を偲ぶうちに、自分の心が『古事記』に登場する神々と同じやうに哀しくなつたり、活き々々として來たりするのを感じた。傳統といふものは、偶々残つた一形式ではなく、民族、國家の命が連綿として息づいてゐる事を證明するものであるといふ事を山内先生は語られたが、我々は輪讀を重ねる事によって我々自身の中にその命の一端を見出したのである。そしてさういふ感動に満ちた飾らぬ言葉と言葉を交はし合ふ事によつて、友との共感が生まれて來るといふ事を身を以て知つたのである。我々はここに共感し得る友を見つけたのである。この感動を基にして、お互ひに學問を續けて行かう、自分の偽らざる姿を發見する處から、如何に生くべきかといふ問ひも、より深くなつて行くのではないか、誰もがさういふ燃えるやうな

情熱を胸に抱きながら、三泊四日を共に過ごした合宿地を後にしたのであった。

なほ女子班の方では、(社)國民文化研究會監事の加納祐五先生による「言葉について」と題する御講義を中心に、熱心に研究發表、討論が行はれた。女性が大和言葉を守り續けて來たといふ事、そしてそれを受け継ぎ、後世に傳へて行く使命がある事に氣付かされたといふ、實り多き合宿であつたと聽く。

四月になり、我々は夏の大会宿に向けて、勉強會の主催、新入生の勧誘に勵んだ。「大學に入ったらアルバイト、海外旅行、自動車免許證の取得に、ドラマのやうな戀愛など、好き勝手な事が出来る」といふ風潮に乗つて入學してくる新入生達が一層多くなつてはゐるが、さういふ學生達の中にも、眞摯に物事に立向かつて行きたいと胸に秘めてゐる者は必ずあるのである。その若き情熱をくすぶらせずに、學問に打ち込んでみないか、我々は地道ではあるが、一人一人の學生とさういふ對話を重ね、新たなる友を得て行つたのである。

地區・大學合宿一覽表

主 催	東京地區信和會	關 西 地 區	早稻田大學 積誠會	亜細亞大學 日本文化研究會	亜細亞大學 日本文化研究會
年 月 日	平成3年 11月22日～24日	平成3年 12月21日～22日	平成3年 12月27日～28日	平成4年 2月29日～3月1日	平成4年 5月16日～17日
場 所	神奈川 相模湖 「相模湖ユースホステル」	大阪 四條畷 SEI生駒セミナーハウス	埼玉 西吾野 民宿「瀬戸」	神奈川 厚木 厚木市立「七澤自然教室」	神奈川 相模湖 「相模湖ユースホステル」
参 加 大 學	亜大、千葉大、中大、早大	京都産業大	早大	亜大、大正大	亜大

合宿教室のあらまし

中央大学文学部三年

草野直樹



合宿参加者記念撮影

第三十七回全国学生青年合宿教室は、平成四年八月八日から十二日までの四泊五日、熊本県阿蘇国立公園にある阿蘇の司・ピラパークホテルにおいて開催された。合宿会場は緑豊かなカルテラ草原に位置し、雄大な阿蘇の山々を望んでゐた。合宿二日前には、国民文化研究会会員数名とリーダー学生数名が集合し、合宿の最後の準備を行なった。着々と作業が進められていく中、朝の集ひや慰霊祭の会場となる広場の正面に「さしのぼる朝日のごとくさはやかにもたまほしきころなりけり」との明治天皇御製が大書された幟が掲げられた。予定通り準備は整ひ、開会を待つばかりとなつたが、今夜にも九州に台風が上陸するとの報せが入り、合宿地に向かつてゐる参加者達の安否が気遣はれた。

第一日 (八月八日)

懸念されてゐた台風十号は早朝より九州に上陸し、九州全域の交通機関は途絶、東京と九州間の全空路も止まってしまった。午後二時に予定されてゐた開会式迄に集合できた人数は五十名とあつて、やむなく開会式を翌日に見送ることとなつた。この時点で到着してゐた参加者は四班に構成され、直ちに輪読を行なつた。

△班別研修（輪読）▽

各班に分かれた後、昨年の合宿記録集『日本への回帰』第二十七集の中の福岡県立新宮高校教諭小野吉宣先生の御講話録「教育は難しい、然れど面白い」を輪読した。教育者としての高い理想を掲げ、それを貫かうとする先生の強い意志を感じた。さうしてゐる内に一人、また一人と雨にびしょ濡れになりながらも参加者が到着し、着替へも食事もそこに輪読に加はっていった。班員が一人増えるごとに室内の熱気も高まっていくやうだった。

8月11日(火) (第四日)	8月12日(水) (第五日)
(起床) 朝の集ひ 朝食	(起床) 朝の集ひ 朝食
(講義) 山内健生氏	(合宿を顧みて) 宝辺正久氏 参加者による (全体感想自由発表)
班別研修	感想文執筆及び 第二回短歌創作
	班別懇談
	閉会式
昼食	昼食・解散
(講話) 長内俊平先生	
班別研修	
(創作短歌全体批評) 沢部寿孫氏	
夕食 入浴 休憩	
班別 短歌相互批評	
夜の集ひ	
就床	

合宿教室のあらまし（草野）

第三十七回合宿教室日程表		8月8日(土) (第一日)	8月9日(日) (第二日)	8月10日(月) (第三日)
	6:30		(起床)	(起床)
	7:00		朝の集ひ 朝食	朝の集ひ 朝食
	8:00			
	8:30			
	9:00		(講義) 村松剛先生	(講義) 平川祐弘先生
	10:00		質疑応答	質疑応答
	11:00		班別研修	記念写真撮影
	12:00			班別研修
	12:30			
	1:00		昼食	昼食
	2:00			(短歌創作導入講義) 那須三元氏
	3:00	(打ち合せ)	開会式 オリエンテーション	
4:00	班別研修 〔輪読〕	(合宿導入講義) 八木秀次氏	レクリエーション 〔草千里〕 短歌創作	
5:00		夕食 入浴 休憩		
6:00	夕食 入浴 休憩		夕食 入浴 休憩	
7:00		(青年体験発表) 吉川理夫氏 黒岩真一氏		
8:00	班別研修 〔輪読〕 『日本への回帰』 第27集	(古典講義) 奥富修一氏	(講話) 加納祐五氏	
9:00		班別研修	(慰霊祭説明)	
10:00			慰霊祭 班別懇談	
		就床	就床	

この日の深夜には、二百二十名近い人々が参集し、翌日朝にはさらに数十名が到着しほぼ予定通りの参加人員となった。参加者各位のその熱意には、主催者一同深く感激の他なかった。

最終的な合宿教室参加者の内訳は以下の通りである。

(学生班 五十七大学) 防衛大学校10、拓殖大8、福岡大7、福井工業大6、明治大6、早稲田大6、九州大6、福岡女学院大5、鹿児島大4、亜細亜大3、金沢大3、富山大3、熊本商科大3、宮崎産業経営大3、日本大2、海上保安大学校2、大正大2、法政大2、西南学院大2、熊本大2、金沢工業大2、佐賀大2、九州女子大2、尚綱大2、尚綱短大2、佐賀女子短大2、中村学園大2、東北大1、東京大1、中央大1、明治学院大1、目白女子短大1、日本経済短大1、日本文理大1、帝京大1、上智大1、立正大1、武蔵野女子大1、金沢経済大1、大谷大短大1、京都産業大1、京都外語大1、湘北短大1、東海大1、大阪外語大1、第一工業大1、奈良県立商科大1、淑徳大1、大阪教育大1、九州国際大1、北九州大1、産能短大1、東和短大1、九州造形短大1、長崎県立大1、熊本短大1、グリーンマウンテン大1 計百二十九名(うち女子三十八名)

(社会人班) 会社員・公務員・教員など

計二十九名

（招聘講師） 二名

（国民文化研究会） 八十九名

（事務局） 七名

（写真） 一名

総計 二百五十七名

参加者は合宿申込書のアンケートを基に六名から八名を単位とする班に編成され、事前合宿参加学生の一部及び国民文化研究会会員が班長となった。男子学生は十三箇班、女子学生班は六箇班、社会人班は六箇班に分けられた。

以下に記す合宿教室の流れにおいては、各講師の講義内容については印象を記すに止めた。講義内容の詳細は、本書に掲載されてゐるのでそちらをお読み頂きたい。

第二日（八月九日）

合宿二日目は、当初の日程の通り午前中に前筑波大学教授の村松剛先生の御講義が行なは



れた。村松先生もまた台風の影響でご搭乗予定の飛行機が欠航となることが予想され、ご来場が危ぶまれたが、「私の話を聞かうとして集まってこられる方が、仮に半数にならうとも、私は何としてもそちらにたどり着きます」と言はれ、一時は自由席の列車を乗継ぐ事すらお考へになった。

第一日目夕刻にやうやく飛行機が飛び始めた為、何とか夜遅くに阿蘇入りされたのであった。

△講義▽

村松剛先生には「国際情勢と日本」と題してお話をいただいた。先生はソ連邦の崩壊の意味について深い洞察を示された。さらに中華人民共和国の軍事力の増強の動きなどの事実を詳細且つ具体的に説明され、日本政府が行はんとしてゐる「天皇ご訪中」は、現在の世界情勢から見ても、歴史的な視点から

見ても問題があると危機感をこめて訴へられた。

△班別研修▽

講義が終はると、参加者は班室に戻り、最初の班別研修の時間に入った。講師の訴へられたかったことは何か、各々がどこに感銘を受けたかを中心に討論が進められた。緊張してゐたこともあり、初めのうちは沈黙が続いた班も幾つかあったが、やがて心を開き、真剣に語り合ふやうになつていった。班別研修は講義終了後毎行なはれた。

△開会式▽

午後二時、参加者は会場に整列した。緊張した雰囲気の中、亜細亜大学法学部二年の松田裕幸君の「開会宣言」が響きわたつた。国歌を二度斉唱し、続いて、戦時平時を問はず祖国日本の為に尊い命を捧げられたすべての祖先のみ霊に対し、一分間の黙禱が捧げられた。

続いて主催者を代表して、社団法人国民文化研究会（以下国文研）理事長・元亜細亜大学教授、小田村寅二郎先生が登壇され、「合宿教室は今年で二十七回目となりますが、そのポイントには第一回目から少しも変わってゐません。それは、人生において一番大事な心と心の触れ合ひを修練する場であるといふことです」「大学の違ひや学年差を撤去し、人間として対等

に付き合ひをして、相手の心の動きを感じ取る力を養ってください」と挨拶された。次に参加者を代表して京都産業大学理学部三年の濱地賢太郎が「自分の気持ちを述べるだけではなく、講義をされる先生や班員の心を知るといふ事を大切にして合宿に取り組んでいませう」と参加者に呼びかけた。続くオリエンテーションでは、熊本市役所勤務、折田豊生合宿運営委員長から、合宿の運営体制、諸注意等について説明がなされた。そして「大変厳しい四泊五日になるかもしれませんが、この場に何かをつかむために来たんだといふ気持ちを忘れず、互ひに励ましあつて頑張つていってください」と参加者心得を語られた。最後に福岡市立奈多小学校教諭、是松秀文指揮班長により、細部にわたる注意事項が伝えられ、参加者一同は気持ちを新たにし、その後の日程に取り組んでいった。

△講話▽

合宿導入講義として、東京理科大学非常勤講師、八木秀次先生が「人生と学問―価値相対主義的的人生観からの脱却―」と題して話された。今の大学生は学びの場にみながら学ぶ喜びを知らないといふ現状に鋭く切り込まれ、学生が価値相対主義に浸りきつてゐると指摘された。そして、本当の学問とは何か、人は何を学ぶべきかについて心をこめて語られた。

△青年体験発表▽

初めに、タマポリ株式会社吉川理夫氏が登壇され、氏が学生の頃から抱いてきたといふ「自分はどう生きればいいのか、どういふ人間なのか」といふ問いについて、現在感じてゐることを話された。次いで、福岡県立太宰府高校教諭の黒岩真一氏が登壇され、「授業で歴史上の人物や昭和天皇の御製を取り上げた処、生徒の感動は予想以上に大きかった」と喜びを語られた。

△古典講義▽

東急建設株式会社の奥富修一先生が「松下村塾での学問交流―吉田松陰とその子弟―」と題して話された。先生は長年愛読してこられた松陰について「奥の深い人間的魅力のある人物だ。彼の言葉には若い人に必要なものが全て含まれてゐる」と述べられ、



松陰の文章に浮かび上がってくる松下村塾での学問交流について熱っぽく語られた。

第三日（八月十日）

〈講義〉

三日目はまづ、前東京大学教授・福岡女学院大学教授の平川祐弘先生に「『ビルマの豎琴』再考―竹山道雄が後世に伝へるメッセーじ―」と題してお話をいただいた。先生は、「文学に現れた戦争」をテーマとしてお話を進められ、バイフォーカルアプローチ、即ち米英側から見た戦争観と日本側から見た戦争観を突き合はせてみるといふ方法を提唱され、国際交流の為の道すぢを示された。そして具体的に詩や映画等の例を挙げ、日本人と英国人の戦争の見方を違ひを説明された。

〈短歌導入講義・レクリエーション〉

午後からは、福岡県立須恵高等学校教諭の那須三元先生が短歌創作の手引きとして講義された。先生は歌を初めて作る人へ「素直な感動に基づいてるれば、人の心を打つ素晴らしい歌ができる」と励まされ、合宿で全員が短歌を詠む意義について「自分の感動をよく見つけ、

それを友達に伝へようと短歌を作る事が、本当に物事を豊かに感ずる心を鍛へる学問なのです」と語られた。

ご講義の後、参加者はバスに乘車して阿蘇草千里へと出発した。幸ひ好天にも恵まれ、広々とした草原を渡る風に吹かれながら解放感を味はった。放牧されてゐる牛や馬に戯れる者あり、和歌を詠む者あり、写生をする者ありと、各々阿蘇の大自然を満喫した。

△講話▽

夕食後、元日特金属工業株式会社常務取締役・国文研監事の加納祐五先生が「つながるはいのちのすがた」と題して御講話をされた。先生は「皆さんが班友と心を開いて話し合つてゐるときに心が満たされてゐるやうに感じたとしたら、それがいのちを感じることでないか」と話され、いのちを感じるこ



と、いのちが通ずること、そして自分のいのちが自然のいのちにつながることを大切さをしみじみと語ってゆかれた。

△慰霊祭▽

まづ福岡県立三池高等学校教諭の濱田清人氏によって慰霊祭の説明が行なはれた。その後、参加者一同は屋外の広場に設けられた祭壇の前に整列した。参加者の気持ちを整へるべく、長内俊平先生が、故三井甲之先生の

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを
の和歌を朗詠され、慰霊祭は始められた。

御祓ひの後、警蹕の声の響く中、戦時平時を問はず祖国日本の為に尊い命を捧げられた総ての祖先の御霊を最敬礼でお迎へする、降神の儀が行なはれた。献饌の後、参加者一同を代表して、古川修氏が祭文を奏上、上村和男氏が明治天皇・昭和天皇の御製を拝誦された。

△祭文▽

われらここ火の国阿蘇のカルデラに集ひ第三十七回全国学生青年合宿教室を営みて中日の



夜を迎へぬ秀峰大阿蘇の麓に今し天つ日は沈みて夕
風そよぐこの合宿地のさやけき草原を齋庭と定めき
よめまつりてとこしへにみ国守ります遠つみ祖たち
またみ国のために尊きいのちを捧げまししあたまの
はらから達のみ霊を招きまつりなぐさめまつらんと
み祭り仕へまつらむとす

願れば過ぎし大御軍の敗れし時よりみ国の行末い
よいよ激しく危ふき道を行かむとするにひとへに昭
和天皇今上天皇の御聖徳に導かれわが国の国際地位
はいよいよよたかまりゆきぬ

しかれども民族の自立に基づく世界の新たなる国
造りの行はれつつある険しき国際情勢のなかみ国を
守りましし御代御代のすめらみことまた御代御代の
すめらみことに仕へ奉りしみ祖達のたふときまごこ
ろをともしれば忘れゆくときにその外交・その教育・
その国防等に憂ふべき嘆かふべきこと打ち重なり再

びみ国を危ふき道に立たしむるかと胸ふさがれ憂ひかへりみしめられつつ諸講義に耳を傾け
天皇の大御歌あるいは古人の言の葉を仰ぎひたすらにみ国の守りを乞ひのみまつり老ひも若
きもろ共に心を鍛へ言葉を修め日本文化の良き伝統を学び共に立つべき友となりなむと朝
夕につとめはげむさまをみそなはし給へ畏かれどもいましみこと達みたまの大き導きにより
み国の行手を守らせ給へとこの合宿教室参加者一同に代はり古川修謹み敬ひ恐み恐みも白す

(明治天皇御製)

歌

すなほなる人の心をそのままにあらはすものは歌にぞありける

孝

まづしくもすごせる親につかへつついそしむ子らが心かなしも

友

したしめば外国人もおのづから心をおかぬ友となりけり

商

外国にしたしみてこそあきなひのみちはいよいよひろくなりけれ

道

遠くとも人のゆくべき道ゆかばあやふきことはあらじとぞ思ふ
ひらくれば開くるままに思ふかなあらぬ道にや人のいらむと
しきしまの大和心をさきだてて道ある国と人はいはれむ

（昭和天皇御製）

終戦時の御製

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも
身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民を思ひて
国がらをただ守らんといばら道進みゆくともいくさとめけり

戦災地視察

戦のわざはひうけし国民をおもふ心にいでたちて来ぬ
わざはひをわすれて我を出むかふる民の心をうれしとぞ思ふ
国をおこすもとるとみえてなりはひにいそしむ民の姿たのもし

第四日（八月十一日）

△講義▽

午前中は、神奈川県立湘南高等学校教諭・亜細亜大学非常勤講師、山内健生先生が、「『深い泉の国』の私たち」と題して話された。先生は、日本が太古の昔から伝統の生き続けてゐる国であることを、身近な例として国民の祝日が単なる休日ではなく、歴史的根拠を有してゐることを挙げながらわかりやすく解説された。最後に紹介されたトーマス・インモースの『深い泉』の詩が心に残った。

△講話▽

午後からは、国文研常務理事兼事務局長の長内俊平先生が「若き友らに語りかける言葉―心のふる里



「と題して話された。先生は、日本の歴史・文化を知るといふことは自分たちの血に日本のいのちが流れてゐることを実感することであり、「もし日本人とは何ですかと聞かれたら、恥づかしいけれども、私ですと答へるしかない」と、「知ること」の本義を訴へられた。先生のお話はご自身のご体験に深く根ざしたもので、強い感動を受けた。

△短歌全体批評・班別相互批評▽

前日までに参加者全員が提出した短歌は、先生方に選歌され、事務局の夜を徹しての作業により、一冊の歌稿に纏められた。そして、全員に配布された歌稿をもとに日商岩井株式会社勤務されてゐる澤部壽孫先生が創作短歌全体批評を行なはれた。先生は各班ごとに歌を選ばれ、詠んだ者の思ひを推し量りながら、表現の不正確な所、文法上誤りのある所を示され、一首一首丁寧に直された。その後、それぞれは班室に戻り、班員一人一人の歌を全員で読み味はひながら相互に添削をしていった。自分の作った歌を皆の前で読むことは照臭くもあつたが、歌を通じて心情を伝へ合ふことにより、班員同士の交流はより深まっていた。

△夜の集ひ▽

最後の夜を迎へ、厳しい日程を消化してきた参加者も、この時ばかりは大いに宴に興じた。

班毎、大学毎、地区毎などの様々なグループが登場し、趣向を凝らした色々な出し物に笑ひと拍手が絶えなかった。

第五日（八月十二日）

△合宿を顧みて▽

国文研副理事長・寶邊正久先生が登壇され、「心から思ふことを言ふ、そしてその言葉に耳を傾けて聞くといふことを、この合宿を通じて私達は学んできたのではないか」と顧みられた。そして、吉田松陰の『士規七則』や佐久間艇長の遺言に触れられ、先人のまごころからでた言葉を自分の人生の指針とすることの大切さを語られ、「本当の学問をしたいと思ふ心と、日本を大きな危機の中からどう守るのかといふことは、大きなところで繋がってゐるのです」と切々と述べられた。

△全体感想自由発表▽

閉会式も間近に迫り、合宿教室を通じての各自の所感を全員の前で自由に披瀝し合ふ全体感想自由発表の時間となった。参加の動機はそれぞれ違つても、この五日間寝食を共にし、



友の言葉に、そして先人の言葉に心を寄せ合った体験は、各人の心にしっかりと刻みこまれたに違ひあるまい。学生、社会人を合はせて二十六人が登壇し、ある者は胸を張り堂々と、またある者は涙ぐみ、声を震はせながら、思ひ思ひの所感を述べていった。

「人と心の底から通じ合へるのは無理なのではないかと思ってるのだが、自分の気持ちを堅くならず素直に言ふことができた」「この合宿で自分がやりたいと思ってるた学問がはっきりし、今、自分がやらなければならぬことが分かった。そしてそれを真剣に話し合へる友人も見つけることができた」「日頃、興味を持たない憲法や天皇のことをもっと考へなければならぬと気付いた」「この合宿で人を信じるといふことを学んだ」などの声が聴かれ、またある学生は班員と心から語り合へた嬉しさを歌に詠んで発表するなど、皆、生き生きと語ってくれた。

△閉会式▽

参加者全員が持てる力を全て尽くして取り組んできたこの合宿教室も、いよいよ閉会式を迎へた。まづ全員で国歌を二度斉唱した後、参加学生を代表して中央大学文学部三年の草野直樹が「参加者一人一人がこの合宿に来年も友達を連れてくればつながりも広がり楽しくなるでせう。そしてそれが主催者の方々へのお礼にもなるでせう」と挨拶した。続いて主催者を代表して、国文研副理事長・九州造形短期大学教授の小柳陽太郎先生は故加藤敏治先生（元・八代市助役、平成元年歿）の「ぼくはこの合宿において初めて誠の師を、誠の友を見いだし得たのである。誠の人生がこの合宿により始まったのである。合宿は終はったのではない。今日から本当の合宿が始まったのである」といふお言葉と和歌「友らより友らに伝はるとこしへにたゆる日あらじ我らの信は」を紹介され、「この信といふ言葉は友人や先人と心が通じあふ、その経験を信じることなのです」と語られた。さらに明治天皇の「国のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて」の御製を読まれ「神洲不滅といふ言葉は、イデオロギー的なものではなく、日本が神々の力によって守られてゐるといふことで、先逝きし友らの御霊をうつくしく感ずるといふことなのです」と語られ挨拶を終へられた。

式の後、ロビーで、あるいは班室で、お互ひに別れを惜しむ姿が見受けられた。新しい友情の芽生えた我々は、来年の再会を約して阿蘇の地を後にしたのであった。

合
宿
詠
草



つどひの広場に揚げられた明治天皇御製

△学生・社会人▽

公正不動産株

安東祐範

台風に行く手をはばまれ乗り換へて乗り継ぎて来し阿蘇の合宿

金沢工業大 工四年

平野賢

いつ出るかわからぬ電車の中でも座席合はせて友と語らふ

○

講義

早稲田大 政経二年

伊藤華恵

死を前に務め果たせし先人の姿学びて心ふるへる（佐久間艦長の遺書）

福井工業大 工二年

大久保貴光

何事の起こるやもしれぬと痛感す国際情勢の激動を聞きて

東北大理三年

古閑信彦

湧き出づる熱き思ひを語る師のまなざし見れば心うたれり

防衛大理工四年

濱口和久

繰り返し情熱持ちて語りたる師のみ姿に涙ながしぬ

熊本県教育庁文化課

丸山伸治

師の君は声高らかに故郷のなつかしき歌うたひたまへり

福岡女学院大 人文一年 庄司 愛

教へられし短歌づくりも黙想も合宿の学びがもとと知らさる (黒岩先生へ)

○

朝の集ひにて

鹿兒島大 農二年 葉棚 幸輝

緑深き阿蘇の山々眺めつつ友らと迎ふすがすがしき朝

中村学園大 児童二年 松隈 香代子

各人の思ひをこめて君が代を歌ひし我らの声は一つに

福岡県立福岡中央高校教諭 末松 徳昭

前に立ち体操指揮する青年の号令の声に自信みなぎる (最終日)

○

班別研修にて

湘北短大 生活二年 出野 晶子

思ふこと包み隠さずありのまま話せることのなんとうれしき

早稲田大 社二年 高橋 秀和

お互ひに心開きて言の葉を思ひのままにぶつけ合ひけり

東京大理三年 村上純一

我が心つかみたりしと思へれどまだ飾れるを気づかされたり

○

レクレーションにて

目白女子短大 国語国文一年 村松美紀

母馬の後追ふ子馬見つめゐて思はずこぼるる友のほほゑみ

九州大法一年 白島 亘

あざやかなる山の緑に囲まれて友と語らふ時ぞ楽しき

熊本商科大 一年 喜多村 純

大阿蘇の峰より白き雲わきてひぐらしの声聞こえくるなり

福岡大経 一年 辛島英生

はてしなく広がる緑の草原に心あらはれ飽かず眺むる

乃木神社 松吉宣和

山すその草喰む牛の群れ近くゆけばゆるりと顔ふりむくる

防衛大 管理四年 森安宏徳

ふきあぐる白きけぶりもををしけり阿蘇の五山の峰眺むれば

厚木市教育委員会 飯島一雄

父を呼ぶ楽しげな子を見るにつけ我が子と共に阿蘇にと思ふ

○ 短歌創作

東 和 大 経営二年 善本隆之

歌を詠むこと難しく様々の言葉をもつと知りたいたいと思ふ

鹿児島大 農三年 椎原恒介

阿蘇に来て君が作れる歌よめば優しき父母浮かび来る心地す

日 本 大 文理一年 田代吉弘

和歌嫌ひと語りし友は今我によき歌できたときし出しにけり

○ 短歌相互批評

九州 大 文一年 別府秀俊

夜更けて眠気さすともまどろして友のみ歌に心くだくも

熊本 大 文三年 有田ゆき

友だちの思ひに心働かせ言の葉さぐる一つ思ひに

早稲田大 理工三年 白井秀之

ともだちの批評聞くほど我が歌のつたなきことを身に滲みて思ふ

○

班生活

尚綱大 文四年 白杵直子

師を囲み友と語らふひとときに我の心もいつしか和む

西南大 法二年 吉藺淳一

師や友と夜遅くまで議論して時のたつのも忘るる心地す

拓殖大 外一年 小島真美

師や友と共に学びて語り合ひ不思議なまでに心やすらぐ

東海大 教養四年 松本敏浩

班友と夜な夜な語る部屋の内日々に親しき思ひ増しゆく

富山大 理二年 長和俊

阿蘇の地に共に学びし五日間すばらしき友を得たる思ひす

熊本商大 経一年 福本信重

更くるまで語り合ひける班友と別るる寂しさ募りくるかな

○ 夜の集ひにて

富山大 經二年 加治丈彦

合宿の緊張ほぐるる一時よ「夜の集ひ」の楽しや楽しや

日植緑地(株) 山本典生

○ 学生の熱のこもった歌声は聞きゐる者の心打つかな

全体感想自由発表

京都外語大 外四年 新谷幸恵

かねてより思ひをりしこと飾らずに語るを聞けば我もうれしき

九州大 法二年 有馬陽子

泣きつつも壇上に立つ友どちの思ひを聞きて深くうなづく

大正大 文四年 岡山英一

○ ハンカチを手に握りしめしみじみと語る女生徒に心震へぬ

最後の班別懇談

九州造形短大 デザイン一年 木村祥子
阿蘇の地に学びし多くを忘れじと強く誓へり真の友らと

九州大 工三年 松岡篤志
心から己が思ひを語りゆく友の眼の清らなるかな

○
セミナーを顧みて

拓殖大 外二年 小谷典子
どきどきと緊張しつつ参加せし合宿の日々に実り多しも

淑徳大 社会福祉四年 西島千尋
阿蘇の地で学びしことを忘れずに優しき真心育ててゆきたし

佐賀大 理工四年 白木潤
様々な人の姿に様々な生き様を見て心をどりぬ

明治大 政経二年 片山明子
美しき人の心のかよひあふこの夏の日を我は忘れじ

無職 小馬谷秀吉

今年もまた老軀ひつさげ若きらと阿蘇の麓に学びてうれし
若きらと感動ともにわかちあひ阿蘇の合宿やまなみすがし

○

別れ

熊本大文三年 延塚恭子

思ふこと心ゆくまで語らひし班友との別れ名残をしきかな

早稲田大社二年 中島淳子

握りあひし手のぬくもりよ込められし友の心を我は忘れじ

ヤマハ音楽教室システム講師 橋本加枝

合宿の記念に残る刷文を持ちて別るる友らしたはし

〈大学教官有志協議会・国民文化研究会〉

国民文化研究会理事長 小田村 寅二郎

吹き荒るる嵐の音はすさまじくすべての交通路は遮断せりとふ
さはあれど夜更くるまでに集ひ来し友らの数の増しゆくがうれし
先き逝きし友らのみたまのみ守りを現しく感じぬこの開会に

(株)宝辺商店代表取締役 寶 邊 正 久

子を連れて馬が草喰む丘の上風を涼しと子ら声あげぬ
幾年をへだててけふを若きらと草千里ゆく風にふかれて
嵐去りていよいよ青き草山に真日照るけふをうれしと思ふ

九州造形短大教授 小 柳 陽太郎

「VOICE」の広告を見て二十秒で参加を決めしといふ阿久根健君と語る
広告を見るや忽ち合宿参加を決めたりといふ心すがしく

かねてより心の先輩を求めきしといふ若き心のたかぶりやよし
「機」を求めて旅行きし若き松陰をふと思ひ出づ君がことばに
ためらはず来てうれしくも数々の友に会ひえしとよろこび語る

君と今ここに会ひえて語りあふ不可思議のえにし思はざらめや
今の世にたぐひ稀なる青年の躍る心にふれしうれしさ

国民文化研究会事務局長 長内俊平

八木秀次君の導入講義をききて

いかにぞと待ちみし君の壇上にいまのほりゆく姿に見入る
いくばくかたかぶりをるらしきこえくる声はつねよりかん高くして

十二枚の講義資料をつぎつぎに要をつきつつ君は説きゆく
貴きものなほざりにしてかへりみぬ世の風潮をいかにぞと君は

学問とは人の道なりととき給ふ小林先生の言（ことば）に泣きしと言ふかも
貴きにふれてしうごく感動を信ぜよと説きて終りき君は

日夜なく忙しきなかかくばかり学びし友を誇らしと思ふ
君壇上ゆ去りたるのちもしばらくは声のひびきの耳にのこれり

日商岩井(株)大阪エネルギー第一部長 澤部壽孫

台風の荒れし日なれど若きらのつぎつぎ集ひ来大阿蘇の地に

若きらのこの合宿にひた寄する熱き思ひにこたへざらめや

今は亡き大人（うし）らのみたまのまもりとふ師のみ言葉に胸のつまり来

○
武蔵野ゆ筑紫ゆ厚木ゆ寄せまししみ歌み文をありがたくよむ
武蔵野の師に告げまほしなにごとひのなくて合宿終はらむとすと

株不動産コンサルタント代表取締役

松吉基順

草千里ゆうがすみたる中岳のこごしき山肌あかず眺むる

草千里ゆ中岳のかた眺めをれば白雲かとまがふ噴煙わきくも

草千里の南にそびゆる烏帽子岳裾野ひきたる姿よろしも

縁なす草千里ヶ浜の真中なる池面静けく白ひかるなり

草千里人け少なきかた隅の赤牛の群うごくともなし

夏なれど陽ざしの淡き草千里吹きくる風の肌にすがしも

宮崎産業経済大学教授

川井修治

夜の集ひにて

四日間の礙りし思ひのほぐるらむ軽き会話と笑ひ声満つ

即興の寸劇よろし女子（おとめこ）のきはやかに歌ふ合唱もよし

吾もまた声を張り上げ肩組みて「北辰斜めに」歌ひ躍りぬ

九州の学生ごぞり「元寇」を歌ふ諸声部屋内を圧す

真直ぐなる誠心に結ばれし若きらあればゆめ嘆かじな

合宿運営委員長 熊本市役所清掃部技師 折田豊生

閉会の宣言終はるや自づから拍手起こりて心満たさる

長かりしこのひととせをかへりみて思ふは友らの力なりけり

集ひ来し友らがなかにもいつの日か親しく語らふ友のあるらむ

壇上の国旗を見つつこの集ひ末永かれとひた祈るかも

熊本県立第二高校教諭 白濱裕

開会るとき近づくも窓辺打つ風雨いよいよ繁くなりゆく

つつがなき旅なれかしと念じつつひたすら電話の連絡を待つ

はからずも数多（あまた）の友の集ひきて合宿開けりありがたきかな

日産自動車株 内海勝彦

己が身の足らはぬ姿気づきしとふ友の言葉のありがたきかな

我が感動言葉にできぬと黙しをる友の姿のたふとかりける

かくまでも思ひをりしか友どちの姿し見れば涙ながるる

この集ひかりそめならず今日よりは己が学びに励まん友ら

（那須三元選）

昨夏の阿蘇高原で開催された第三十七回合宿教室のレポートがやうやく完成にこぎつけた。各種講義等についてはすべてその要旨を収録してゐるので、どうぞあらためて味読していただきたいと念願する。読み進むうちに、必ずやそれぞれの講義の後に設けられてゐた班別討論の場面も甦り、車座で語り明かしたあの日あの時の友の言葉や表情も眼に浮かんでくることであらう。ぜひ今後の交流のよすがとしても本書を活用していただければ幸ひである。

なほ本書の各講義録の中扉には合宿地阿蘇に因んだ風景写真を載せてゐるが、その中の数点は阿蘇町役場商工観光課の資料からお許しを得て転載させていたものであり、ここに記して謝意を表する次第である。

さて、今夏の合宿教室はすでに八月七日（土）から十一日（水）までの四泊五日間に開催されることと決定してゐる。場所は神奈川県厚木市にある厚木市立七沢自然教室、外来講師としては文芸評論家で東京大学名誉教授の佐伯彰一先生、同じく評論家で筑波大学名誉教授の村松剛先生をお招きすることとなつてゐる。多くの学生、青年諸氏の御参加を願ひつゝ、編集の筆を擱く。

平成五年三月一日

編集委員

山内 健生

占部 賢志

——日本への回帰——

(第28集)

平成五年三月十日発行

定価 七〇〇円

〒 二四〇円

編者

大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

編集委員代表

小田村寅二郎

発行所

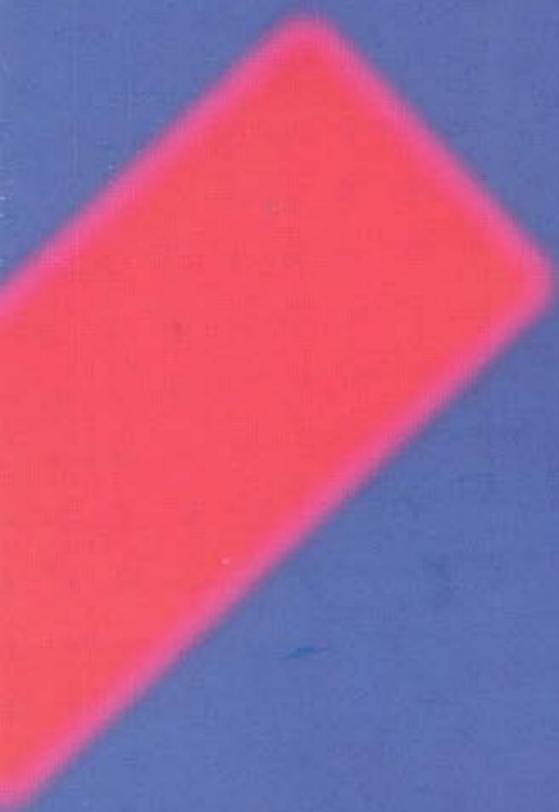
社団法人 国民文化研究会

東京都中央区銀座

七一〇—一八柳瀬ビル

振替 (東京) 六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替へいたします



大学教官有志協議会編
社団法人 国民文化研究会